岩手県埋文センター文化財調査報告書第86集

黄金堂遺跡発掘調査報告書

岩手地区広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
岩手北部土地改良事業所

岩手県埋文センター文化財調査報告書第86集

黄金堂遺跡発掘調査報告書

岩手地区広域農道整備事業関連遺跡発掘調査

序

本県には数多くの埋蔵文化財包蔵地が存在しており、昭和59年３月末における遺跡台帳によれば6,000ヶ所が登載されております。

貴重な文化財を保護することと、現代生活を豊かにする開発指向との調和のとれた施策は今日的課題であります。

当埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財保護の立場に立ち、県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって破壊され消滅する遺跡について事前の発掘調査を行いその記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手郡岩手町、西根町、松尾村を通過する広域農道整備事業に関連して、昭和58年度に発掘調査した岩手町黄金堂遺跡の調査結果を収録したものであります。

調査の結果、特筆される遺構として尾根状中腹を切り盛り造成による平坦面に建立された掘立柱建物跡があります。黄金堂遺跡は寺院跡と推定され今日に至った経緯がありますが、遺跡の立地や遺構内容等からその可能性が強まったと思われます。このことは当地方における文化史を考える上での貴重な資料といえましょう。

この報告書が研究者のみならず、一般の方々にも活用され、埋蔵文化財理解の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご協力、ご援助賜わりました岩手北部土地改良事業所、岩手町教育委員会をはじめ関係各位に心から感謝申し上げますと共に今後のご指導、ご援助をお願いいたします。

昭和59年12月

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター

理事長　金　子　彰　吉

財団法人　岩手県埋蔵文化財センター組織

役　員

理事長	金子彰吉	（県教育長）
副理事長	尾沢重遠	（県教育次長）
常務理事	熊谷正男	（県立埋蔵文化財センター所長）
理　事	吉田良和	（県農政部次長）
〃	高橋健之	（県林業水産部次長）
〃	穂積昭慈	（県土木部次長）
〃	板橋　源	（県立博物館長）
〃	草間俊一	（県立盛岡短期大学長）
〃	小形信夫	（元常務理事）
監　事	佐藤公志	（県教委総務課長）
〃	小野寺英二	（県教委財務課長）

職　員

所　長	熊谷正男
副所長	宮　英一
所　付	吉田　努
〔総務課〕	
総務課長	菊池　勉
庶務係長	阿部詔夫
主　事	戸草内幸男
〃	立花多加志
技能員	佐藤春男
〔調査課〕	
調査課長	近藤宗光
主任専門調査員	昆野　靖
〃	国生　尚
専門調査員	片方宗明
〃	長沼　彬
〃	大原一則
〃	渡辺洋一
〃	田鎖寿夫
〃	佐々木嘉直
〃	栃沢満郎
〃	平井　進
専門調査員	中村良一
〃	田村壮一
〃	岩渕　久
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	石川長喜
〃	三浦謙一
〃	高橋与右衛門
〃	高橋義介
〃	佐々木清文
〔資料課〕	
資料課長	名須川溢男
専門調査員	菊池利和
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	酒井宗孝

例　　言

遺跡名	黄金堂遺跡
遺跡コード番号	KE07－1193
遺跡所在地	岩手郡岩手町大字一方井字大森
事業名	岩手地区広域農道整備事業
事業主体者	岩手県　岩手北部土地改良事業所
調整機関	岩手県教育委員会　文化課
調査機関	財団法人　岩手県埋蔵文化財センター
発掘期間	昭和58年7月7日～10月7日
調査担当者	主任専門調査員　国　生　　尚 専門調査員　石　川　長　喜
調査記号	KG83
関連分野の調査	人骨鑑定　野　坂　洋一郎（岩手医科大学歯学部教授） 石質鑑定　佐　藤　二　郎（岩手県立大船渡農業高等学校教諭） 放射性炭素による年代測定　木　越　邦　彦（学習院大学教授）
協力機関	岩手町教育委員会
資料提供者	一方井公民館 高橋昭治　氏 遠藤太一　氏

目　　次

序
例言
目次
図版目次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
　1　遺跡の位置と現状……1
　2　地形……3
　3　黄金堂遺跡と周辺の遺跡……7
Ⅲ　調査の経過……14
Ⅳ　基本土層……19
Ⅴ　遺構と遺物……23
　1　掘立柱建物跡……23
　2　竪穴住居跡……27
　　(1)　A20竪穴住居跡……27
　　(2)　B20－1・2竪穴住居跡……28
　　(3)　B19竪穴住居跡……32
　　(4)　D16竪穴住居跡……34
　　(5)　D14－1・2竪穴住居跡……36
　　(6)　C6竪穴住居跡……40
　　(7)　B5竪穴住居跡……42
　　(8)　E4竪穴住居跡……44
　3　焼土遺構……45
　　(1)　E5焼土遺構……45
　　(2)　C6焼土遺構……45
　　(3)　D18焼土遺構……45
　　(4)　D17焼土遺構……45
　　(5)　D10焼土遺構……45
　　(6)　C6焼土遺構……47
　4　土壙……47
　　(1)　D13土壙……47
　　(2)　D12土壙……47
　　(3)　D7土壙……47
　　(4)　E6土壙……49
　　(5)　D5土壙……49
　　(6)　B4土壙……49
　　(7)　D2土壙……49
　　(8)　C2土壙……49
　5　D14土葬墓……49
　6　溝跡……50
　　(1)　1溝跡……50
　　(2)　2a・b・c溝跡……50
　　(3)　3溝跡……50
　　(4)　4溝跡……52
　7　遺物包含層……52
　8　遺構以外の遺物……55
　　(1)　縄文土器……55
　　(2)　石器……58
　　(3)　その他……59
Ⅵ　まとめ……60
　1　掘立柱建物跡……60
　2　竪穴住居跡……61
　　(1)　竪穴住居跡の構造……61
　　(2)　竪穴住居跡の立地と長軸方向……62
　　(3)　竪穴住居跡の建て替えについて…63
　　(4)　竪穴住居跡の年代……63
　3　土壙……64
　4　遺物……65
　5　まとめ……65
Ⅶ　黄金堂遺跡出土の人骨について……66
Ⅷ　黄金堂遺跡出土人骨
　　フッ素含有量について……69
Ⅸ　放射性炭素による年代測定……70

図　　版

第１図　位置図……4
第２図　地形図……5
第３図　地形分類図……6
第４図　黄金堂遺跡の地名……9
第５図　周辺の遺跡分布……10
第６図　黄金堂遺跡伝世品……13
第７図　調査範囲図……16
第８図　地区割図……17
第９図　基準点配点図……18
第10図　Ｃ地区遺構配置図……20
第11図　Ｂ地区遺構配置図……21
第12図　Ｄ９掘立柱建物跡柱穴断面図……24
第13図　Ｄ９掘立柱建物跡……25
第14図　Ａ20、Ｂ20－１・２竪穴住居跡……29
第15図　A20、B20－1・2竪穴住居跡柱穴断面図…31
第16図　Ｂ20－１・２竪穴住居跡出土遺物…32
第17図　Ｂ19竪穴住居跡……33
第18図　Ｂ19竪穴住居跡柱穴断面図……34
第19図　Ｂ19竪穴住居跡出土遺物……34
第20図　Ｄ16竪穴住居跡……35
第21図　Ｄ16竪穴住居跡出土遺物……36
第22図　Ｄ14竪穴住居跡……37
第23図　Ｄ14竪穴住居跡炉跡、柱穴断面図…38
第24図　Ｄ14竪穴住居跡出土遺物……39
第25図　Ｃ６竪穴住居跡……41
第26図　Ｃ６竪穴住居跡出土遺物……41
第27図　Ｂ５竪穴住居跡……43
第28図　Ｂ５竪穴住居跡出土遺物……43
第29図　Ｅ４竪穴住居跡……44
第30図　Ｅ４竪穴住居跡出土遺物……44
第31図　焼土遺構……46
第32図　Ｄ10焼土遺構出土遺物……47
第33図　Ｄ12土壙出土遺物……47
第34図　土壙……48
第35図　Ｄ14土葬墓……50
第36図　溝跡……51
第37図　縄文土器……53
第38図　縄文土器……54
第39図　縄文土器拓影図(1)……56
第40図　縄文土器拓影図(2)……57
第41図　石器……58

写　　真

図版１　遺跡遠景……73
図版２　調査区全景……74
図版３　黄金堂遺跡伝世品……75
図版４　Ｄ９掘立柱建物跡……76
図版５　Ａ20竪穴住居跡……77
図版６　Ｂ20竪穴住居跡……78
図版７　Ｂ19竪穴住居跡……79
図版８　Ｄ14竪穴住居跡……80
図版９　Ｄ16・Ｄ６竪穴住居跡……81
図版10　Ｂ５竪穴住居跡……82
図版11　Ｅ４竪穴住居跡……83
図版12　土壙……84
図版13　土壙……85
図版14　溝跡……86
図版15　溝跡・焼土遺構・土葬墓……87
図版16　竪穴住居跡遺物……88

図版17　土器……89
図版18　土器……90
図版19　石器……91
図版20　その他の遺物……92
図版21　人骨……93
図版22　人骨……94
図版23　人骨……95

Ⅰ　調査にいたる経過

岩手町、西根町、松尾村を結ぶ県営岩手地区広域農道整備事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地のとり扱いについての協議は昭和54年度から県教育委員会事務局文化課と県農政部農地開発課との間でもたれた。

昭和55年６月に文化課で事業計画ルートに沿って遺跡の分布調査を行い、岩手町25遺跡、西根町14遺跡、松尾村４遺跡の計41遺跡が確認された。この結果をもとに遺跡立地と路線ルートのかかわりや工事工法の変更を含めての協議が重ねられ、止むを得ず工事によって破壊されたり、遺跡の現況を大きく変える遺跡について事前の発掘調査を行うことにした。

調査は当埋文センターが岩手北部土地改良事業所との契約にもとづいて昭和57年度から実施している。本報告書に関係する岩手町黄金堂遺跡は昭和44年頃礎石の存在や鉄磬片が発見されたことなどから古代寺院に関連する遺跡ではないかと注目されていた。昭和55年度の分布調査時には土師器片の表面採集があった。昭和57年12月に文化課、岩手北部土地改良事業所、当埋文センターの三者で現地立会いの上、具体的調査方法等を打合せ、昭和58年７月から発掘調査を開始した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の位置と現状（第１図）

位置　黄金堂遺跡は国鉄東北本線沼宮内駅から北西（310°）方向に約4.6km、岩手町一方井の中心からは北北東（15°）方向に約1.7kmの位置にあって、岩手郡岩手町大字一方井字大森の地区に所在する。

岩手町は岩手県の北部に位置し、北上川の源流域一帯の地域を行政区画とし、岩手郡に属している。

岩手町は昭和30年に、沼宮内町を中心にして、川口村、一方井村、御堂村の一町三村が合併して出来た町である。遺跡は旧町村でいうならば、一方井村に位置することになる。

一方井地区は岩手町の西部に位置し、一方井川流域の標高約250mの盆地状の台地上に中心が

あって、岩手町としても早くから人が住み、集落の形成された地域である。

位置および、調査対象範囲をさらに詳細に示すと次のようになる。

球面座標においては　北緯39°58′54″　東経141°10′38″

平面直角座標（第10系）においては　　X－1925～1985m　Y＋29253～29590m

標高は　297～331mである。

遺跡はまた、次の図上に位置している。

5万分之1地形図　　NJ－54－13－13　　「沼宮内」　ぬまくない

2万5千分之1地形図　　NJ－54－13－13－1　「沼宮内」　ぬまくない

国土基本図（5千分之1）　KE07

現状　黄金堂遺跡の所在する地域は、高山（三等三角点「一方井」がある。）429.6mを最高峰とする尾根に囲まれ、沢に沿ったわずかな平地と、幾分なだらかな傾斜面があって、小盆地のような景観がある。（第2図）

沢は無名の沢が地域の北側（以前は）を東に流れ、一方井川の支流である大森沢（地元ではどじの沢という。）に合流する。

居住者は現在遠藤金四郎氏と遠藤太一氏の二世帯である。

地域の奥まった所には樹高の高い木立に囲まれた一宇の観音堂がある。

平地やなだらかな斜面は水田か畑地となっていて、畑地はタバコが主で、次に小豆、デットコーンなどが作付けされている。

道路は沼田から北上して十二夜に越える町道十二夜線だけであるが、今後は太田、山辺内方面と広域農道によって結ばれることになる。

遺跡の立地を考える上で重要な地域の微地形を見ると、山深い場所であるにもかかわらずかなり多量の土が移動していることがわかる。

まず、第2図（図化年代不明）の地形図を見ると、地域を流れる沢は北側の山際を流れているが、現状は現道のすぐ北を道に沿って流れている。

次に、水田を見ると、これも以前は沢沿いの平地に限られていたが、現在は傾斜地も造成し開田している。

畑地においてもB地区で確認されたように、地形の起伏を造成している。

このように全体として旧地形をそのままに残している部分は限られているようである。遺跡の立地や、遺構の配置と地形との関係などを考えるにあたっては、この点を充分考慮する必要があろう。

2　地　形（第２、３図）

岩手町をはじめ、西根町や松尾村は北上山地と奥羽山脈を画して流れる北上川の上流域にあって、東に北上山系が連なり、北部、西部、南部は奥羽山脈に属する、七時雨山、八幡平、岩手山の連峰によって取り巻かれ、中央部は凹地となっている。

凹地域は低高度の丘陵地、北上川及びその支流の松川、赤川、一方井川沿いの段丘及び氾濫原（谷底平野）、そして丘陵間、段丘上に、送仙山、白屋山、丹谷山、野駄森等の残丘的に残る幾つかの孤立山体より構成されている。

一方井周辺において最も広い範囲を占める丘陵地は、七時雨山の山地が南部分において丘陵へ移行し、赤川、北上川にさえぎられて好摩まで広がる。

全て起伏量100m以下の丘陵地であるが、一方井川を境にして北と南の丘陵は地形的に明瞭な差がある。

北部の丘陵（七時雨山山麓丘陵）は七時雨山より放射状に走る水系にきざまれる七時雨山の山麓丘陵である。起伏量は70～100mと南の丘陵と比較して幾分大きくなっている。

これに対して南の丘陵（土川丘陵）は全て北西～南東方向に一定の間隔をおいて平行して走る水系をもち、七時雨山からは独立した地形であると言える。この土川丘陵は起伏量50～60m以下と非常に低起伏で標高270～280mの定高性がみられる。また、頂部に平坦地を残す所もあり、台地の開析による丘陵であることを示す。

河岸段丘は、好摩をはじめ多くの集落をのせ、最も発達のよい段丘を中位段丘とした。この河岸段丘は平坦性がよく、北上川や松川、赤川、一方井川沿いに連続して分布し、主な台地である好摩台地、大更台地、松内台地とともに、一方井台地、高屋敷台地を形成している。

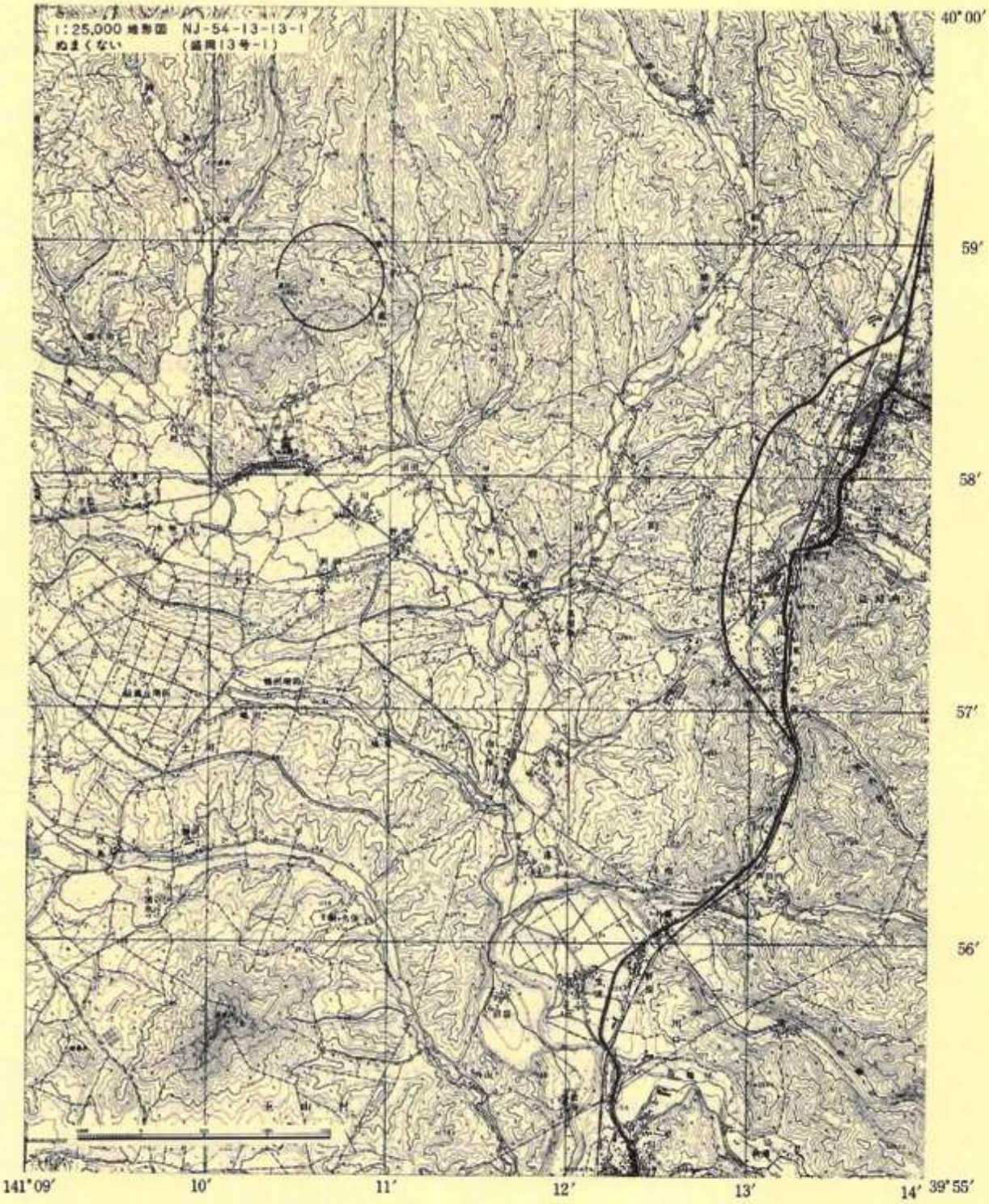
この段丘を盛岡段丘（1962　中川他）または好摩段丘（1960　小野）と呼び、小野は、この段丘の形成を平館盆地の湖水化による堆積段丘としている。

低地としては、各河川沿いに氾濫原が谷底平野となって分布する。また、山麓や丘陵地の端には随所に緩斜面が見られる他に、小規模な扇状地や崖錐扇状地が発達している。

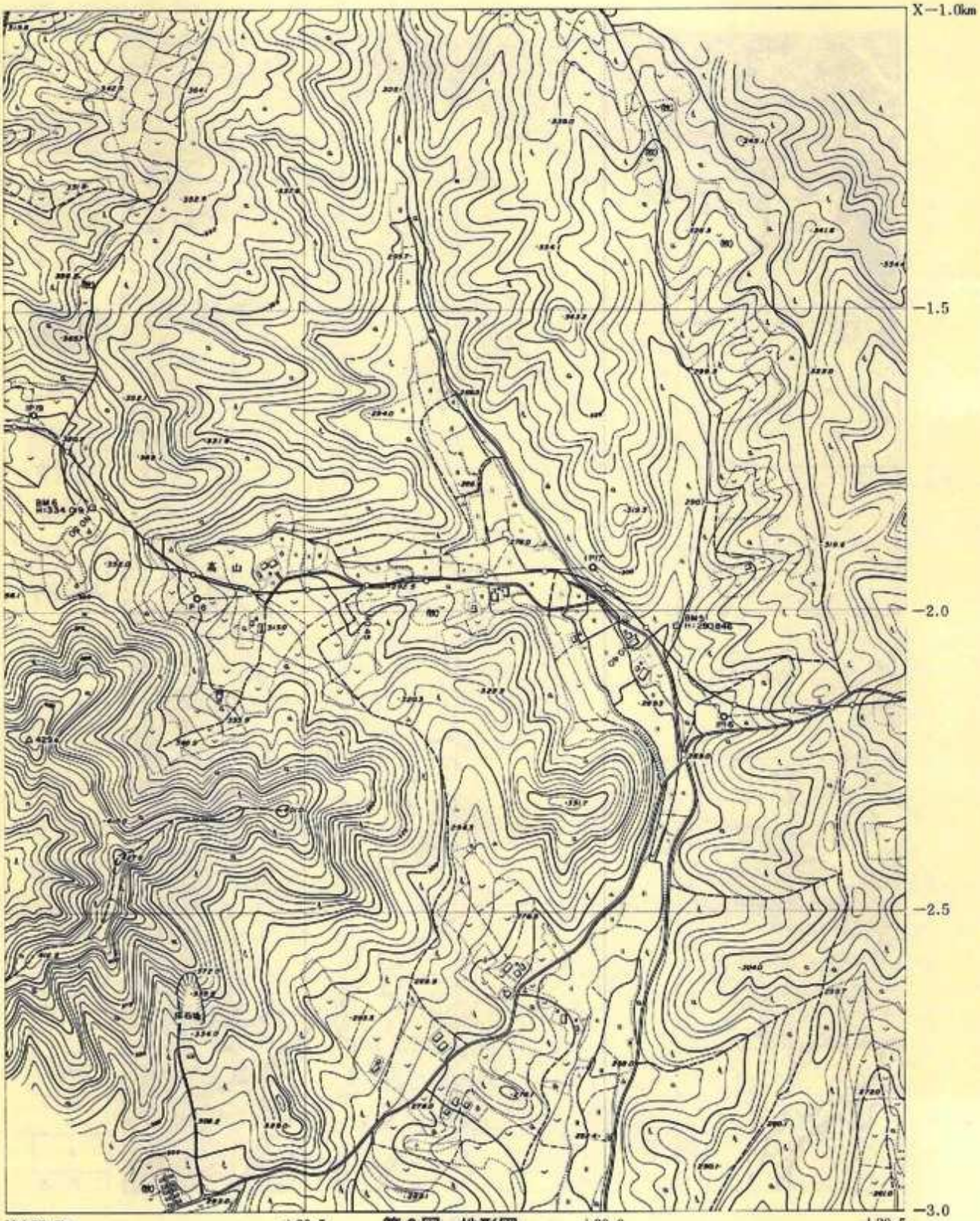
黄金堂遺跡にかぎって地形を見ると、高山山地と、七時雨山山麓丘陵の境に、大森沢の支流が流れ、この支流に沿った谷底平野が入り、その谷底平野は沢の源流部分で山麓地の緩斜面になる。遺跡の立地はちょうど、谷底平野から山麓地の緩斜面にまたがる範囲に位置している。

地形は次の文献を引用しまとめた。

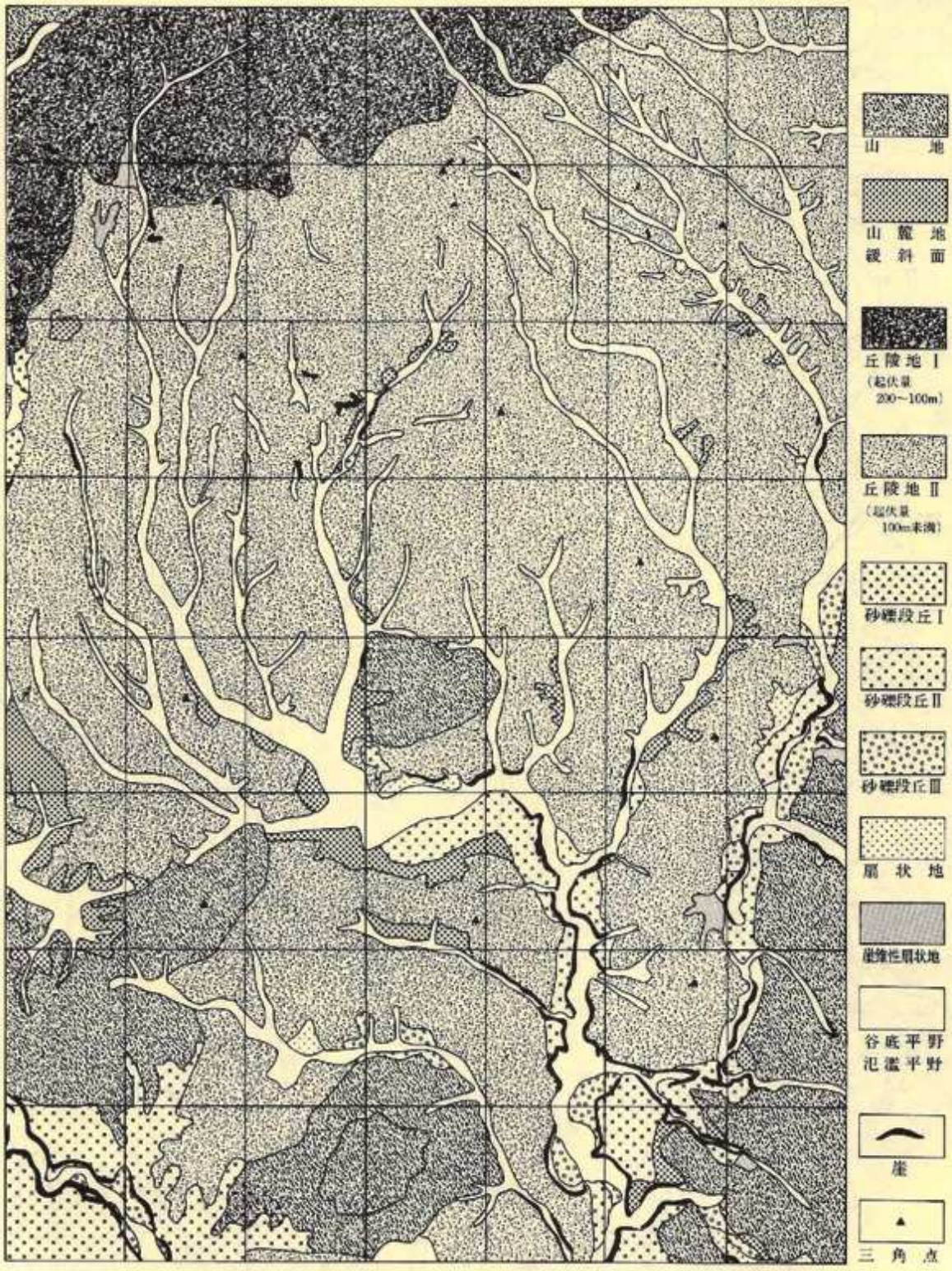
1975　岩手県　北上山系開発地域土地分類基本調査「沼宮内」


1:25,000 地形図 NJ-54-13-13-1
ぬまくない (盛岡13号-1)
40°00′
59′
58′
57′
56′
39°55′
141°09′
10′
11′
12′
13′
14′

第1図　位置図



第2図　地形図


山　地
山麓地
緩斜面
丘陵地Ⅰ
(起伏量
200～100m)
丘陵地Ⅱ
(起伏量
100m未満)
砂礫段丘Ⅰ
砂礫段丘Ⅱ
砂礫段丘Ⅲ
扇状地
崖錐性扇状地
谷底平野
氾濫平野
崖
三角点

第3図　地形分類図

3　黄金堂遺跡と周辺の遺跡（第５図）

周辺の遺跡　黄金堂遺跡周辺の遺跡分布について概観してみたいと思う。

遺跡は土師器や須恵器の出土する遺跡だけにかぎり、分布も岩手町の範囲とした。33遺跡を算えることができたが、第５図の範囲には32遺跡が分布している。

この分布図によって指摘できることは、一方井川流域における遺跡分布の多いことである。一方井川流域には21遺跡あるから全体の64％が分布していることになる。

岩手町内に竪穴住居跡群が数多く分布していることを最初に学界に紹介したのは、当時一方井尋常高等小学校長だった小田島禄郎氏であった。（文献１）

このような分布密度は小田島禄郎を始めとする多くの人々の分布調査の結果にはちがいないが、それにしても一方井を中心とする地域に分布が集中していることは、やはり注目すべきことであろう。

これらの遺跡に学術調査がおこなわれたのも岩手県としては比較的早い時期で、まづ、大正12年に、梅原末治、小田島禄郎による浮島古墳群の発掘調査に始まる。

浮島古墳群は15基確認されているが、大正15年に１基が発掘された。この古墳は、径24尺、高さ３尺５～６寸の円形で、ほぼ中央の封土中に、長さ７尺５寸、幅２尺の粘土をたたいて作った主体部があって、焼骨片や炭化材とともに、小玉６、刀子１が検出された。焼骨片や刀子などから、平安時代初期の火葬墳と報告されている。（文献２）（文献３）

その後、昭和32年に草間俊一氏によって４基の古墳が発掘調査された。径は11～９ｍ、高さは0.35～0.75ｍの円ないし楕円形で、ほぼ中央の地盤に長さ4.5～3.5ｍ、幅0.85～1.4ｍの舟底形の主体部があって、直刀、鉄鏃、ガラス玉、黒小玉、小銅環、鉄輪、土師器などが副葬されていた。大正12年のときのような焼骨片などは見られないことから、土葬墳と報告されている。（文献４）

集落や住居跡の調査は、昭和33年の沢口遺跡が最初であった。

沢口遺跡では２棟の竪穴住居跡が調査され、各々一辺が3.5ｍと6.5ｍの大きさで、北側と西側にカマドをもち、土師器の壺、甕、坏や砥石、紡錘車、土製勾玉、土製切子玉などが出土した。（文献４）

沢口遺跡の調査は住居跡単位のものであったのに対して、昭和43年の今松遺跡、仙波堤遺跡の調査は集落単位の調査といえるものであった。

今松遺跡は現在27ヶ所の住居跡が確認されていて、昭和43年には２棟が発掘調査された。住居跡の各々は一辺が８ｍ前後で、地表面から住居跡床面まで1.4ｍほどあって、竪穴は現在も埋

り切らずに凹地になっている。カマドは西壁中央に作られ、土師器の壺、甕、坏や、紡錘車、砥石などが出土した。（文献６）

仙波堤遺跡は住居跡が41ヶ所確認されていて、このうち４棟が発掘調査された。住居跡は各々一辺が6.3～９ｍで、壁の高さが１ｍ以上あって、耕作されていない所では凹地になっている。カマドは西壁の中央に作られ、土師器の壺、甕、坏や紡錘車、土製勾玉、小玉などが出土し、今松遺跡と共通する内容が多い。（文献６）

今松、仙波堤とも丘陵地縁辺の湧水を中心に住居跡が分布しており、集落の立地に共通点がある。この集落の立地については、今松、仙波堤にかぎったことではないようで、土師器や須恵器の出土地点を地形区分との関係で見ると、山地、丘陵地、段丘、扇状地などの縁辺に立地しており、そのうちの多くは湧水が現在もあるか、あるいは湧水が過去にあったと思われる地形を中心に分布している。このことは一方井を中心とした古代集落の立地上の傾向を示しているものと思われる。

一方井地区では、集落の調査の他に、黄金堂遺跡との関連で注目しておきたい調査がある。それは、昭和35年のどじの沢小堂跡の発掘調査である。黄金堂遺跡もかなり山奥に立地しているが、どじの沢小堂跡はさらに山の奥地に立地している。

小堂跡は尾根の端に造成面を作り、ここに３×３間の掘立柱建物をたてたもので、須恵器、八稜鏡、小鰐口、板状鉄器が出土し、年代は平安時代前期と推定された。（文献５）

黄金堂遺跡とは多少年代的に差があるように思われるが、どじの沢の流域にともに立地しており、非常に興味のある遺跡である。

黄金堂遺跡　遺跡名の黄金堂は、遺跡の所在地内に「黄金堂屋敷」という地名のあることから名付けられたものである。この地域にはこの他にも、大日祠、寺屋敷、コヤシロ（古社）などの地名がある。（第４図）

地域の中央やや奥に、古い木立にかこまれた観音堂がある。この観音堂は明治に建物や仏具が整えられ、建物はその後も補修の手が加えられて来たようである。明治以前のことを知る人はいなかった。

観音堂の南西方向の山側には、大日祠があった場所という所がある。祠は朽てしまい祠の中にあったものの一部は観音堂に収容されている。大日堂跡附近には礎石らしい石が見られる。

昭和44年ころ、この地域の畑から鉄鐔が２片出土している。発見されたときの状況が多少曖昧であるが、本遺跡の出土品であることはまちがいないと思われる。

又、このころ、遠藤太一宅の裏の畑地に礎石らしい石列が発見されている。昭和47年に田中定一氏によって発表された資料（文献８）に略図があるが、この略図を見るかぎりでは礎石は無理がありそうである。この地区の基本土層を見ると表土下の層には大小の礫が含まれていること

から考えて、あるいはこれらの礫をつないだ結果、礎石の可能性を推測したのかも知れない。確認のためボーリングによる探索を検討したが、下層の礫を拾ってしまい目的をはたせないことが判明したので実施しなかった。

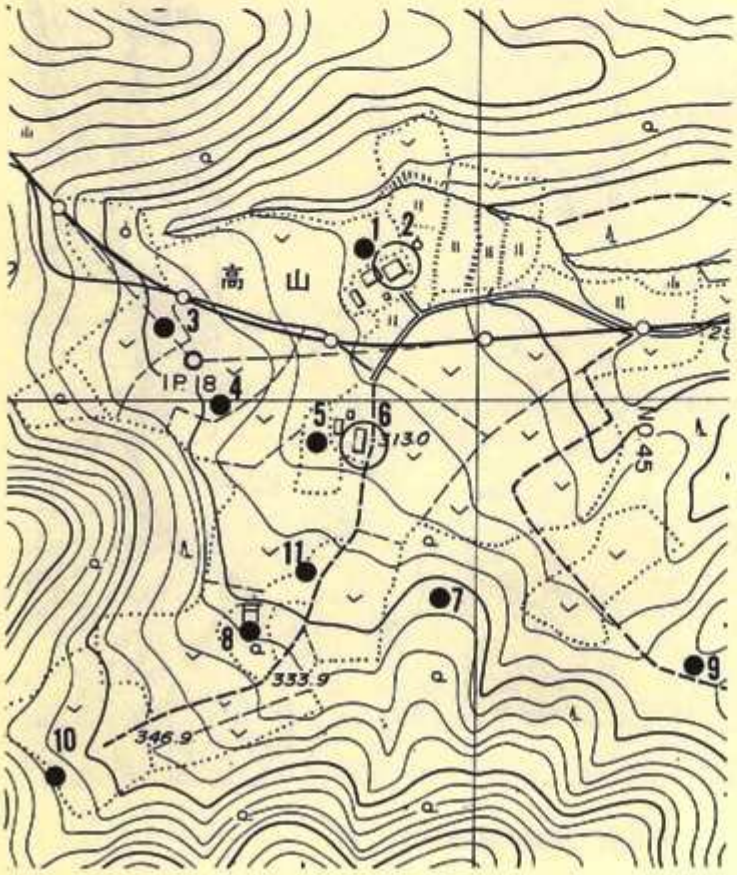
地区内にはこの他にも寺屋敷と呼ばれる観音堂から東方向の尾根の端に平坦地があって、ここにも礎石があるといわれているが確認はしていない。

地区の旧地形は、開田や畑地の整地などがおこなわれているのでよくわからないが、以前は造成によると思われる平坦地が数ヶ所あったという。C地区における調査成果もあるので、今後この地区からさらに建物跡が検出される可能性は充分あると思われる。

遺物の散布状況は、縄文土器片とともに土師器や須恵器の破片が散見されるが、量的には多いとはいえない。旧地形の変化によるものなのか、もともと量が少ないのかは判断できない。

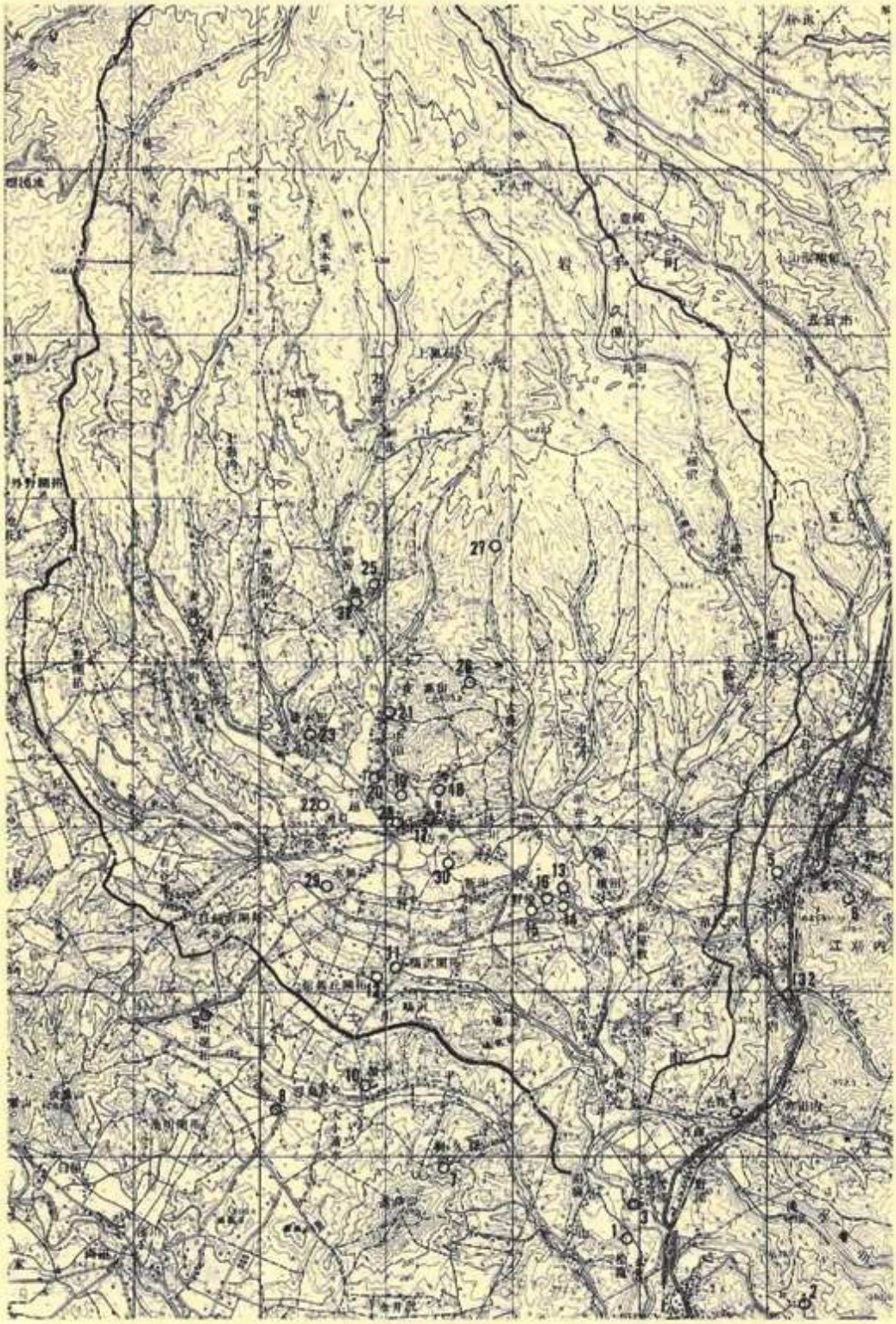
このように、黄金堂遺跡は地名や出土遺物などから寺院跡ではないかと推定され、今日に至っている。

最後に、黄金堂遺跡は一方井川の支流大森沢の流域に位置するが、この大森沢を地元ではどじの沢と呼んでいる。司東真雄氏はどじの沢は道寺の沢が語源であると推定している。興味ある説として紹介しておきたい。(昭和53年10月6日付岩手日報)



1. 礎石
2. 遠藤太一宅
3. 鉄磬出土地点
4. 〃
5. 黄金堂屋敷
6. 遠藤金四郎宅
7. 寺屋敷　礎石？
8. 観音堂
9. 平坦部
10. 大日祠跡　礎石？
11. コヤシロ(古社)

第4図
黄金堂遺跡の地名



第5図　周辺の遺跡分布

地　名　表

分布図の番号	遺跡名	文献7の番号	文献9の番号	文献10の番号	発掘調査等
1	川口松原			1	
2	秋浦(A)	13		24	
3	沼崎		12	94	
4	子抱	12	•	4	
5	苗代沢			11	
6	デンパ		10		
7	桐ヶ久保	11	7		
8	浮島古墳群			88	発掘調査（昭和32年）文献4
9	浮島			89	
10	蟹沢			90	
11	鳴沢(A)			86	
12	鳴沢(B)		3	87	
13	沢口			39	発掘調査（昭和33年）文献4
14	土川新田	9		44	
15	仙波堤		1	40	発掘調査（昭和43年）文献6
16	沢口(B)		2		
17	旧役場			47	
18	小学校裏			46	
19	輪台			48	
20	打越			49	
21	四本木	6		52	
22	湧口	5			
23	かんじや			72	
24	黒内		5		
25	上路			64	
26	黄金堂	7			
27	どじの沢	8		59	発掘調査（昭和35年）文献5
28	大手花	17－3			
29	今松			53	発掘調査（昭和43年）文献6
30	大明神				
31	黒石薬師前				
32	乙茂内(I)				

1．ここにあげた遺跡は土師器や須恵器の出土する遺跡である。

2．分布状況を示した範囲は、分布図の中の岩手町分だけである。

3．2点鎖線は一方井川の流域を示している。

4．主に、文献7、9、10をもとにして遺跡としているが、最終的には高橋昭治氏に加除訂正をお願いした。（一覧表には、各文献が遺跡につけている番号を示しておいた。）

黄金堂遺跡出土伝世品（第６図）

１は遠藤平吉氏（遠藤太一氏の父）から一方井公民館に寄贈されたもので、出土地点は第４図の４である。これも鉄の鋳造品で、断面を見ると片面式のように見える。山形の無文磬で、紐孔が磬胎内にある。

２は昭和44年10月８日付岩手日報に掲載された鉄磬がこれで、発見者遠藤太一氏によれば出土地点は第４図の３である。磬は鉄の鋳造品で、片面に縁と撞座のみの、山形の素文磬である。

３は三筋壺の肩部破片で、３条の沈線がめぐっている。上半は赤褐色の斑点があり、下半は逆に黄褐色の斑点となっている。内面は指によるナデ調整され、胎土には石英等の細砂を含んでいる。

４は三筋壺の下部とみられるもので、４条の沈線がめぐっている。外面は暗褐色釉がかけられガラス光沢があり、胎土には白色砂粒を含んでいる。

５は須恵器大甕の底部破片である、底部は丸底で平行線状の叩き目による斜格子状叩き目文となっている。内面はやや幅の広い平行線状の叩き目文をもつ。胎土内面が灰色を呈し、白色細砂が目につく。

文献

１．小田島禄郎　県下に於ける竪穴及「チャシ」に関するもの其一
史蹟名勝天然記念物調査報告第４号　岩手県　大正13年

２．梅原　末治　陸中一方井村古墳群の調査　歴史と地理13－５　大正13年

３．小田島禄郎　県下に於ける古墳の二三
史蹟名勝天然記念物調査報告第６号　岩手県　大正14年

４．草間　俊一　浮島古墳・沢口遺跡　岩手町教育委員会　昭和34年

５．草間　俊一　岩手町大森どじの沢小堂跡　岩手史学研究35号　昭和35年

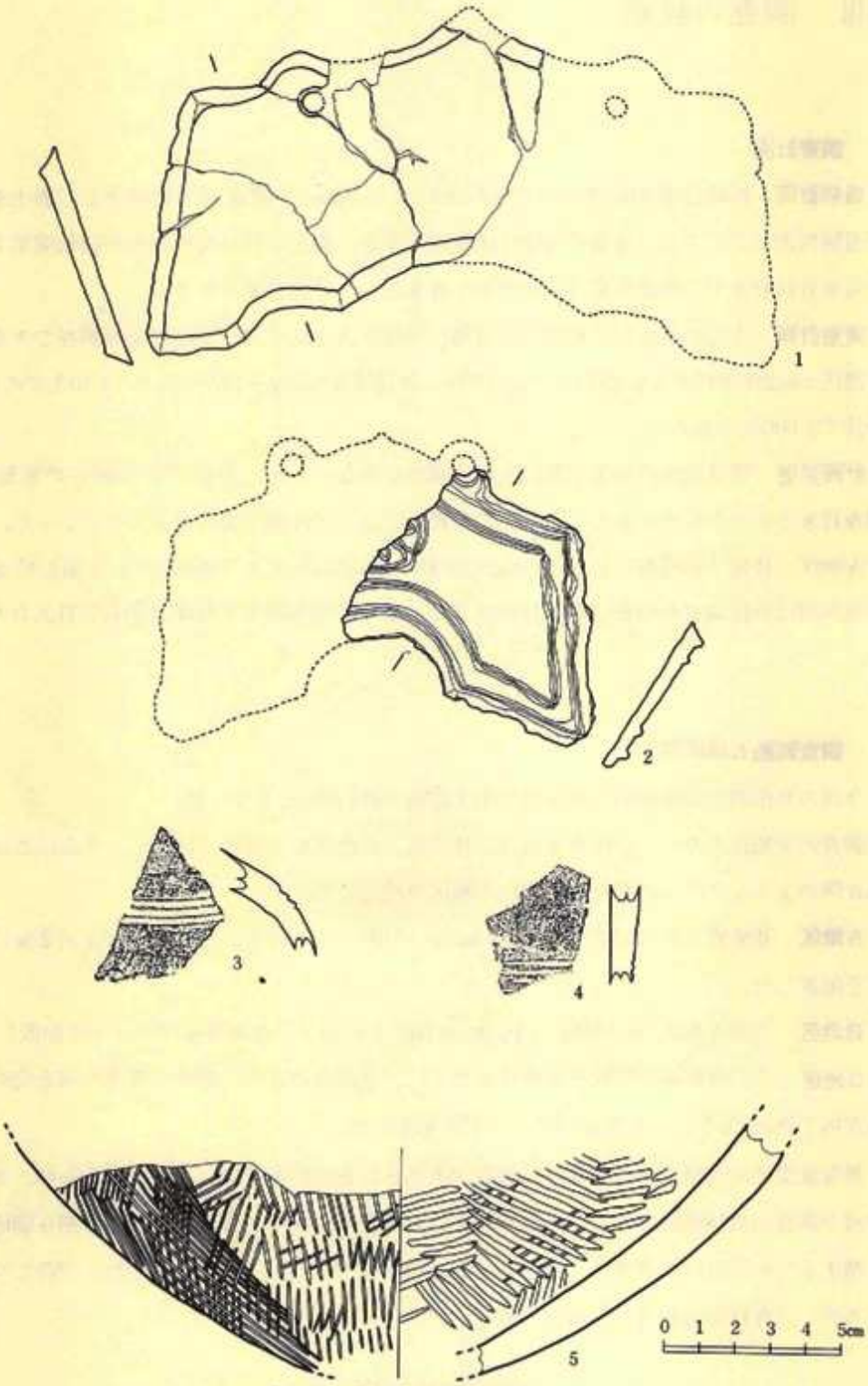
６．草間　俊一　仙波堤・今松遺跡　岩手町教育委員会　昭和45年

７．高橋　昭治　北上川上流域に於ける須恵器の分布　高橋昭治　昭和46年

８．田中　定一　岩手町大森の寺院跡と考えられる遺跡について
岩手郡北郷土史研究会第１回大会（資料）　昭和47年

９．高橋　昭治　開田などによる岩手町及び西根町出土の土師器　高橋昭治　昭和50年

10.　岩手町史　岩手町史刊行会　昭和51年



第6図　黄金堂遺跡伝世品

Ⅲ　調査の経過

調査計画

当初計画　路線杭番号№223から242＋10までの6.900㎡を調査対象範囲とし、表土を発掘して遺構検出までとする。遺構の精査は次年度とする。調査期間は発掘調査が昭和58年７月６日から９月14日まで、整理作業は昭和59年１月４日～３月25日までとする。

実施計画　上記の調査対象範囲内に道路、水田が含まれており実際に発掘調査できる範囲はＡ地区が№226＋15から№234までの2.100㎡、Ｂ地区が№237＋12から№242＋10までの1.500㎡、合計で3.600㎡である。

計画変更　遺構検出の結果予想以上に遺構数が少ないこと、当初予定の調査対象範囲外に調査対象とすべき範囲があること、などの理由によって計画を変更することとなった。

Ａ地区、Ｂ地区の精査にＣ地区の№242＋18から№244＋８までの600㎡を追加し精査する。調査期間は発掘調査が昭和58年９月30日まで、整理は昭和59年１月４日から３月25日までとした。

調査範囲と地区割

今回の発掘調査は最終的に第７図に示す範囲の約4.200㎡となった。

調査の実施にあたり、全体をＡ地区、Ｂ地区、Ｃ地区の３地区に区分し、さらに各地区毎に第８図のようなグリッド割をおこない小地区を設定した。

Ａ地区　基準点をP_1（№227杭）とP_2（№230＋16杭）とにおき、５×３ｍと５×２ｍのグリッドを配置した。

Ｂ地区　基準点をP_3（№238杭）とP_4（№242杭）とにおき、５×３ｍグリッドを配置した。

Ｃ地区　ここは路線中心杭を基準点とせずに、平坦部の方向に合せて基準方向を定めて、基準点P_9とP_{10}をおき、３×３ｍのグリッドを配置した。

黄金堂遺跡の性格上将来関連継続調査が実施される可能性は高いものと考えられ、さらに、今回の調査が道路建設にともなう事前調査であることに鑑み、将来の調査との相互関係に正確を期するため周辺に基準点P_5、P_6、P_7、P_8の４点を第９図のように配点した。埋設したのはプラスチック廃材を再利用した角杭である。

発掘調査の経過

7.7　調査器材搬入。調査開始。

7.7～7.28　A地区、地区割付。東側から市松に表土発掘開始、最終的には全面を発掘。表土は薄く、遺物もきわめて少量。遺構は検出されなかった。途中から用地外に土捨場を確保。

7.26～8.20　B地区、地区割付。東側から市松に表土発掘開始、最終的には全面を発掘。地区の東側与は切土、中央の沢状の凹地には盛土の造成がおこなわれていた。検出された遺構は竪穴住居跡10棟、土壙８、土葬墓１、焼土遺構４、溝５などであった。遺物は縄文土器、土師器が少量出土。用地外に広く土捨場を確保し、多量の土を処理できた。

8.4～8.20　基準点測量、国際航業株式会社に委託。

8.4～8.6　C地区は当初計画にない地区である。ここに人工的な平坦面が認められたので、調査対象範囲にすべきか否かの判断のために刈払いと試掘をおこなった。平坦面は造成によるものであることが確認され、縄文時代晩期の土器が出土した。

8.20　計画変更、A・B・C地区の全面調査を、９月末日までの期間でおこなうことが検討され、関係機関と協議の結果当初計画を変更することとなった。

8.20～9.6　B地区中央の盛土発掘。

8.22～9.28　B地区、遺構精査。住居跡の多くは、谷側の床面が失われていて本来の規模がわからない。カマドがなく、床面に焼土面が見られる。二期重複する。などの傾向がある。土壙の内１基は土葬墓であった。

9.8～9.24　C地区、山側から表土発掘開始し全面を発掘。検出された遺構は掘立柱建物１棟、焼土遺構２、遺物包含層１、などであった。遺物は縄文土器が出土した。

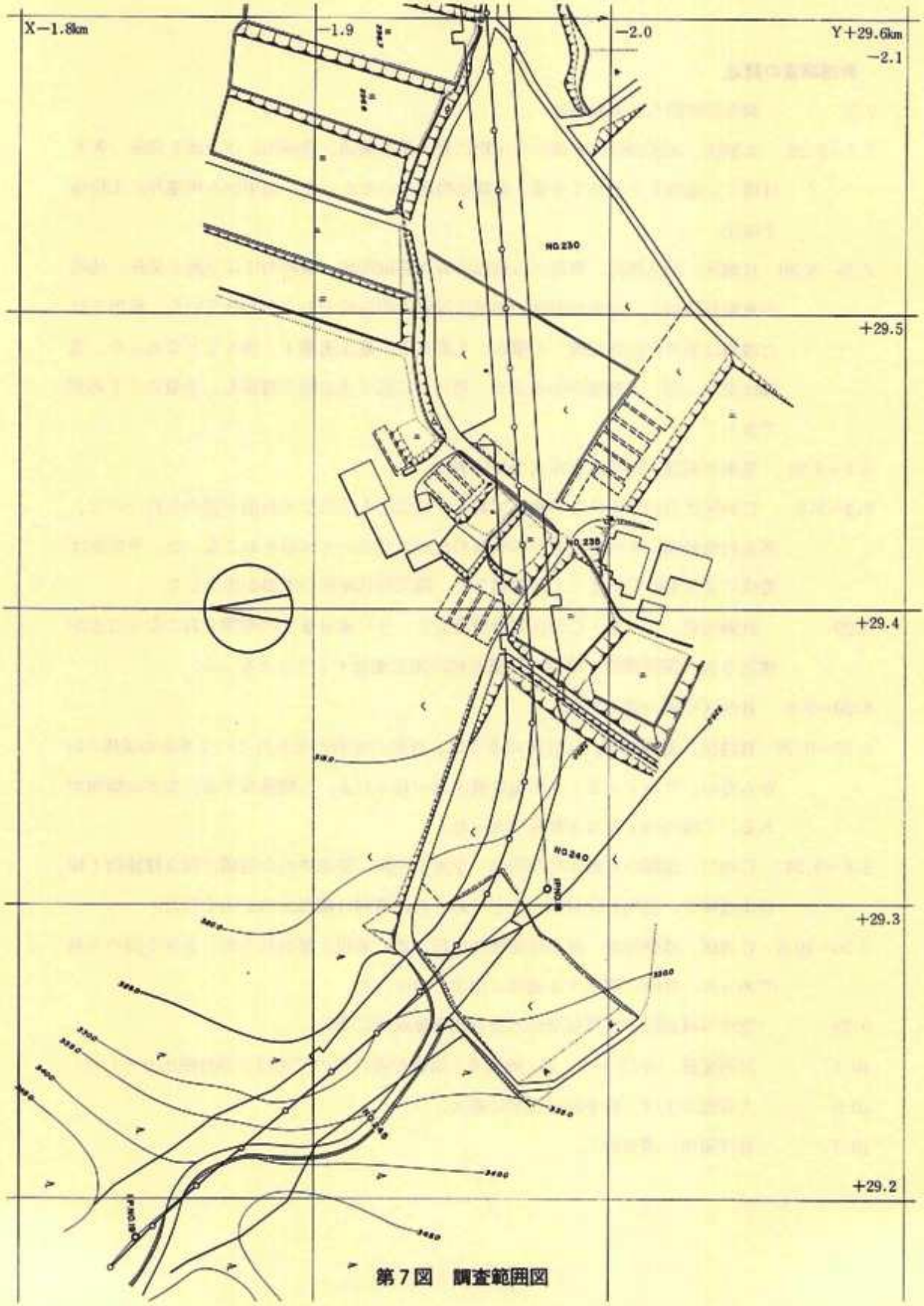
9.26～10.6　C地区、遺構精査。掘立柱建物は当初二期の重複と思われたが、３×２間の単期であった。建物に関連する遺物は出土しなかった。

9.29　空中写真撮影、東邦航空株式会社花巻運航所に委託。

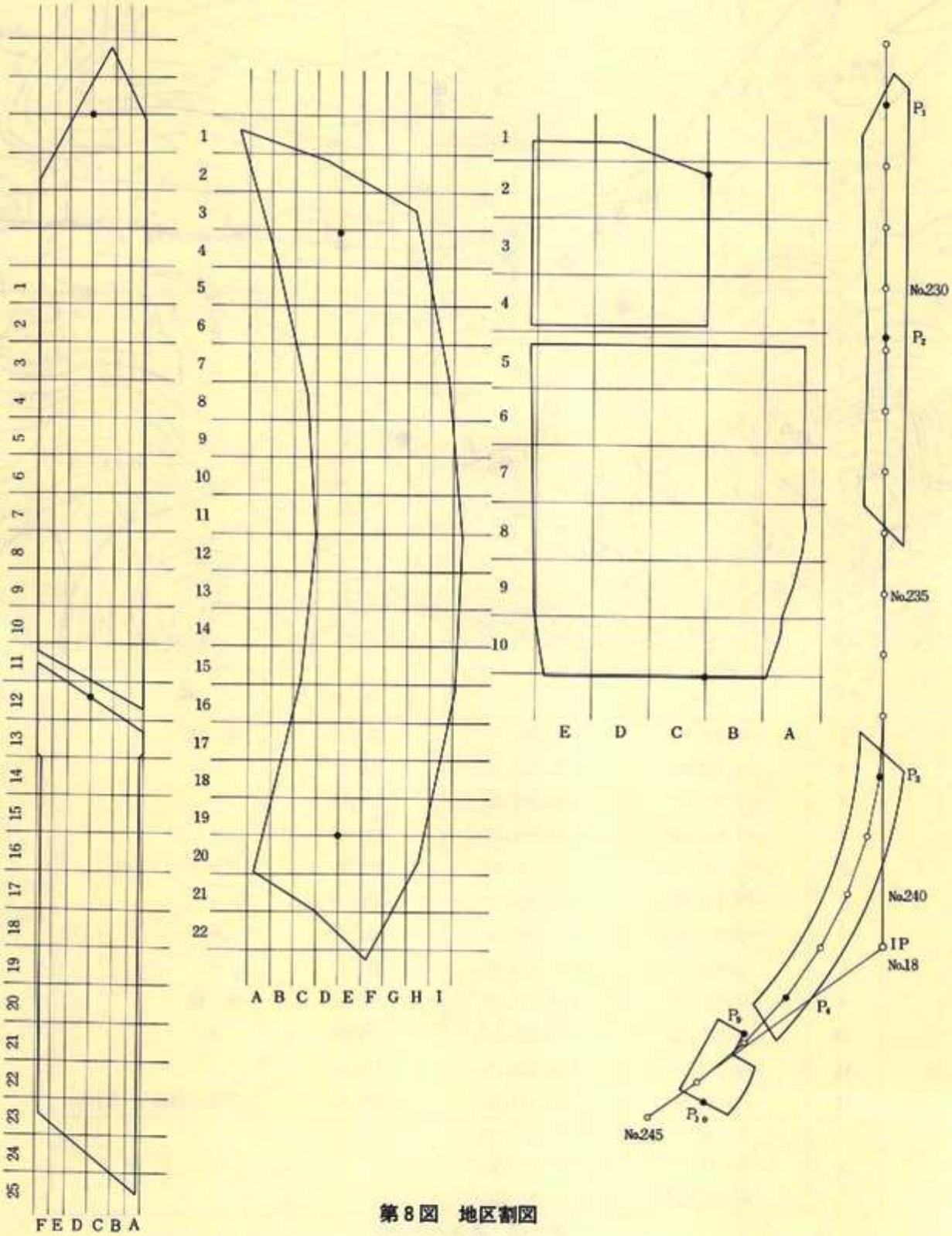
10.1　計画変更、８/下～９/上に雨天多く精査が遅れたので10/7を器材搬出日とした。

10.5　人骨掘り上げ、岩手医科大学に搬入。

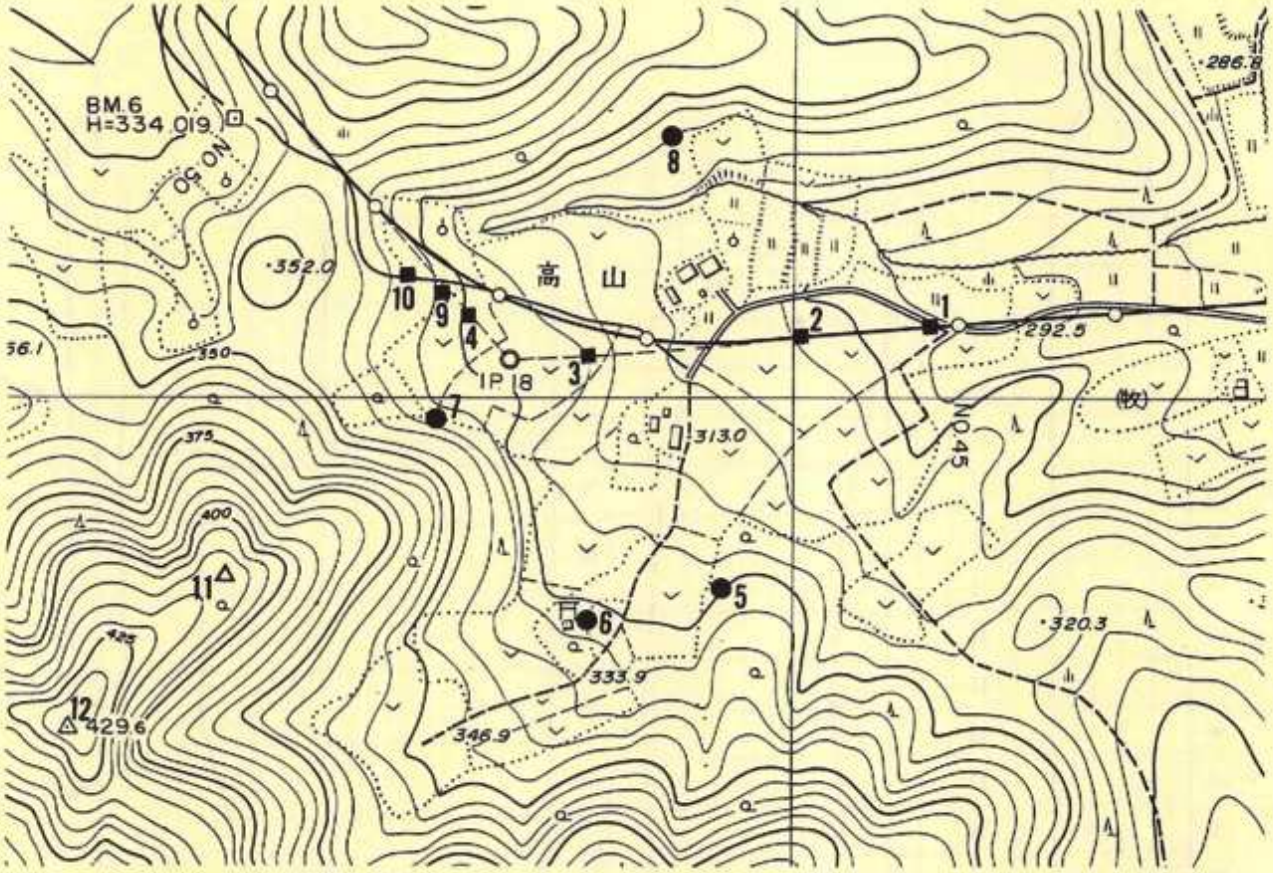
10.7　器材搬出、調査終了。



第7図　調査範囲図



第8図　地区割図



点名	X m	Y m	H m	備考
1	−1,959.19	+29,581.77	297.16	木杭
2	−1,964.61	+29,505.93	302.25	〃
3	−1,973.42	+29,362.66	316.28	〃
4	−1,948.02	+29,287.81	322.89	〃
5	−2,121.91	+29,446.03	323.87	プラスチック杭
6	−2,141.55	+29,358.44	328.70	〃
7	−2,011.81	+29,267.44	331.81	〃
8	−1,832.43	+29,418.23	312.13	〃
9	−1,935.38	+29,275.33	326.85	木杭
10	−1,924.31	+29,252.32	331.05	〃
11	−2,111.74	+29,139.71	410.06	〃
12	−2,212.59	+29,033.04	429.62	三等三角点「一方井」
3	北緯	39°58′54″1679		
	東経	141°10′37″8004		
	真北方向角	−0°13′15″3457		

第9図　基準点配点図

Ⅳ　基本土層

今次調査の各地区における土層観察によって、全体に共通する基本土層を次のとおり区分した。（造成による盛土や遺構等の埋土は除いてある。）

第Ⅰ－1層　黒褐色砂質シルト。耕作土である。

第Ⅰ－2層　黒褐色砂質シルト。表土である。

第Ⅱ－1層　褐色砂質シルト。第Ⅱ層は第Ⅲ層起源の再堆積層と思われる。A、B地区ではこの層の上面が遺構検出面となる。

第Ⅱ－2層　明褐～暗褐色砂質シルト、安山岩質の角礫を含む。漸移層と思われる。

第Ⅱ－3層　黄褐～橙色砂質シルト、安山岩質の角礫、巨礫を含む。

第Ⅲ層　　黄褐～橙色、砂礫、七時雨火山起源の火砕流などによる火山砕屑物である。

基盤層は第四紀の安山岩質岩石と思われる。

以上の基本土層は各地区においては次のようになる。

A地区

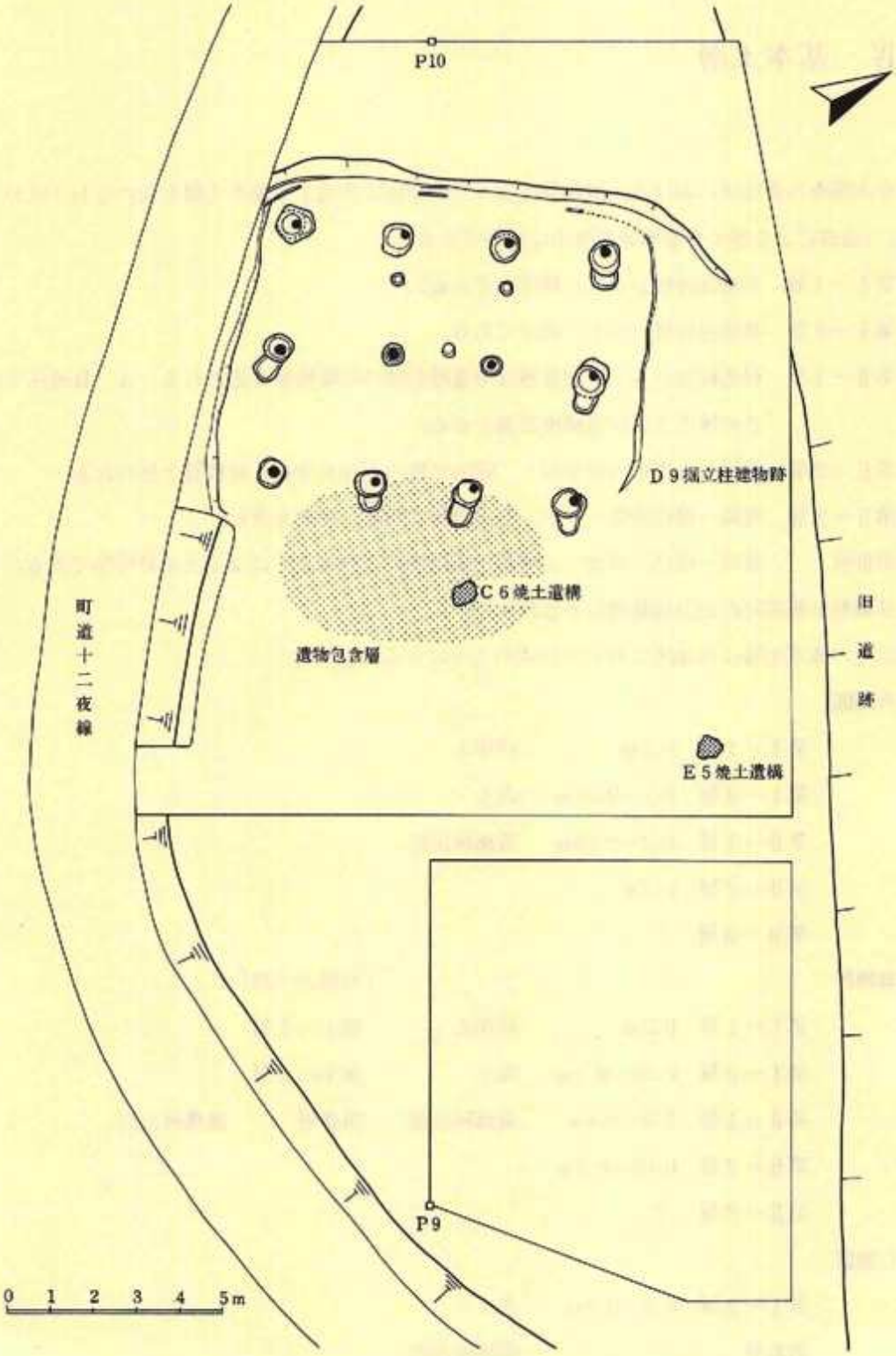
第Ⅰ－1層	0.1m	耕作土
第Ⅰ－2層	0.1～0.15m	表土
第Ⅱ－1層	0.2～0.25m	遺構検出面
第Ⅱ－2層	0.3m	
第Ⅱ－3層	?	

B地区

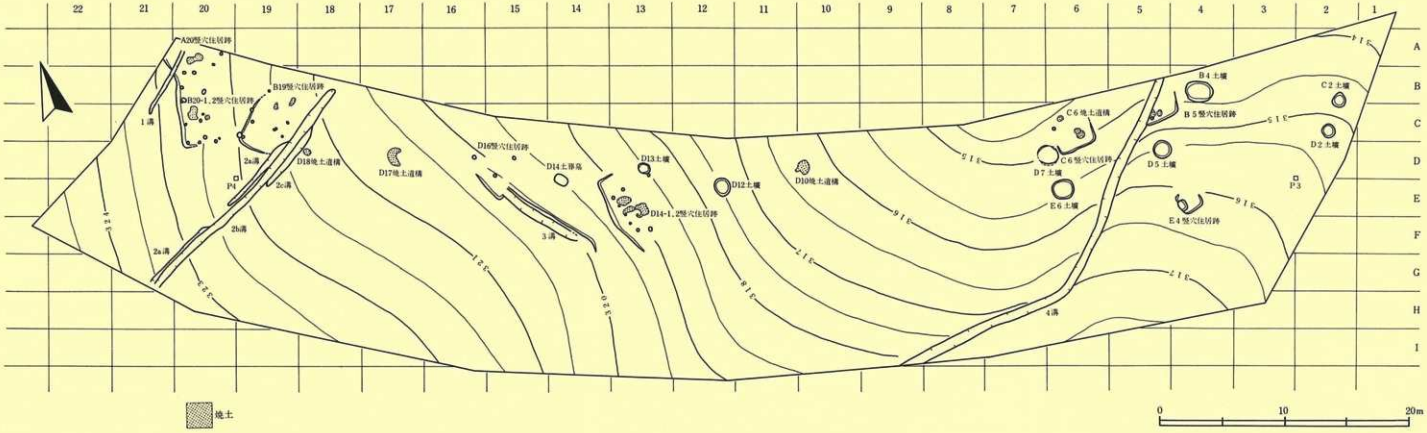
			（西側の一部）	
第Ⅰ－1層	0.2m	耕作土	第Ⅰ－1層	
第Ⅰ－2層	0.05～0.2m	表土	第Ⅰ－2層	
第Ⅱ－1層	0.2～0.4m	遺構検出面	第Ⅲ層	遺構検出面
第Ⅱ－2層	0.05～0.2m			
第Ⅱ－3層	?			

C地区

第Ⅰ－2層	0.2～0.3m	表土
第Ⅲ層	?	遺構検出面



第10図　C地区遺構配置図



第11図　B地区遺構配置図

V　遺構と遺物

今回の調査はA、B、Cの3地区に分かれているが、遺構の検出されたのはB、Cの2地区である。

検出された遺構は掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡8個所10棟、焼土遺構6基、土壙8基、土葬墓1基、溝5条、遺物包含層1個所である。

また、発見された遺物は縄文土器、石器と、土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、石製品、土製品などである。

1　掘立柱建物跡

平場の造成

平場はC地区の西部にあり、南北約12m、東西約11mの正方形に近い矩形を呈し、その面積は130㎡ほどで、極めて小規模な平場である。南西部の一部が町道十二夜線によって破壊されている。標高330mの地点で、東西の比高差は10cm前後であり水平と言ってさしつかえない。

この地域の自然地形は約7度の傾きをもつ斜面で、山側は高さ0.5m、幅6mに渡って削平され、谷側は厚さ0.35m幅5mにわたって盛土されている。盛土は地山の褐色土が混じる暗褐色土である。

掘立柱建物跡（第12・13図、図版4）

西側柱列が西辺の東約1.0mに位置しており、平場の西端部に偏在している。南北では中央部にあたっている。方向はN30°Eで若干東にふれている。南北約7.16m、東西約5.79mの東面する南北棟で、3間×2間の総柱の建物である。柱間は桁行が2.39m（約8尺）の等間、梁行が2.89m（約9.7尺）の等間となっている。

柱穴は、中央の2柱穴（B－2、C－2）を除いて、直径65cmほどの円形である。中央の2柱穴は直径約50cmと幾分小さくなっている。深さは検出面から74～118cmであるが、B列における整地層上面からの深さでは、B－1、B－3とも1.2mと同規模である。このことは底面のレベルによっても言えることである。中央の2柱穴では74cm、77cmと浅くなっている。

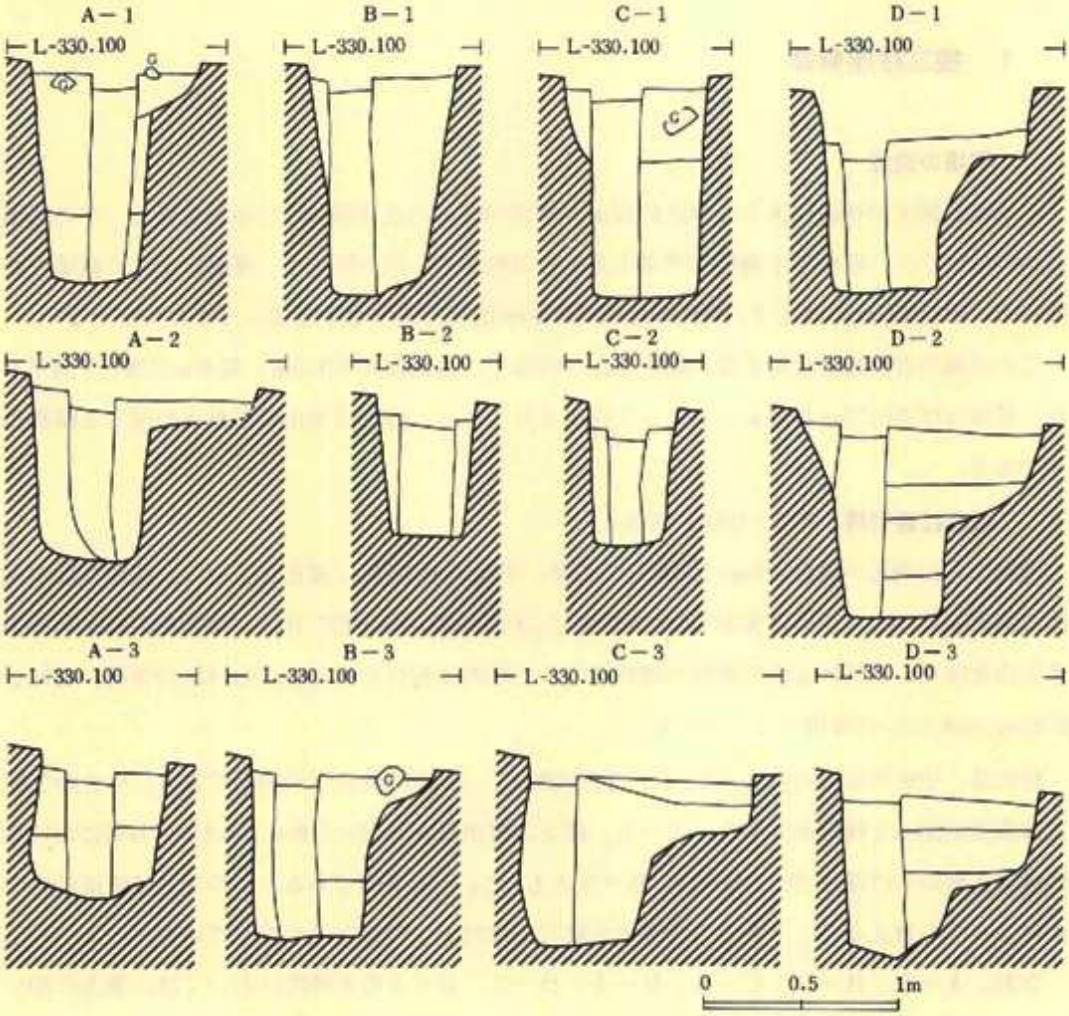
なお、A－2、B－3、C－3、D－1、D－2、D－3の6柱穴においては、東方に30～50cmの重複のような掘り込みをもち、その深さは20～30cmである。これは埋土によって明らかであるが、重複ではなく掘り方に段をもたせたものである。

埋土は黄褐色混土、暗褐色混土で、15～30cmの互層をなすものもみられる。柱痕は20～30cmで、柱穴底面には酸化鉄の集積による痕跡を明瞭に残している。（写真図版4）

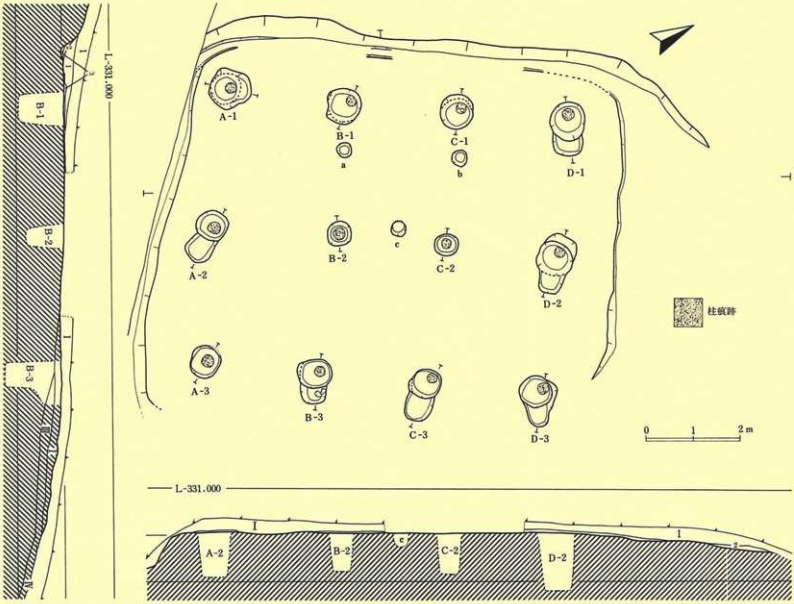
なお、B－1、2間とC－1、2間にa、bの2柱穴が存在する。1列の東1.05mで、1、2列間のほぼ½にあたっている。また、B－2、C－2間の中央にcがある。2列の西25cmで、ちょうど柱1列分西に位置している。柱穴はa、b、cとも直径30cmの円形で、深さが18cm、43cm、15.5cmとbを除いて浅くなっている。これらの柱穴は規模、配置等から須弥壇を構成するものと推測される。

掘立柱建物跡の関連施設

掘立柱建物跡の西（1列の西）1mには雨落ち溝がある。ほんの僅かな凹地であり、意図的に構築されたものではない。北西、南西の両隅では東方に屈曲するもののようである。北側の



第12図　D9掘立柱建物跡柱穴断面図



Ⅰ. 7.5YR 3/4 極暗褐色土、表土
1. Ⅰを主体に7.5YR4/4褐色土が僅かに混じる
2. 5 YR 3/4 極暗褐色焼土混土
3. 7.5YR 3/4 褐色混土
Ⅱ. Ⅰを主体に褐色土が混じる
Ⅲ. 7.5YR 3/4 黒褐色土（黒ボク）縄文土器を含む
Ⅳ. 7.5YR 3/4 褐色混土、漸移層

第13図　Ｄ９掘立柱建物跡

延長部では、D列の北約1.3mが10cmほどの段となっている。南側においてもまた、町道十二夜線の掘削を免れた南東部では、A列の南1.3mほどで急斜面となっており、小さな削り出しの段状を呈している。

平場の西辺が竪穴住居跡の壁のような切土による段となっている。その部分が火熱のため僅かではあるが赤変している。また、竪穴住居跡ならば第一次堆積層にあたる2層が極暗赤褐色焼土混土となっており、焼失の可能性が大である。

2　竪穴住居跡

(1)　A20竪穴住居跡（第14・15図、図版5）

〈位置〉　B地区北西端に位置し、西半が町道十二夜線、北半が調査区外に続いている。

〈重複〉　南端部がB20－1・2竪穴住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

〈平面形、規模〉　壁の遺存状況から方形か、長方形をなすと推定される。規模はP1・2間が3.4mあり、東西方向が4.0m以上となるであろう。

〈埋土〉　埋土は全体的に黒褐色土を主体とする。壁際においては黄橙色土をブロック状に混入する暗褐色土が認められる。埋土下位では焼土が混在しており、特に壁近くでは面としての広がりが捉えられる。焼失家屋の可能性がある。

〈床面、壁〉　床面はほぼ平坦で、壁は崩壊している部分もあるが、急激に立ちあがる。壁高は28cmである。壁面では僅かではあるが赤変している部分が認められる。

〈柱穴〉　調査地内ではP1、P2を検出したのみである。25×20cmの長方形、あるいは長円形をなし、深さは30cmほどである。

〈炉〉　柱穴配置等から南西部に偏在しているとみられる。平面形はだるま形を呈しており、重複している可能性がある。東側のものは直径70cmほどの円形で、厚さは8cmであり、西側のものは土壙及び柱穴状ピットによって破壊されているが、直径65cmほどの⅔円形をなし、厚さが6cmである。両者とも現地性焼土で上面が硬くなっている。

〈土壙〉　炉の西に接しており、一部炉を破壊している。1.0×0.5mの隅の丸い長方形を呈し、深さが12cmである。埋土は上位が極暗褐色混土で、下位が褐色混土である。前者に焼土、炭化物を大量に含んでいる。

〈その他〉　炉と土壙の間に1辺20cmほどの方形の柱穴状ピットが存在する。埋土下位には炭化物が大量に含まれている。深さは炉上面から15cmを測る。性格は不明である。

〈遺物〉　発見された遺物はない。

(2) B20－1・2竪穴住居跡（14～16図、図版6・16）

当住居跡は炉、土壙、柱穴配置等によって、建て替えによる2棟の住居跡が確認された。西側をB20－1住居跡、他をB20－2住居跡として記述する。なお共通項目については先に記述している。

〈位置〉 B地区西北端に位置する。

〈重複〉 全体的にB20－2竪穴住居跡と重複し、同住居跡の西1.5m、南0.5mにあたっている。炉の残存状況や柱配置等からB20－1住居跡が新しいものと推定される。また、北端部がA20竪穴住居跡と重複している。

B20－1竪穴住居跡

〈平面形、規模〉 西壁及び南壁の遺存部から方形になると推定される。しかし、全体形は斜面下位が削平され、北端が重複していて不明である。規模は南北がP5、P8間が4.5m、東西はP8、P11から2.3m以上が推測される。

〈埋土〉 埋土は上位から黒色土、暗褐色土等に細分される。暗褐色土の下位には焼土化している部分がある。細かい炭化物を含んでいる。

〈床面、壁〉 東に緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦である。壁はやや急激に立ち上がり、壁高は30cmを計測する。

〈柱穴〉 P5、8、11、13、14の5柱穴を検出している。前3者は直径25～30cmの円形で深さは31～66cmである。西側の2柱穴が深くなっている。埋土は黒褐色土、暗褐色土混土で炭化物を含むものがある。柱痕はP8、11によると直径17～10cm程である。後2者は48×35cm、50×40cmの長円形を呈し、深さが15～20cmと浅い。埋土は炭化物を含む暗褐色混土である。P5、P8の間にあって北から1.0、1.7、1.8mと西辺を3分している。補助的な柱穴と推定される。なお、P8から甕の体部破片が発見されている。

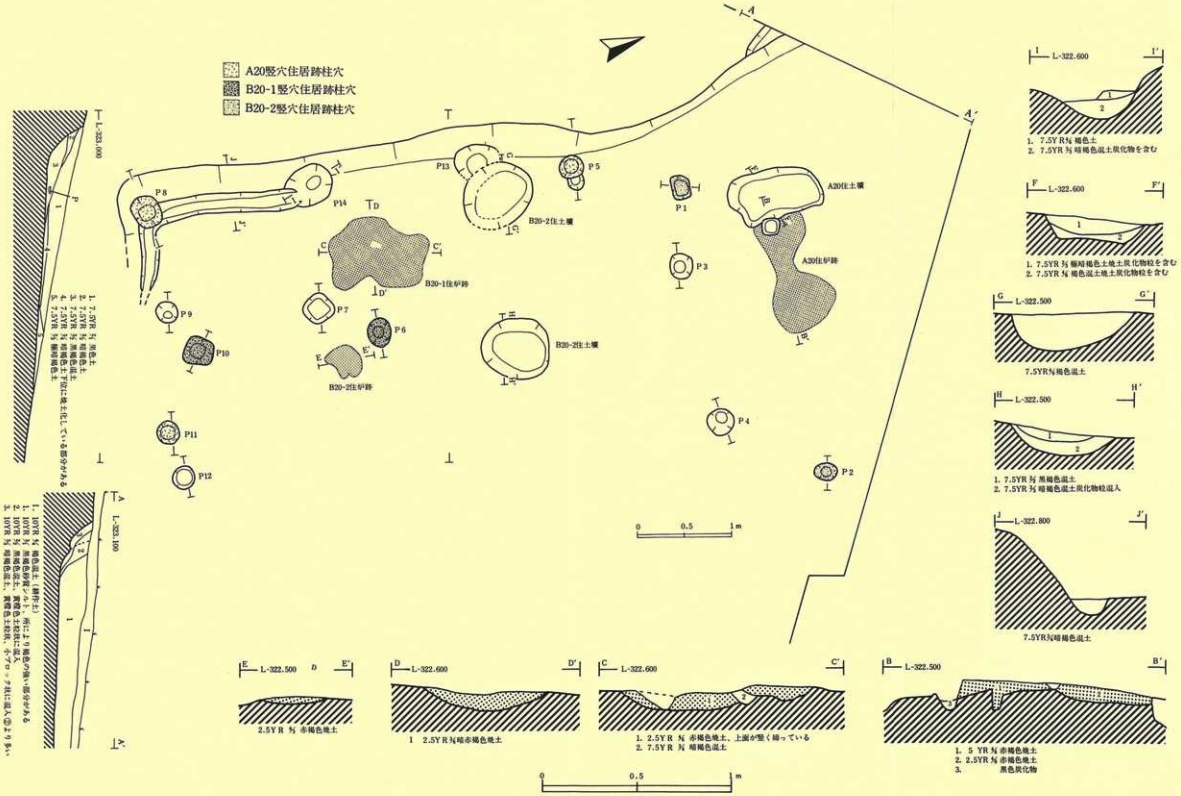
〈炉〉 中央西端部、西壁の東0.5mに位置する。平面形は約1.0×0.6mの不整な長方形をなす。焼土の厚さは10cmほどで幾分中央部が凹んでいる。

〈土壙〉 住居跡の北西部に位置し、P13と重複している。78×65cmの長円形を呈し、深さは約20cmである。埋土は褐色混土の単層である。

〈周溝〉 P14、P8の間と南壁西端部で確認されたもので、総延長2.2mほどである。幅が20cm、深さが8cmの小さなもので、埋土は暗褐色混土の単層である。

B20－2竪穴住居跡

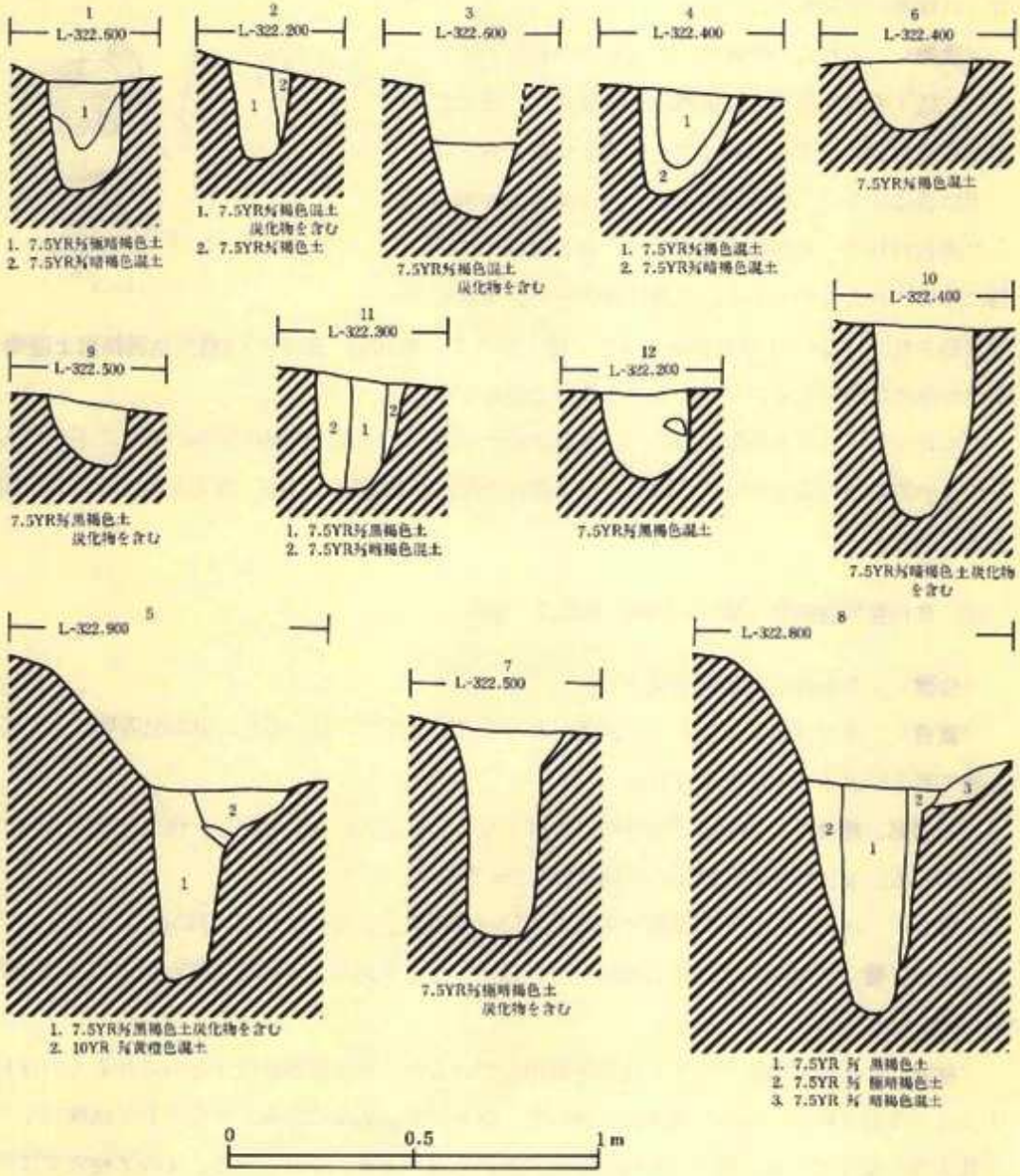
〈平面形、規模〉 B20－1竪穴住居跡によって破壊されたとみられ、全体形は不明である。柱穴配置等から1住居跡と同様の長方形を呈するものと思われる。



第14図　A20、B20-1、2 竪穴住居跡

〈柱穴〉　Ｐ６、10の２柱穴を確認したのみである。前者が30cmの円形で深さが18cm、後者は30cmの方形で深さが53cmである。Ｐ６はＢ20－１竪穴住居跡のＰ14と同様の位置にあり、補助的な柱穴と推察され、Ｐ10は南西隅の主柱穴とみられる。なお、Ｐ６からは甕の底部破片が発見されている。

〈炉〉　柱配置によると南西部に偏在している。平面形は40×30cmの不整な円形を呈し、焼



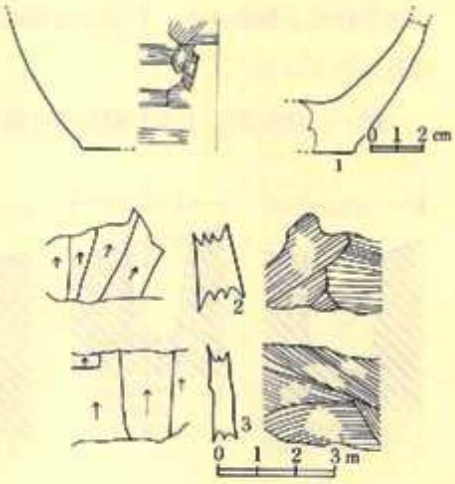
第15図　Ａ20、Ｂ20－１、２竪穴住居跡柱穴断面図

土の厚さは4cmである。B20－1住居跡の約15cmほど下位にあたる。

〈土壙〉　住居跡の北西部に位置する。70×64cmの円形を呈し、深さは22cmである。埋土は黒褐色混土、暗褐色混土で、下位に焼土粒を混入している。縄文土器（口縁部）が発見されている。

〈遺物〉　どちらの住居跡に伴うものか判別不能であり一括する。発見された遺物は土師器9点、縄文土器15点である。いずれも細片で主に埋土採集である。

土師器は坏1点、甕8点である。坏は高台部が剝落した高台付坏で、底部は回転糸切で、高台部は体部下端に貼付されたものである。色調は黄灰色で、黒色処理は施されていない。1は底部から大きく開くもので、器壁が急激に薄くなるので、あるいは鉢形となるものかもしれない。ロクロ成形のもので、外面が指ナデされている。内面は剝落が著しく不明である。この他には外面ケズリ、内面ナデ付けされた細片がある（2、3）。縄文土器は晩期の粗製土器である。



第16図　B20-1・2竪穴住居跡出土遺物

(3)　B19竪穴住居跡（第17～19図、図版7・16）

〈位置〉　B地区北西部に位置する。

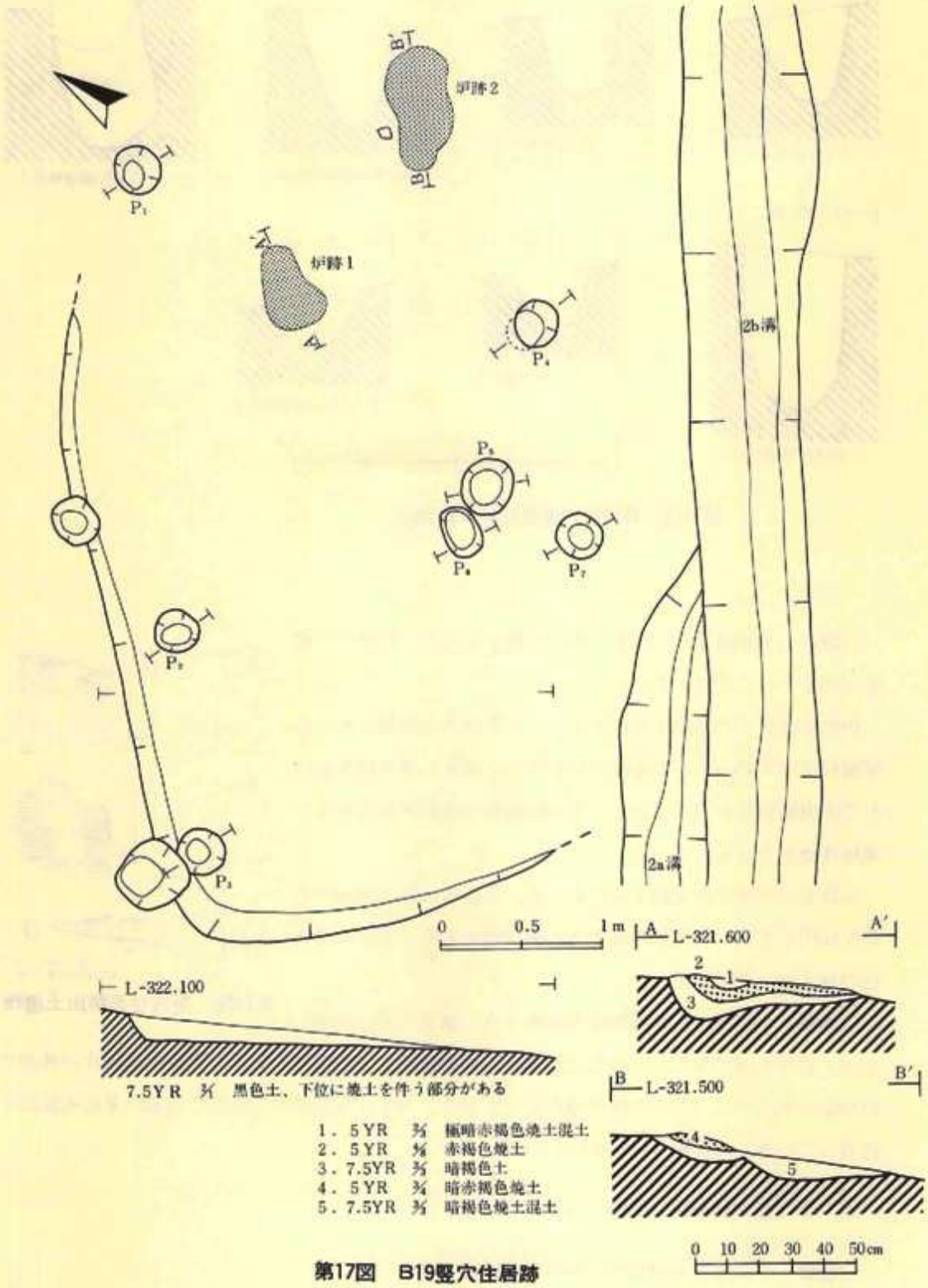
〈重複〉　東半は2a、2b、2c溝によって破壊されている。また、炉の配置等によっては建て替えによる2棟が考えられる。

〈平面形、規模〉　西壁及び南壁から方形になると推定される。ただし、柱穴と壁の方向が若干異なる。規模は南北がP1、3間では4.2mである。

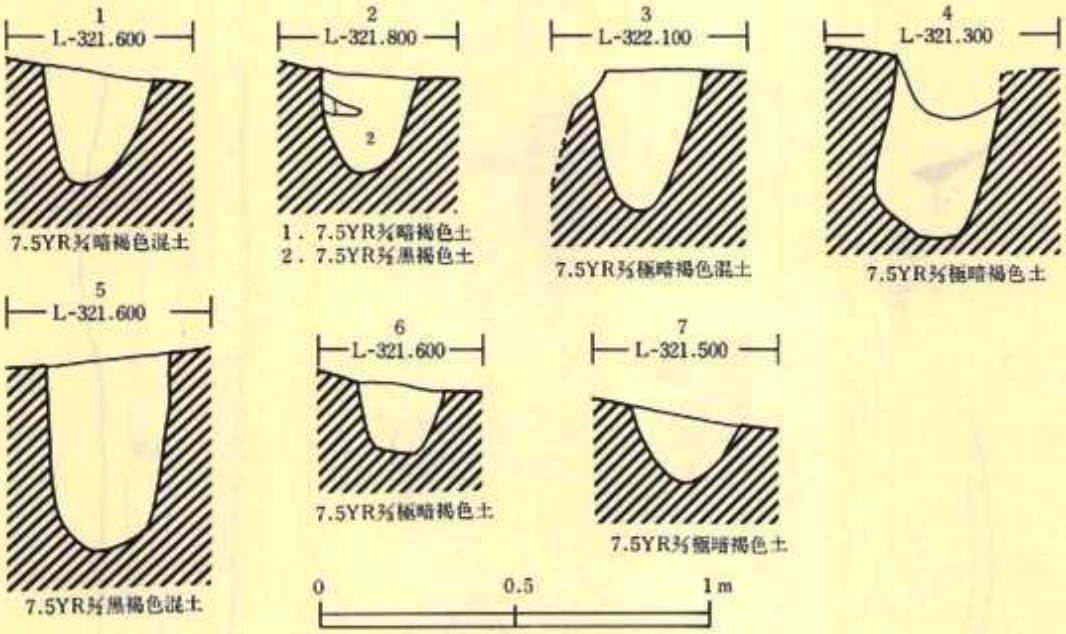
〈埋土〉　埋土は黒色土の単層である。下位（床面直上）に焼土を伴う部分がみられる。

〈床面、壁〉　床面は幾分東に傾斜しているが、ほぼ平坦である。壁は僅か残すのみで、壁高は25cmである。

〈柱穴〉　住居跡内において7柱穴を検出しているが、当住居跡に伴うとみられるものはP1、2、3の3柱穴である。直径26～30cmで、深さが30、35cmである。中央のP2は幾分小さく若干浅くなっている。埋土は暗褐色混土、黒褐色土である。なお、P2、4の2柱穴では埋土上位に礫が置かれていた。P2はP1、3の間にあって、3等分する位置にあたっている。B20－1、2竪穴住居跡に類似例がある。



第17図　B19竪穴住居跡

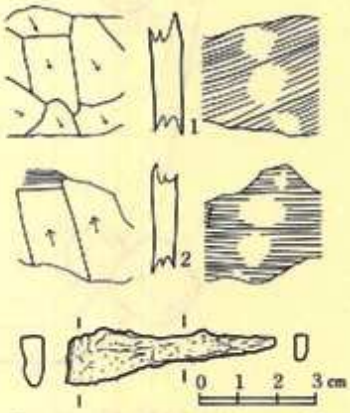


第18図　B19竪穴住居跡柱穴断面図

〈炉〉　２基確認している。西に位置するものを炉跡１、他を炉跡２として記述する。

炉跡１はＰ１の南約１ｍに位置し、住居跡の北西部にあたる。平面形は55×35cmの不整な長円形を呈し、焼土の厚さは５cmほどで中央部が僅か凹んでいる。下に暗褐色土の掘り込みをもつ現地性焼土である。

炉跡２は炉跡１の東約１ｍにあたる。平面形は75×38cmの不整な長円形を呈し、焼土の厚さは４cmほどである。下位に暗褐色の焼土混土を伴っている。



第19図　竪穴住居跡出土遺物

〈遺物〉　発見された遺物は土師器９点、縄文土器（晩期）９点、刀子１点である。土師器はいずれも甕の細片で、内面横ナデをもつ口縁部破片、外面にいわゆるナタケズリをもつ体部破片などがある。刀子は先端部が欠損している。茎に木質部が付着している。刃部幅が1.2cmほどである。

(4)　D16竪穴住居跡（第20・21図、図版９・16）

〈位置〉　Ｂ地区北西部で、地目界に位置する。

〈重複〉　３溝によって破壊されている。

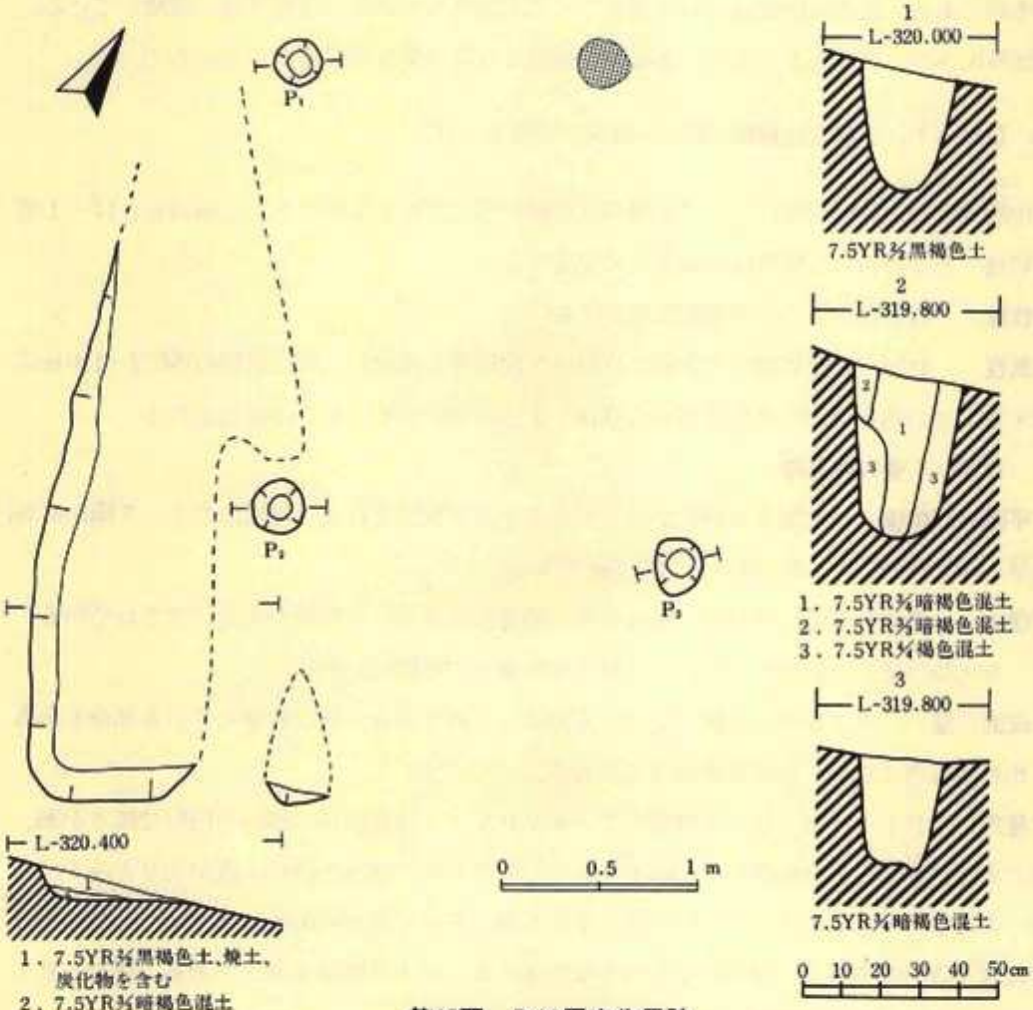
〈平面形、規模〉　西壁、南壁から方形を呈すると推定される。規模は南北がＰ１、２間が2.3m、Ｐ１南壁間は3.6m、東西がＰ２、３間が2.1mである。なお、Ｐ２は西壁の内側1.2mに位置している。

〈埋土〉　上位から黒褐色土、暗褐色土に大別できる。上位に焼土、炭化物を含んでいる。

〈床面、壁〉　残存している床面はほぼ平坦で、やや堅く締っている。壁は急激に立ち上がり、壁高は20cmほどである。

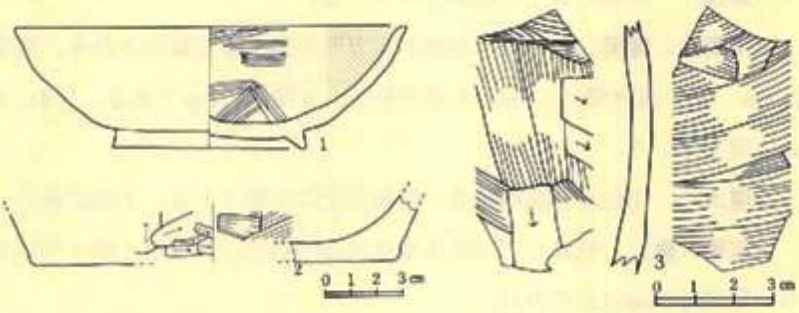
〈柱穴〉　Ｐ１、２、３の３柱穴を検出している。直径25～28cmの円形で、深さは27～41cmである。埋土は黒褐色土、暗褐色土である。柱痕はＰ２によると直径15cmほどである。

〈炉〉　確認されていない。ただＰ１の東約1.5mに直径25cmの円形の焼土混土が検出されて



第20図　Ｄ16竪穴住居跡

いる。検出地点がかなり削平されており、あるいは炉跡の一部かもしれない。炉跡とすると住居跡の北東部にあたる。



第21図　D16竪穴住居跡出土遺物

〈遺物〉　発見された遺物は坏3点、甕6点の土師器9点である。1は高台付坏で底部から緩やかに立ち上がるやや低めの坏部をもち、脚部は三角高台に近く、直に取り付いている。底部には回転糸切痕を残している。内底は中央部がトキン状に高くなっており、全面に丁寧なミガキが施されている。口縁部は横方向、下半は斜方向である。色調は灰褐色～暗灰褐色で、二次加熱のためか、黒色処理が消滅している。

甕は外面へラケズリをもつものである(3)。底部には笹の葉状の圧痕がみられる(2)。

(5)　D14－1、2竪穴住居跡（第22～24図、図版8・16）

当住居跡は炉、柱配置等によって2棟の位居跡が想定されるものである。西側をD14－1竪穴住居跡、他をD14－2竪穴住居跡として記述する。

〈位置〉　B地区中央のやや北部に位置する。

〈重複〉　D14－1住居跡は全体的にD14－2住居跡と重複し、同住居跡の西0.7～1.0mに位置する。炉の残存状況や柱配置等からD14－1住居跡が新しいものと推定される。

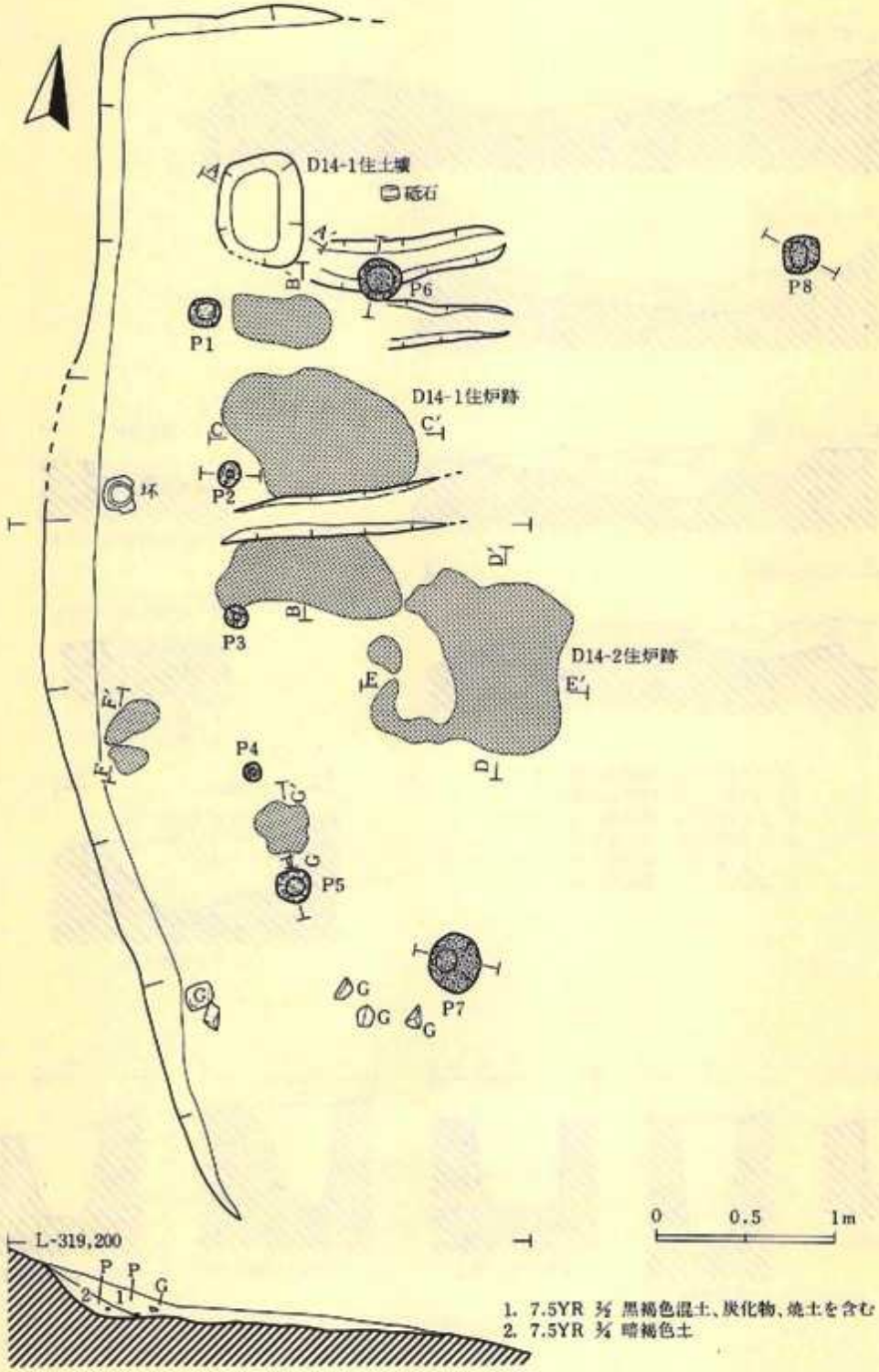
D14－1竪穴住居跡

〈平面形、規模〉　北壁及び西壁から方形を呈すると推定される。規模はP1、5間が3.3mで北壁と南壁付近とみられる石列では5.5mである。

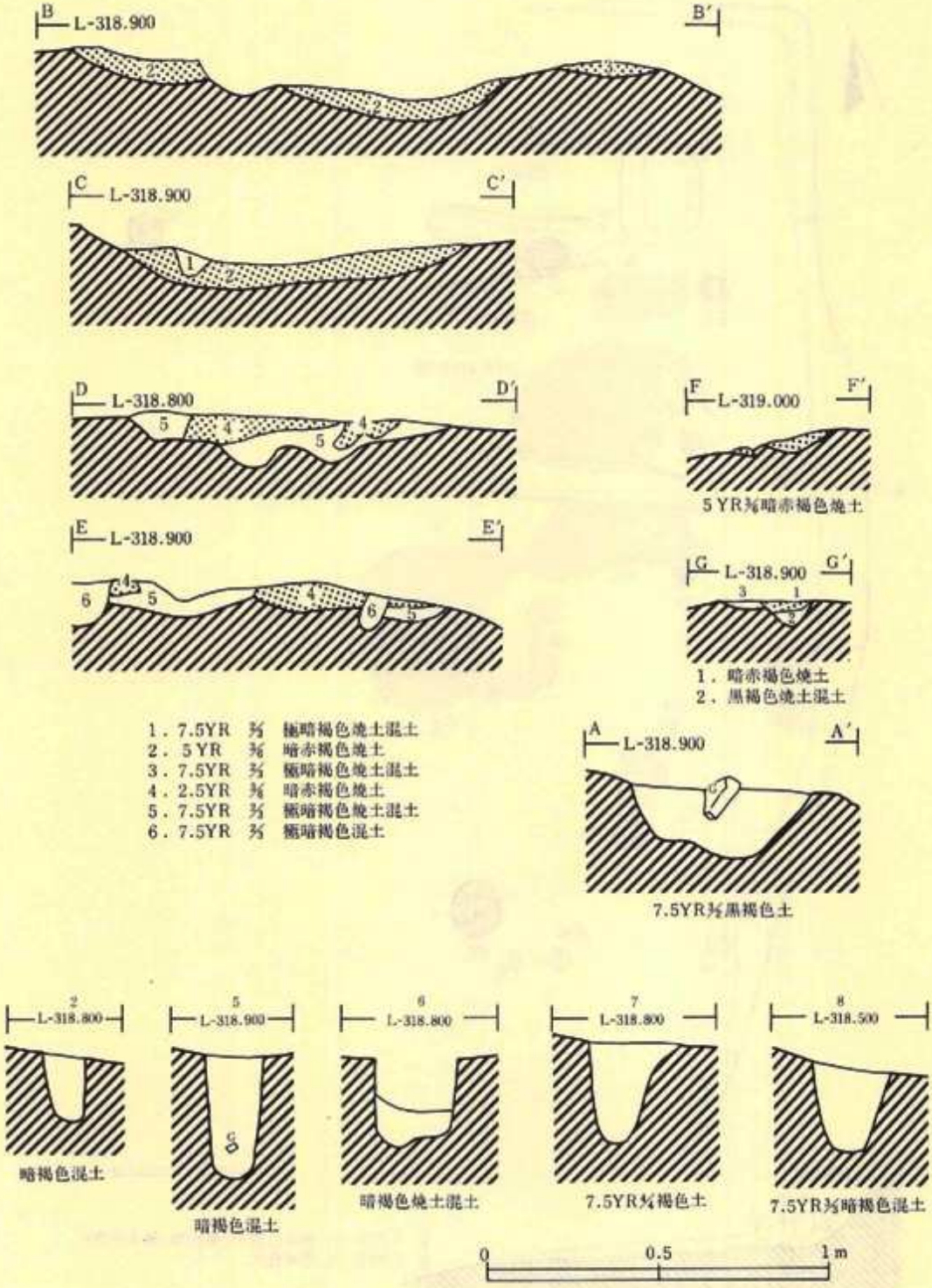
〈埋土〉　黒褐色混土、暗褐色土からなり、前者には焼土、炭化物が大量に含まれている。焼土、炭化物は壁から斜めに入り込んでおり焼失家屋の可能性がある。

〈床面、壁〉　東に緩やかに傾斜しているがほぼ平坦である。壁は崩壊している部分もあるが、比較的直角に近い。壁高は30cmほどである。

〈柱穴〉　P1～5の5柱穴を確認している。P1、5は直径18～20cmの円形で深さが36、38cmである。P2～4は直径10～15cmと小さく、深さも20～28cmと浅い。底が尖りぎみで打ち込みによるものと思われる。この柱穴はP1、5間にあって北から0.9m、0.8m、0.9m、0.7mでほぼ4等分しており、補助的なものと推定される。埋土は暗褐色混土である。なお、P1から高台付坏の口縁部が発見されている。



第22図　D14竪穴住居跡



第23図　D14竪穴住居跡 炉跡 柱穴断面図

〈炉〉　中央西端部にあり、西壁の東0.8mに位置する。平面形は中央部が溝によって破壊されていることもあって1.3×1.0mの蝶のようである。元来は方形に近かったと推測される。焼土の厚さは8cmで中央部が凹んでいる。

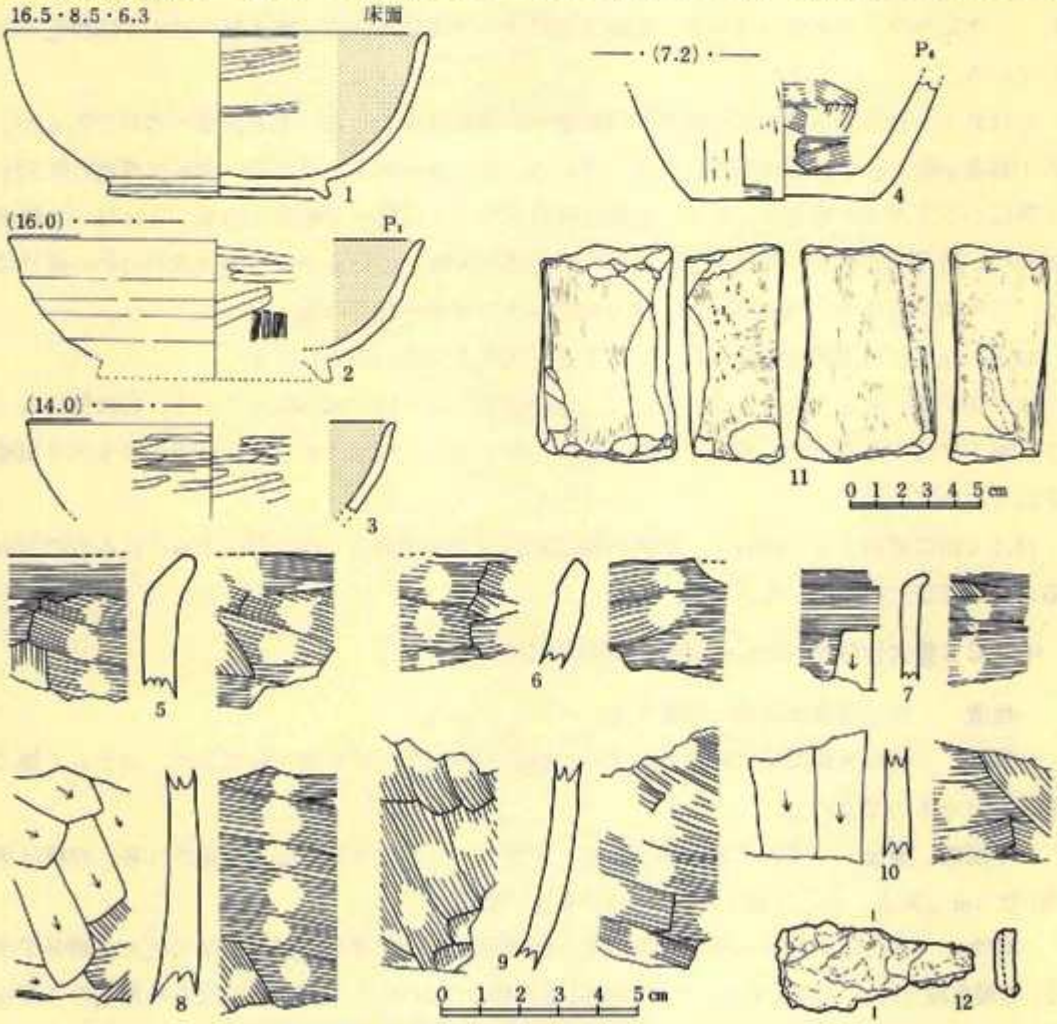
〈土壙〉　住居跡の北西部に位置する。64×48cmの長方形を呈し、深さは20cmである。埋土は黒褐色土の単層で礫を含んでいる。

〈その他〉　P1、P5及び西壁付近に焼土が散在している。厚さが2、3cmと極めて薄いもので、住居跡の焼失に伴うものとみられる。

また、幅20～25cm、深さ5cmほどの溝3条が住居跡に直交する形で検出されている。このうちの1条は炉跡を切っており新しいものである。

D14－2竪穴住居跡

〈平面形、規模〉　D14－1住居跡によって破壊されたとみられ、全体形は不明である。柱



第24図　D14竪穴住居跡出土遺物

配置によっては1住居跡と同様長方形を呈していたと思われる。規模は南北がP6、7間が3.8m、東西がP6、8間が2.3mである。1住居跡より若干大きくなっている。

〈柱穴〉　P6～8の3柱穴を確認したのみである。直径20～30cmの円形で、深さは23～30cmである。埋土はP6、8が暗褐色混土で焼土を含み、P7は褐色土である。なお、P6からは甕の体部破片が発見されている。

〈炉〉　柱穴配置によると中央西端に偏在するようである。平面形は1.0×1.0mの方形である。焼土の厚さは8cmで、下位に極暗褐色焼土の掘り込みをもつ。現地性焼土である。

〈遺物〉　どちらの住居跡に伴うか判別困難であり一括する。発見された遺物は土師器69点（坏11点、甕58点）、縄文土器2点、砥石1点、鉄製品（刀子？）1点である。1は西壁際から伏せた状態で発見された高台付坏である。ほぼ復元できるものでみこみが大きくどっしりとした量感をもっている。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部はそのまま納まる。底部はヘラケズリ調整され、高台は短く直に取り付いている。内外面とも剥落しているが、内面は黒色処理され、丁寧にヘラミガキされている。色調は底部から外面にかけて二次火熱のためか赤橙色を呈している。

2はP1から発見された高台付坏の口縁部から体部破片である。1と同様の器形であるが、若干器高が低く、口縁部が僅かに外反している。高台部が剥落している。内面は黒色処理され、丁寧にヘラミガキが施されている。色調は灰白色で、1に比べて軟質である。3は坏の口縁部破片で、口端部が僅かに外反する。内面に黒色処理を施しているが、二次焼成のためか破片によって色調が異なる。内外両面とも横方向にヘラミガキされている。

以上の他には内面黒色処理されない坏1点（回転糸切底）がみられる。

4～10が甕である。5～7が口縁部で、4が底部、8～10が体部破片である。口縁部は5、7が短く外反するもので、6はそのまま納まる形である。体部は8、10が外面ヘラケズリ調整されている。

11は4面に砥面をもつ砥石で、砥面の幅は3.2～4.5cmである。12は刀子とみられるものである。先端部が欠損している。

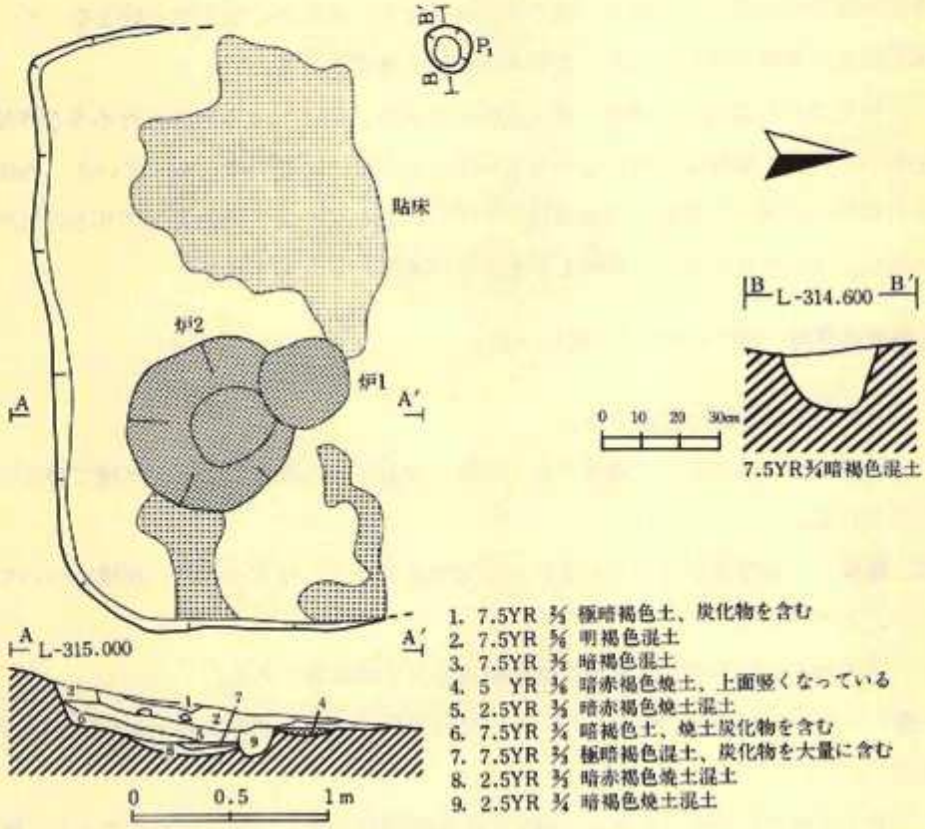
(6)　C6竪穴住居跡（第25・26図、図版9・16）

〈位置〉　B地区東部北端に位置する。

〈重複〉　特に重複関係は確認されていないが、炉が2ヶ所検出されており、おそらく建て替えられたものであろう。

〈平面形、規模〉　残存する西壁、南壁、東壁から長方形を呈すると推定される。規模は東西が2.9mである。南北は貼床によると1.7mまで確認できる。

〈埋土〉　埋土は上位から極暗褐色混土、明褐色混土、暗赤褐色混土、暗褐色土に細分できる。明褐色混土は礫を混入するもので非常に堅く締っており、人為的に埋め戻されたものとみられる。その下の暗赤褐色混土は焼土、炭化物を大量に含むもので、焼失に伴うものと推測される。



第25図　C 6 竪穴住居跡

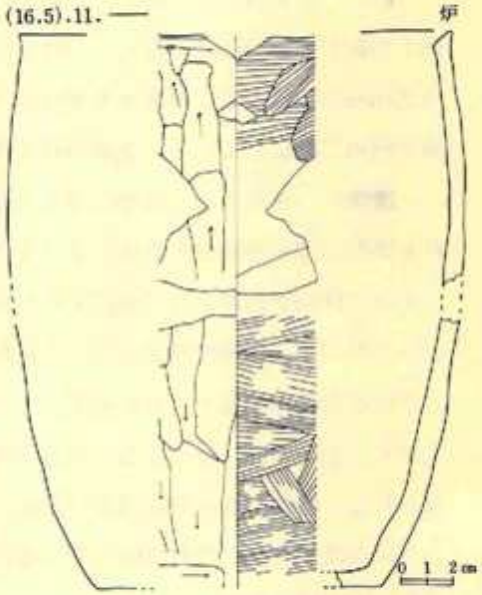
〈床面、壁〉　床面は黄褐色土が貼床されている。堅く踏み締められて層分かれ現象を起している。壁は急激に立ち上がっており、壁高は24cmである。

〈柱穴〉　P 1 を検出したのみである。直径23cmの円形で、深さが15cmである。埋土は暗褐色混土である。

〈炉〉　隣接する形で2基検出している。北側のものを炉跡1、他を炉跡2として記述する。

炉跡1は住居跡の中央やや東寄りに位置する。47×43cmの円形を呈し、焼土の厚さは4cmで、上面が硬くなっている。

炉跡2は住居跡の南東部にあたる。90×84cmの円



第26図　C 6 竪穴住居跡出土遺物

形で、中央部が幾分凹んでいる。焼土の厚さは5cmほどで、柔らかく焼土混土状となっている。炉の北東部では灰の集積が認められる。先行する炉跡と推定される。

〈遺物〉　発見された遺物は土師器、甕1点のみである。指でつまみ出された小さな外傾する口縁部をもつもので、体部は内彎しながら立ち上がり中ほどに最大径をもっている。外面は口縁直下から粗いヘラケズリされ、内面は粗くナデ付けられている。底面もケズリとられているようであるが、はっきりしない。炉跡1の上面及び床面から発見された。

(7)　**B5竪穴住居跡**（第27・28図、図版10・16）

〈位置〉　B地区東部北端に位置する。

〈重複〉　北西半が4溝によって破壊されている。なお、炉の配置によっては建て替えによる2棟が想定される。

〈平面形、規模〉　南壁及び東壁から方形か長方形を呈すると推定される。規模については破壊されていて不明である。

〈埋土〉　埋土の上位は不明であるが下位は暗褐色混土の単層である。

〈床面、壁〉　床面は幾分北に傾斜しているがほぼ平坦である。壁の立ち上がりは急激で壁高は40cm前後である。

〈柱穴〉　P1を検出したのみである。24×20cmの長円形を呈し、深さは27cmである。底が尖っており打ち込みによるものとみられる。埋土は褐色混土である。

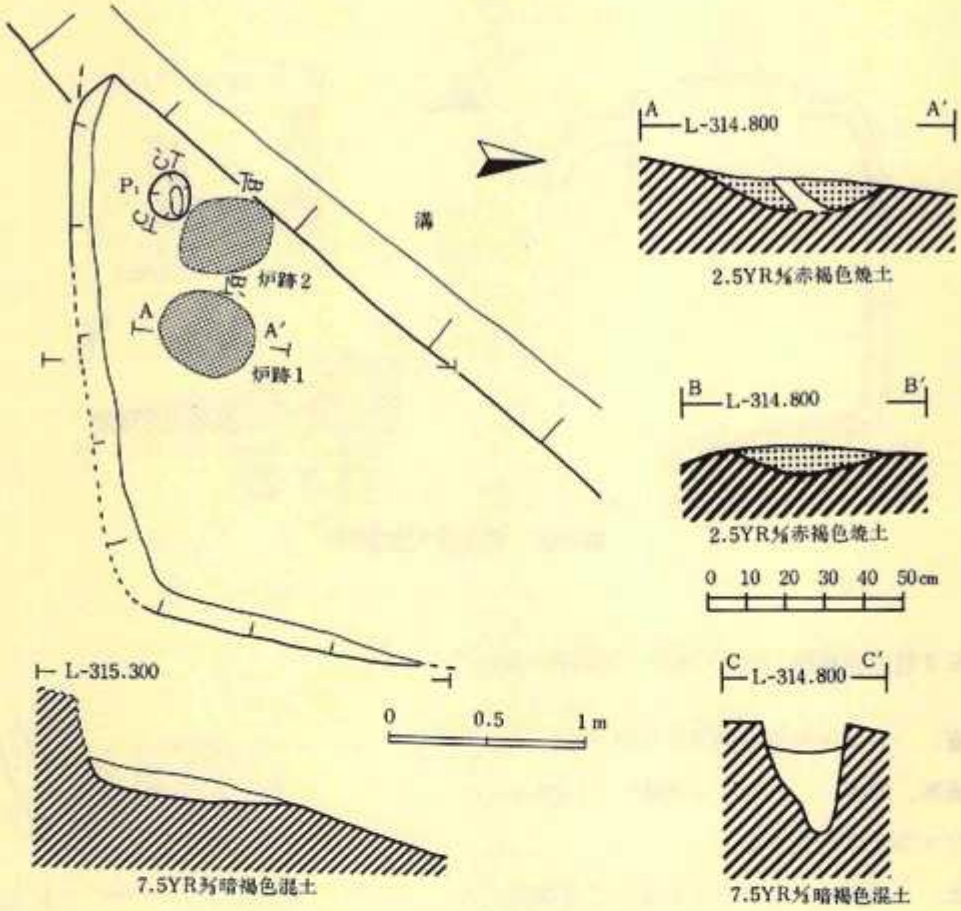
〈炉〉　2基確認している。北のものを炉跡1、他のものを炉跡2とする。検出状況から炉跡1が新しいものとみられる。炉跡1は南壁の北30cm、炉跡2はその西に隣接し、同様に南壁の北40cmに位置する。両者とも平面形は50×40cm、45×35cmの円形で、焼土の厚さも8cm、7cmと極めて酷似している。上面が硬く焼けている点についても共通している。

〈遺物〉　発見された遺物は縄文土器1点、土師器6点、鞴羽口1点である。土師器はいずれも甕形で図示可能なものは2点にすぎない。

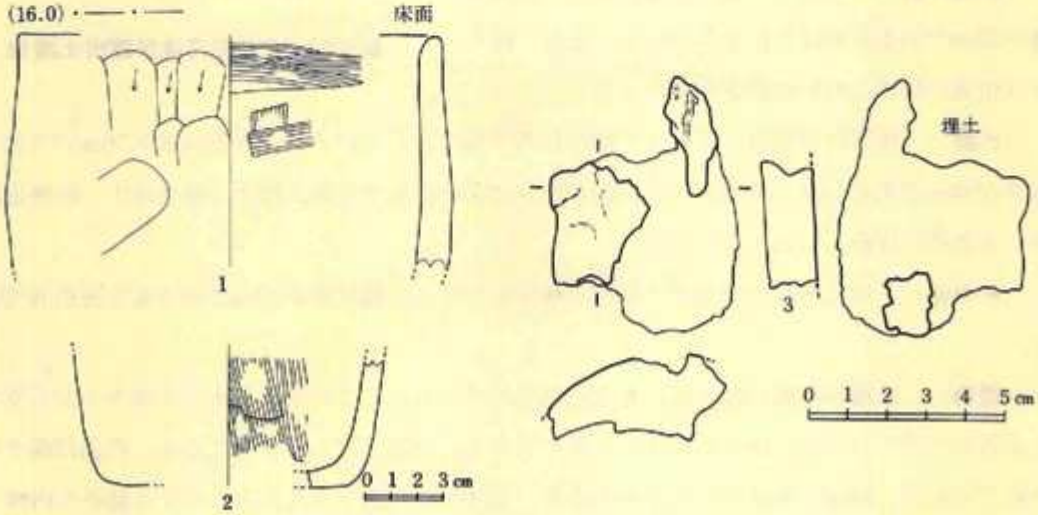
1は口縁部が内彎ぎみに直行するもので、そのまま納まる。全体的に肉厚で、外面が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向にナデられている。

2は小型甕の底部とみられるもので、粗雑な作りである。体部が底部から丸味をもって立ち上がり、上半が直に近くなる。内面下端部は横方向、その上は縦方向あるいは斜方向のナデがみられる。器壁は全体的に薄手である。以上の他にはロクロ成形による体部破片がある。

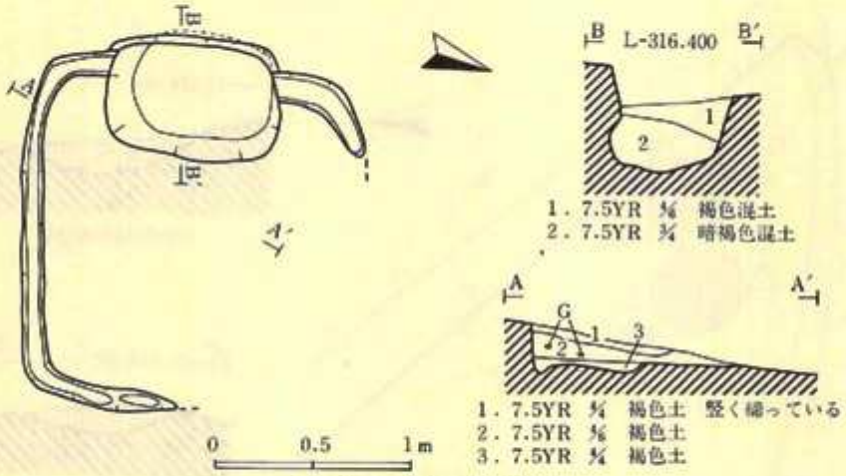
3は直径8cmほどの羽口破片である。剥落が著しく全体形は不明である。表面が青灰色～灰白色、内面は赤色化している。



第27図　B５竪穴住居跡



第28図　B５竪穴住居跡出土遺物



第29図　E4竪穴住居跡

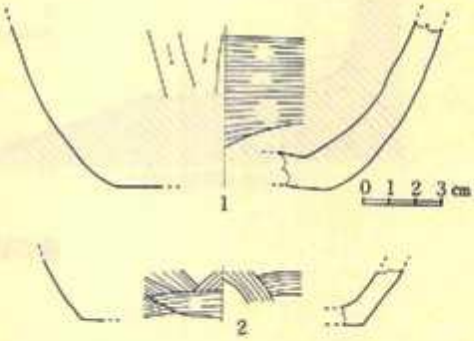
(8) E4竪穴住居跡（第29・30図、図版11・16）

〈位置〉　B地区東端中央部に位置する。

〈平面形、規模〉　残存する周溝から1辺1.8mの方形を呈すると推定される。

〈埋土〉　褐色土が主体を占めるが、色調等から3層に細分できる。最上位は堅く締っており人為的に埋め戻されたと推測される。

〈床面、壁〉　床面は平坦で非常に堅い。壁高は僅か20cmであるが壁は直に立ち上がる。なお、柱穴、炉は慎重に検索したが確認されなかった。



第30図　E4竪穴住居跡出土遺物

〈土壙〉　住居跡の西端にあって、壁外に若干張り出している。平面形は90×56cmの方形で深さが34cmである。底は不整形で、西側が壁下に入り込んでいる。埋土は褐色混土、暗褐色混土で人為的に埋められたとみられる。

〈その他〉　壁の残存する全てで周溝を検出している。幅は僅か10cmで深さも5cm前後である。

〈遺物〉　床面から甕の底部破片2点を発見している。1は底部から大きく開きながら立ち上がるもので、おそらくは大型の甕か、鉢であろう。肉厚でどっしりしている。内面は横ナデされているが、外面は磨滅のため不明である。2は小型の甕とみられるもので底部から内彎しながら立ち上がる。体部下端が幾分横に張り出している。調整は磨滅のためはっきりしない。

3　焼土遺構

(1)　E５焼土遺構（第31図、図版15）

C地区中央北端にあり掘立柱建物跡の東方約７ｍに位置する。周辺より僅か凹んだ地形に形成された現地性焼土で、60×50cmの不整な円形を呈し、焼土の厚さは６cmで、表面が強力な火熱を受けたとみられ堅く締っている。周囲には凹地以外確認されていない。

(2)　C６焼土遺構（第31図）

C地区の中央に位置し、掘立柱建物跡の南東僅か0.7ｍにあたる。55×47cmの不整な長円形を呈し、焼土の厚さは４cmである。焼土は上面が赤褐色であるが、下位は焼土混土状となる。なお、焼土遺構の周辺は黒褐色土の落ち込みとなっており、中から縄文土器が大量に発見されている。

(3)　D18焼土遺構（第31図）

B地区西端部に位置する。55×52cmの円形の焼土ピットである。深さは20cmで、埋土は焼土を粒状に含む焼土混土である。東端の一部が柱穴状ピットによって破壊されている。周辺には柱穴状ピットが発見されているが、伴うものかどうかは不明である。

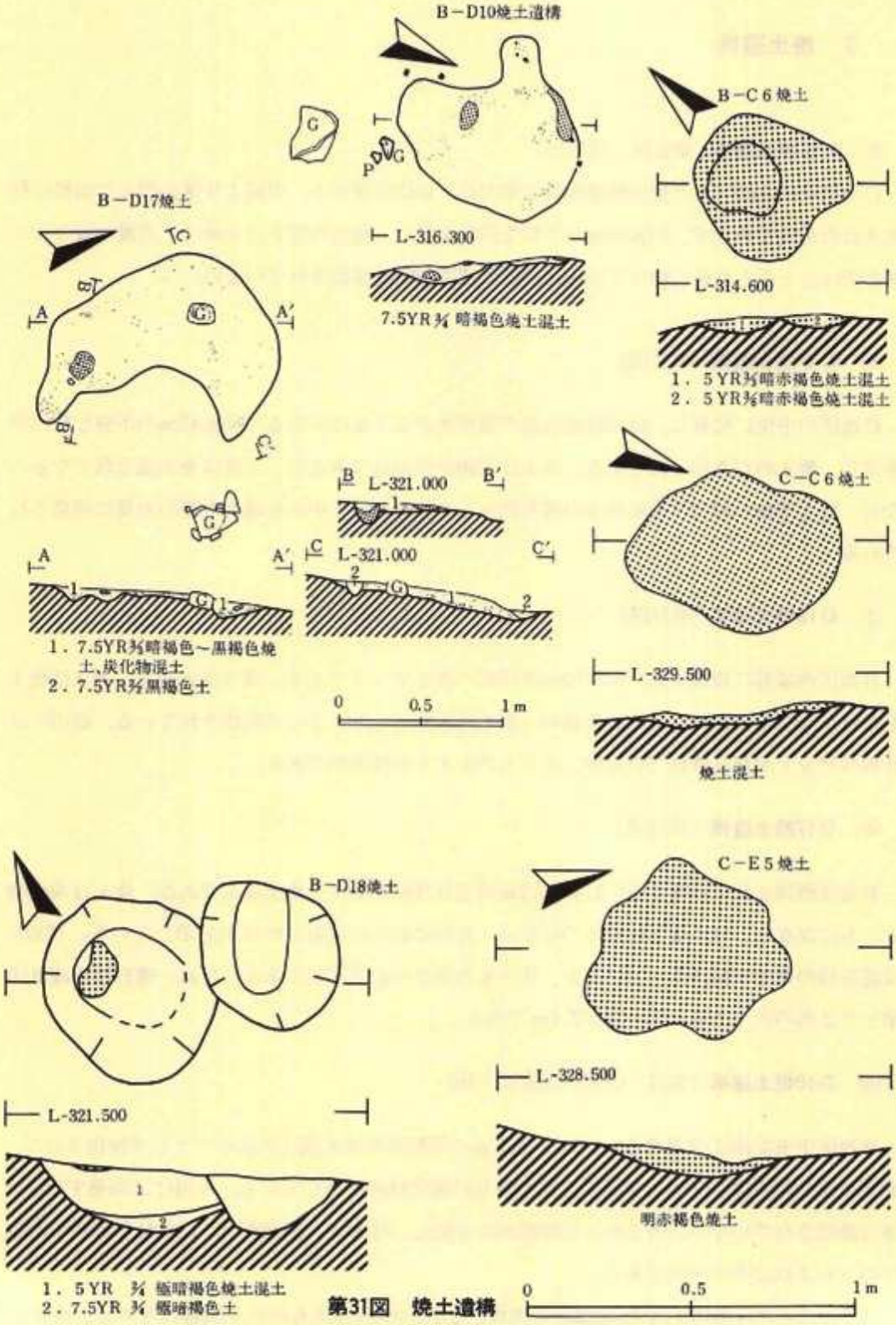
(4)　D17焼土遺構（第31図）

B地区西端北部に位置する。1.4×0.7ｍの三日月形を呈する焼土混土である。焼土は炭化物とともに混在し、焼土層とはなっていない。地形に添って流失した状況を示している。周辺には礎石様の角礫が検出されているが、伴うものかどうかは不明である。なお、礎石様の礎は図示した２例のみである。芯々間が2.4ｍである。

(5)　D10焼土遺構（第31・32図、図版15・16）

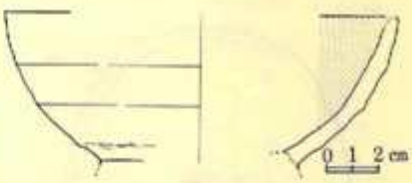
B地区中央北端に位置する。1.15×1.1ｍの不整形な焼土混土の広がりとして検出された。焼土は炭化物を含むブロック状で、燃え残りの炭化材が散在している。周辺には関連する柱穴等は確認されていない。近くから土師器36片を得た。坏８点、甕28点で、いずれも細片である。坏のうち２点は高台付坏である。

第23図はそのうちの１点で、底部から内彎しながら立ち上がるもので、口縁部はそのまま納まる。


B－D10焼土遺構
L-316.300
7.5YR 3/4 暗褐色焼土混土
B－C 6 焼土
L-314.600
1．5YR 3/4 暗赤褐色焼土混土
2．5YR 3/4 暗赤褐色焼土混土
B－D17焼土
A
A′
B
B′
C
C′
G
L-321.000
1．7.5YR 3/4 暗褐色～黒褐色焼土、炭化物混土
2．7.5YR 3/4 黒褐色土
0
0.5
1 m
C－C 6 焼土
L-329.500
焼土混土
B－D18焼土
L-321.500
1．5YR 3/4 極暗褐色焼土混土
2．7.5YR 3/4 暗褐色土
C－E 5 焼土
L-328.500
明赤褐色焼土

第31図　焼土遺構

外面はロクロ成形痕と輪積痕を残し、内面が黒色処理されている。ミガキ痕跡については磨滅していて不明である。甕は外面ヘラケズリ、内面ナデ付けによる体部片などである。



第32図　D10焼土遺構出土遺物

なお、炭化物については学習院大学において、年代測定を行った。それによると、2220±130B.P.年（1950年よりの年数）が得られている。その年代はBC270±130年となる。

(6) C6焼土遺構（第31図）

B地区東端北部に位置する。C6竪穴住居跡の北にあたる。同住居跡床面下約10cmから検出されたもので、先行する遺構と推定される。48×45cmの不整な円形を呈する焼土混土である。厚さは4cmほどである。周辺には関連する遺構は確認されていない。

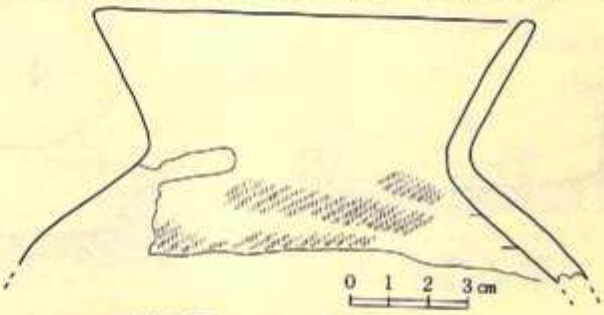
4　土　壙

(1) D13土壙（第34図、図版12）

B地区中央北端に位置する。直径80cmほどのピーカー状で、深さは20cmである。埋土は暗褐色混土の単層である。

(2) D12土壙（第33・34図、図版12・16）

B地区中央北端に位置する。直径1.5mほどのピーカー状で、底面は等高線に添って傾斜している。深さは30cmである。埋土は黒褐色混土が主体となり、壁近くに暗褐色混土が流入している。埋土から縄文土器3点が発見されている。土器は壺形土器の口縁部で、頸部が「く」の字状に屈折している。口縁部は直線的に外傾し、胴部は大きく膨らむ形になると思われる。口縁部は無文研磨され、下半は弱い単節斜縄文が施文されている。



第33図　D12土壙出土遺物

(3) D7土壙（第34図、図版12）

B地区東部の北端に位置する。直径1.5mのフラスコ状で、底径は1.6mを計測する。深さは90cmほどである。

1.9×1.5・1.7×1.6・0.9

D7 土壙

L-315.000

1. 7.5YR 5/1 黒色土
2. 7.5YR 5/2 黒褐色混土
3. 7.5YR 5/2 黒褐色混土
4. 7.5YR 5/2 黒褐色土
5. 7.5YR 5/2 黒褐色土
6. 7.5YR 5/1 黒色土 白色砂質土含む
7. 7.5YR 5/4 褐色土
8. 7.5YR 5/2 暗褐色混土
9. 7.5YR 5/1 黒色,褐色ブロック状混土
10. 7.5YR 5/4 褐色混土

2.2×1.6・1.8×1.3・0.5

B4 土壙

L-315.100

1. 7.5YR 3/2 黒褐色混土,炭化物混入
2. 7.5YR 5/3 暗褐色混土
3. 7.5YR 5/4 褐色土
4. 7.5YR 5/4 褐暗褐色土,炭化物含む
5. 7.5YR 5/4 褐色土やや硬い

1.5×1.2・1.2×1.0・0.3

D12土壙

L-316.900

1. 7.5YR 5/2 黒褐色混土,上面に炭化物を混入する
2. 7.5YR 5/3 暗褐色混土

1.2×1.0・0.8×0.8・0.3

D2 土壙

L-315.100

1. 7.5YR 5/3 暗褐色土
2. 7.5YR 5/4 褐色土,炭化物を含む
3. 7.5YR 5/3 暗褐色土,炭化物を含む
4. 7.5YR 5/4 褐色土

1.3×1.3・1.2×1.3・0.1

D5 土壙

L-315.700

1. 7.5YR 5/4 にぶい褐色混土,堅く締っている
2. 7.5YR 5/6 褐色土

1.7×1.5・1.5×1.3・0.5

やや硬い

E6 土壙

L-315.700

1. 7.5YR 5/1 黒色土
2. 7.5YR 5/3 暗褐色混土
3. 7.5YR 5/4 暗褐色土

0.9×0.8・0.8×0.8・0.2

D13土壙

L-318.600

7.5YR 5/3 暗褐色混土

1.1×1.0・0.8×0.8・0.4

C 2 土壙

L-314.700

1. 7.5YR 3/3 暗褐色混土
2. 7.5YR 3/4 暗褐色土
3. 7.5YR 5/6 褐色混土
4. 7.5YR 5/4 褐色土 僅かに汚れている

0 0.5 1 m

第34図 土壙

埋土は10層に細分されるが、黒褐色、暗褐色、褐色土に大別される。自然堆積である。

(4) **E 6 土壙**（第34図、図版12）

B地区東部の北端に位置する。直径1.5 mほどのビーカー状を呈し、深さは50cmで、埋土下位に礫が混入している。埋土は黒色土、暗褐色土である。

(5) **D 5 土壙**（第34図、図版13）

B地区東部の北端に位置する。直径1.2 mほどの皿状の土壙で、深さは僅か13cmである。埋土は褐色混土である。

(6) **B 4 土壙**（第34図、図版13）

B地区東部の北端に位置する。2.1×1.6mの長円形を呈し、深さは50cmである。埋土は黒褐色、暗褐色、褐色土に大別され、さらに5層に細分できる。

(7) **D 2 土壙**（第34図、図版13）

B地区東端に位置する。直径1 mほどのビーカー状の土壙で、深さは30cmである。埋土は暗褐色土、褐色土からなる自然堆積である。

(8) **C 2 土壙**（第34図、図版13）

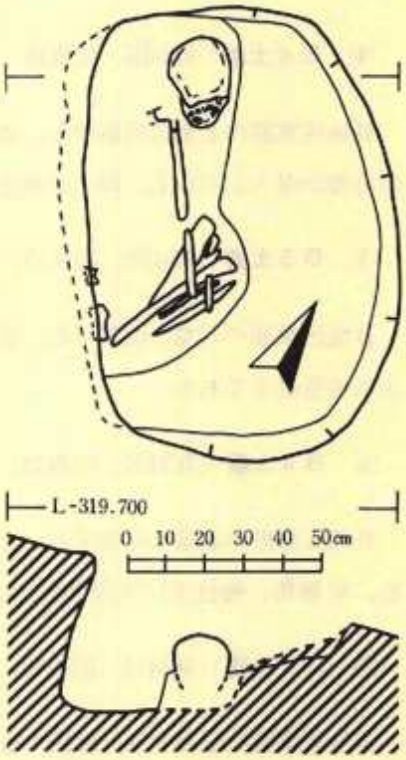
B地区東端に位置する。直径1 mほどのビーカー状の土壙で、深さが40cmである。埋土は暗褐色混土、褐色土からなる自然堆積である。

5 D14土葬墓（第35図、図版15）

B地区中央北端部に位置する。上半は既に削平されており墳丘等の存在は不明である。平面形は1.2×0.8mの隅丸長方形で、斜面上位側（西側）の底部が幾分張り出して袋状となっている。底面は埋葬部分が段をなして深くなっており、遺骸はその½ほど（90×45cm）の穴に膝を抱えた側臥屈葬の姿勢で埋葬されている。土壙の長軸方向がN31°Wであり、遺体は北頭位東向きに埋葬されたことになる。土葬墓の深さは検出面から40cmで、埋土は暗褐色混土で、黄褐色土がブロック状に混入している。

なお、遺物は全く発見されなく、年代は不明と言わざるを得ない。ただし、人骨の遺存状況等から判断すると近世に属すものではないかと考えられる。

また、人骨の鑑定については岩手医科大学において行われた。「年齢は16～20歳で、身長が150㎝前後のやや小柄な女性で、しかも骨に兆候の出るような病変は認められなかった。」という鑑定結果を得ている。



第35図　D14土葬墓

6　溝　跡

(1)　1溝（第36図）

B地区北端部にあり、町道十二夜線に添って北東～南西方向を指す。確認された長さは5.8ｍで、東半が調査区外に続いている。幅が35㎝で、深さは僅か6㎝である。底面は幅15～20㎝ほどの小さな段をなしており、唐鍬様の工具で掘られた痕跡を残している。埋土は暗褐色混土である。町道に添って曲がっており新しいものと思われる。

(2)　2a～c溝（第36図、図版14・15）

B地区北部に位置し、調査区を北東から南西方向に走る。町道十二夜線の南東約10ｍにあたっている。確認された長さは21.4ｍで、両端は調査区外に続いている。この溝は3条の溝からなっており、造り替えの可能性がある。北からａ溝、ｂ溝、ｃ溝、として記述する。

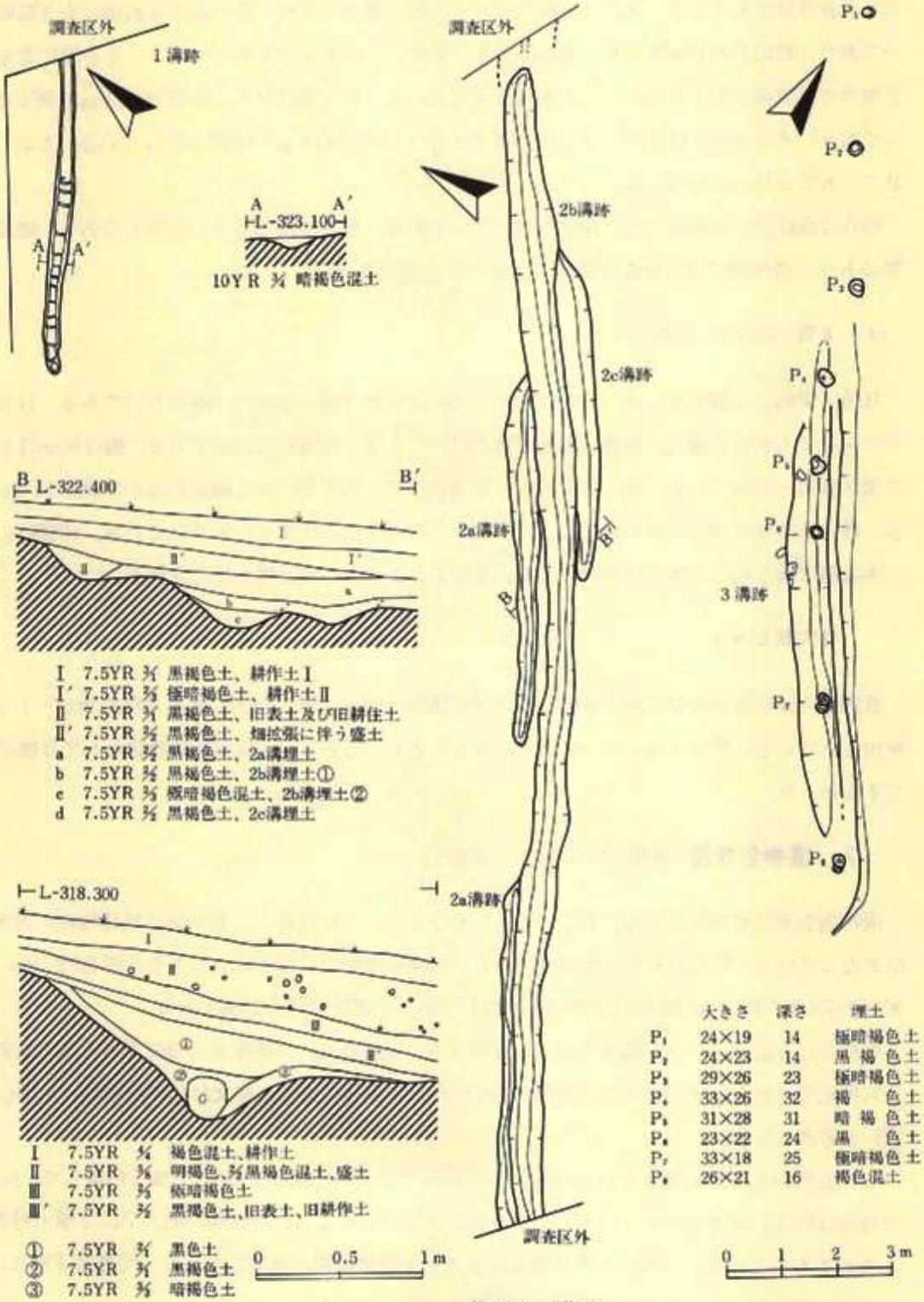
２ａ溝は３条のうちでは北に位置するもので途中が切れている。幅が約50㎝、深さが24㎝で12.6ｍが確認されている。埋土は黒褐色土の単層である。２ｂ溝を切っている。

２ｂ溝は３条のうちでは幅が80㎝と広く、深さも23㎝と深い。長さは21.0ｍ確認されており、一番保存状況が良好である。断面形はＵ字状を呈し、埋土は黒褐色土、極暗褐色土の２層からなっている。２ｃ溝を切っている。

２ｃ溝は中央部約6.0ｍを確認したのみである。北半が2b溝によって切られている。幅は50㎝以上(おそらくは60㎝前後であろう)、深さが15㎝ほどである。埋土は黒褐色土の単層である。

これら３条の溝は町道に平行して曲がっており、畑地の根切りに相当するものと推測される。

(3)　3溝（第36図、図版14）



	大きさ	深さ	埋土
P_1	24×19	14	極暗褐色土
P_2	24×23	14	黒褐色土
P_3	29×26	23	極暗褐色土
P_4	33×26	32	褐色土
P_5	31×28	31	暗褐色土
P_6	23×22	24	黒色土
P_7	33×18	25	極暗褐色土
P_8	26×21	16	褐色混土

第36図 溝跡

B地区の中央やや西よりにあり、地目堺に位置している。幅が70cm、深さが約20cmで、確認された長さは9mである。底部から柱穴状ピットが5個検出され、その北西延長部にも3個続いており、総延長約19mとなる。北からP1、P2、……P8とすると、P5、6を境に北半と南半では方向が若干異なり、北半が東にふれている。柱穴間はP5、6間が1.3mと狭くなっており、それ以北では1.5～2.5m間隔であり、以南は約3mの等間となっている。なお、P7、8では柱穴に重複が認められる。

柱穴は直径20～30cmほどで、深さが14～32cmである。埋土は褐色混土～黒色土である。地目堺にあり、当地域にみられる牧柵列ではないかと推測される。

(4) **4溝**（第11図、図版14・15）

B地区東部に位置する。溝の方向は南半ではほぼ東西方向、北半では南北方向である。H6グリッドで大きく屈曲し、両端は調査区外に続いている。総延長は32mである。幅は80cmほどで深さは34～52cmである。埋土は黒色土、黒褐色土で、埋土下位から碗形鉄滓が発見されている。埋土上位は人為的に埋められており、南半の埋土下位には礫が投入されている。（図版15）

本遺構は溝を境に大きく段差があって、整地される以前の地目堺と推定される。

柱穴状ピット

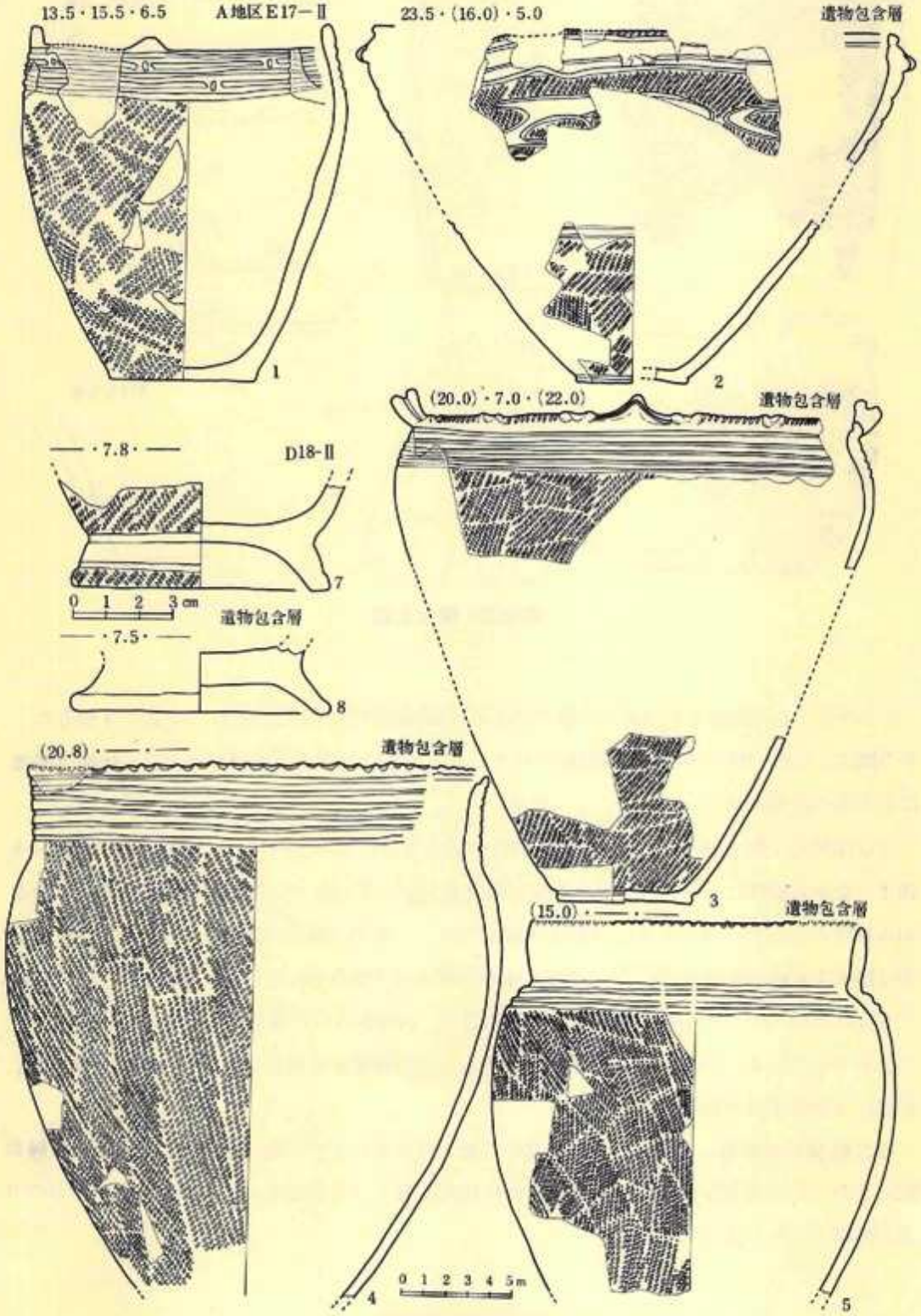
B20竪穴住居跡からD17焼土遺構にかけて直径20～30cm、深さが20～40cmの柱穴状ピットが検出されている。中には並んでいるようにみられるものもあるが、掘立柱建物跡としては確認できなかった。

7　遺物包含層（第10・37・38図、図版17）

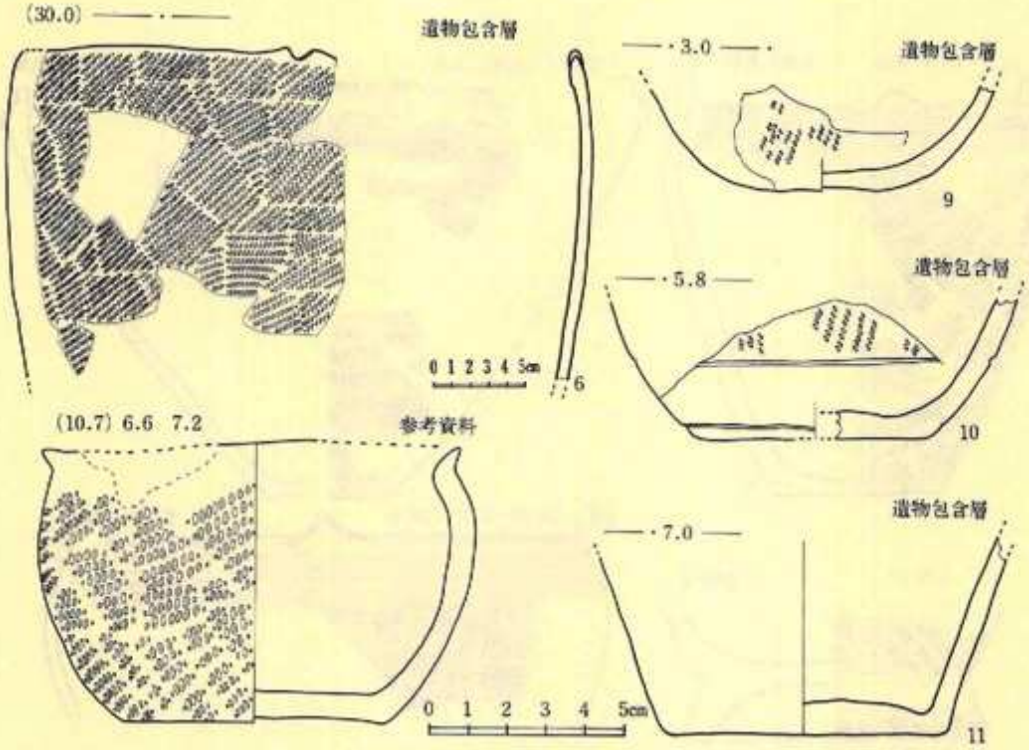
遺物包含層はC地区のB6、B7、C6、C7グリッドに位置し、D9掘立柱建物跡の前面にあたっている。標高129.4～129.8mにあり、南東に傾斜する斜面に立地する。南北約5.8m、東西約3.8mの長円形の範囲に土器片が散在している。厚さは最大23cmである。

発見された遺物はすべて縄文土器で、底部9点、胴部45点、口縁部8点の67点である。このうち復元できたものは5個体で、実測可能なものは4個体である。縄文時代晩期中葉（大洞C_2式）と考えられる。

2は底部から大きく開きながら立ち上がる鉢形土器で、口縁部が肥厚し、幾分内彎している。口縁部は波状口縁となるようであり、口唇部には刻み目をもち、口縁部の最大部に2個一対の小突起をもっている。下半には磨消縄文による主文様帯が横に展開している。文様帯下部には2条の沈線がめぐり、また体部下端にも沈線がめぐっている。


13.5・15.5・6.5
A地区E17－Ⅱ
1
23.5・(16.0)・5.0
遺物包含層
2
(20.0)・7.0・(22.0)
遺物包含層
3
—・7.8・—
D18-Ⅱ
7
0 1 2 3 cm
遺物包含層
—・7.5・—
8
(20.8)・—・—
遺物包含層
4
0 1 2 3 4 5m
(15.0)・—・—
遺物包含層
5

第37図　縄文土器



第38図　縄文土器

3は外折する口縁部をもつ鉢形土器である。口縁端部には前後に分かれた突起を4個もち、その間には2個一対の小突起が3個配されている。肩部には5条の沈線がめぐり、体部下端部にも1条の沈線がめぐっている。

4は深鉢形土器である。器形は底部からやや開きぎみに立ち上がり、肩部が緩やかに張らみ細まりながら頸部に至る。口縁部は直線的に立ち上がっている。口唇部には指頭の押捺された刻み目状の小波状口縁である。口頸部は無文帯で、6条の沈線が等間隔にめぐっている。下半は撚糸文が縦回転されている。なお2～4の口縁3点は部内側にも1条の沈線がめぐっている。

5は頸部が「く」の字状に屈折する鉢形土器で、内彎ぎみの口縁部がそのまま直に立ち上がる器形をしている。口唇部には小さな刻みをもち、口縁部から肩部にかけては無文研磨され、肩部に3条の平行沈線がめぐっている。

6は粗製の深鉢形土器である。口縁部が内彎ぎみに立ち上がり端部が肥厚している。口縁端部に2個一対の突起が付いている。8は台付鉢の底部とみられるものであり、9～11は小型土器の底部とみられるものである。

8　遺構以外の遺物

遺構以外から発見された遺物は縄文土器、石器と若干の土師器、須恵器、鉄製品、鉄滓、陶磁器、自然遺物等である。

(1)　縄文土器（第37・39・40図、図版17・18）

縄文土器は数はそれほど多くはないが、早期、前期、中期、後期、晩期、粗製土器に分けることができる。

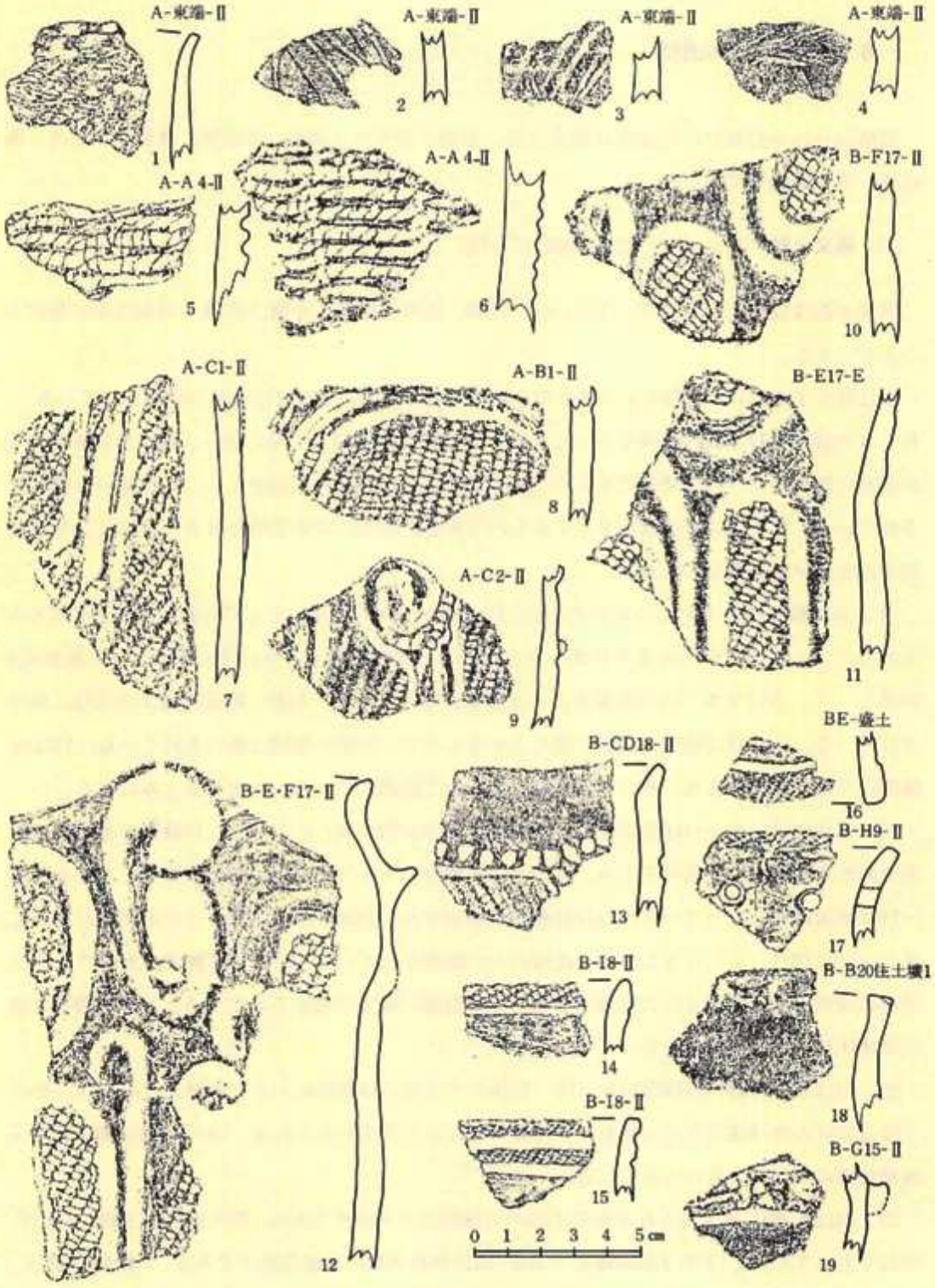
1は外反する短い口縁部をもつ破片で、内側からの刺突によって小波状口縁となっている。ＲＬＲの複節の絡条体圧痕文をもっている。胎土には金雲母を大量に含み、焼成は良好であるが非常に脆い。２～４は条痕文をもつ土器である。２は幅広い条痕をもち、４は細い条痕が付されている。また、3は条線状を呈するものである。胎土には金雲母を含み、焼成は良好で堅緻である。早期後葉とみられる。

５、６は横位綾絡文をもつもので、胎土には僅かながら繊維を含んでいる。円筒下層式とみられる。７～９の３点は大木８ｂ式とみられる同一個体である。９は隆沈線によって渦巻文を描出し、７、８は２本一対の曲線あるいは直線となっている。なお、隆帯は地文施文後に貼付されている。10～12は隆帯が大きく盛り上がるもので、隆帯の周囲は磨消されている。12は口縁部近くに渦巻文をもち、その下の文様は縦方向に展開している。大木９式とみられる。

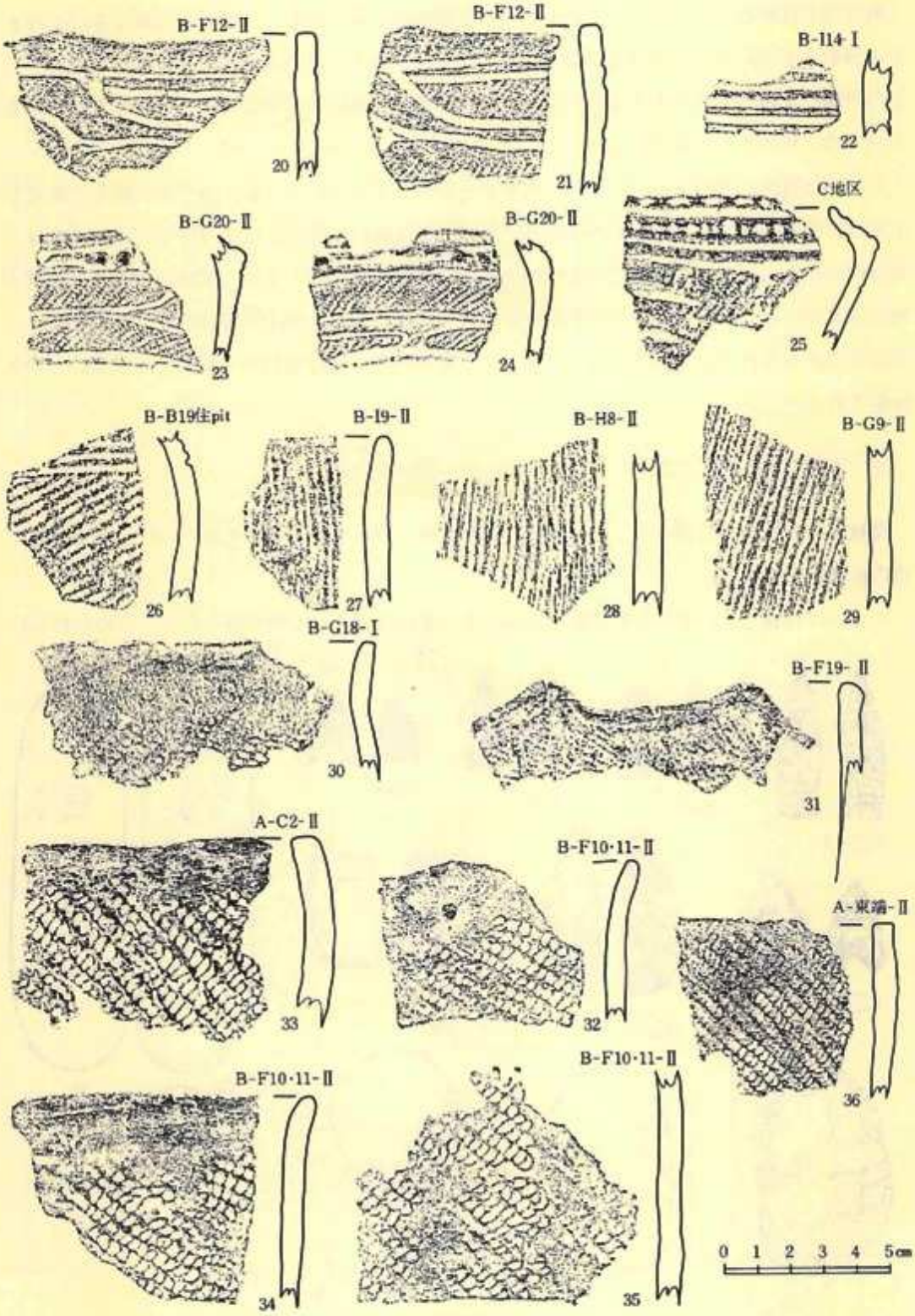
13は波状口縁をなす口縁部破片で、口端部の内側が削り取られている。口縁部を無文帯とし、横方向から施された刺突列をもち、その下は沈線がめぐっている。中期末葉と考えられる。14～16は磨消縄文をもっている。14は沈線下が磨消され、15は２条の沈線の下が磨消されている。また、16は脚台とみられるもので、沈線の上が磨消されている。17、18は無文の土器で、17が頸部に焼成以前に穿孔された貫通孔をもち、口唇部に縄文が施文されている。18は口唇部に縄文原体圧痕による刻み目をもっている。

20、21は鉢形土器の口縁部破片（同一個体）である。口唇部に小さな山形突起をもつ。その下は入組状の磨消縄文となっており、沈線の中には三叉文がみられる。縄文時代後期末葉から晩期初頭にかけてのものとみられる。

23、24は大洞C_2式とみられる鉢形土器の口縁部近くの破片である。最大胴部に２個一対の小突起をもっている。下半は磨消縄文である。25は鉢形土器の口縁部破片である。口縁部は逆「く」の字状に短く内折している。口縁部にシダ状文、下半に雲形文？が描出されている。口唇部は小波状となっている。22は平行沈線が５条確認され、26は３条の沈線がめぐっている。



第39図　縄文土器拓影図(1)



第40図　縄文土器拓影図(2)

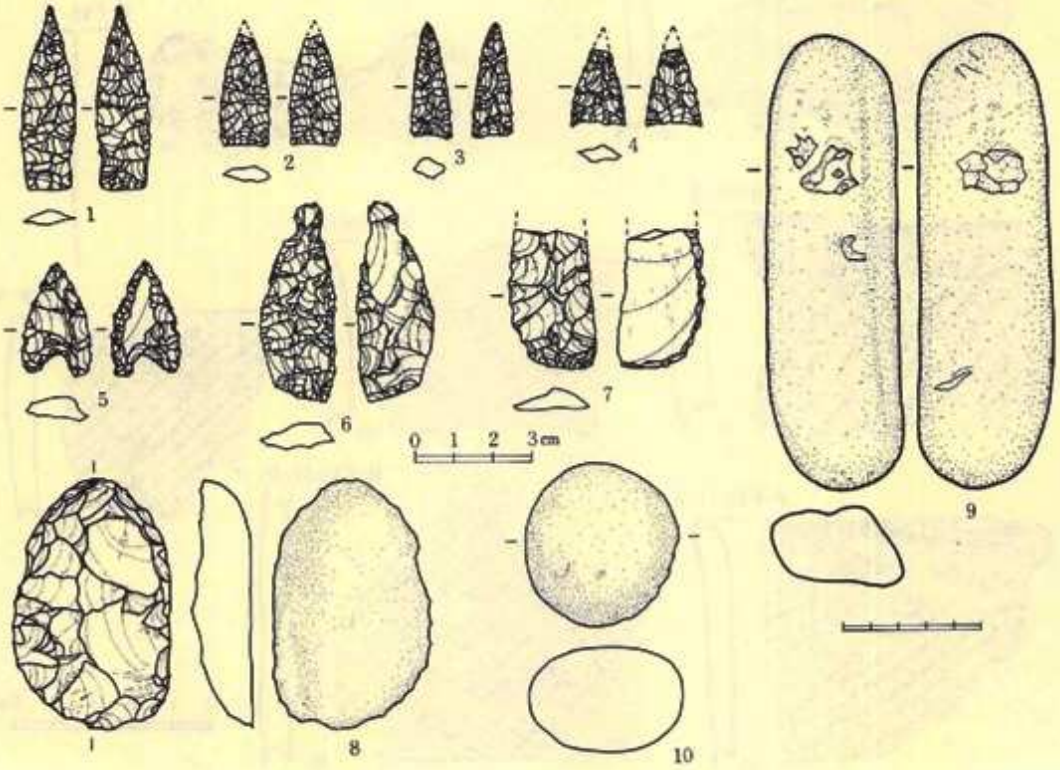
第37図1は口唇部に4個の小突起をもつ小型深鉢形土器である。口縁部が内彎ぎみに立ち上がる器形をしている。口縁部文様帯は変形工字文風である。5条の沈線の2条目は突起の下とその中間で沈線が切れて小さな刺突をもち、4条目は2条目の中間が同様に刺突をもっている。大洞A式に相当するものであろう。

27～36は粗製土器である。27～29は撚糸文を地文とするものである。30～36は縄文を地文とするものである。32、34が若干外反ぎみであり、36は直口に近く、33が内彎している。なお、32は緩やかな波状口縁となっている。32～34は口縁部に無文帯をもち、36は口唇部まで縄文が施文されている。30、31は小さな突起をもつ波状口縁である。31は突起に向って幾分肥厚し、30は体部から外折する器形をなしている。これらの粗製土器は後期から晩期にかけてのものと推定される。

(2) 石器（第41図、図版19）

発見された石器は石鏃5点、石匙2点、石斧1点、凹石1点、丸石1点、剥片、チップ類7点の総数17点である。

1～5は石鏃で、いずれも無茎鏃である。1～4はほとんど基部の抉り込みの認められない



第41図 石 器

もので、側縁は丸味をもつもの（2）と、直線的なもの（3、4）とがある。1は中央部が脹らみ、先端部が細く尖る特異な形態を呈する。大きさは長さが3.0㎝、4.6㎝で、やや大型のものが多く、全体的には縦に長い傾向がある（長幅指数1.8～3.3）。加工は両面とも稜線に達するトレミングで、全周縁丁寧に行なわれている。5は基部の抉り込みが大きいもので凹基鏃とみられる。6は縦形石匙である。両側縁が彎曲するもので、対辺は直線的である。基部が小さく、刃部は基本的には片面加工による片刃である。7は縦形石匙の下半部とみられるもので、残された全周縁に刃部加工されている。右側縁は直線的で、稜線に達する長い加工、左側縁と対辺は彎曲するもので両面加工となっている。8は1面に自然面を大きく残す石斧である。基部と刃部が丸くなっている。刃部は片面から加工された片刃である。6.4×4.0㎝で小型に属するものである。9は棒状を呈する凹石である。凹は表裏両面の一端に認められ、凹の集合体となっている。

10は軽石製の丸石である。直径4.0㎝ほどの球状を呈する。

以上の他には剥片、チップが7点存在する。目的剥片あるいは調製剥片とみられるもので、顕著なバルブや先行する剥離面をもっている。

(3) その他（図版20）

以上の他には鉄製品9点、古銭1点、鉄滓5点、陶磁器5点、自然遺物1点がある。

鉄製品は鉄釘5点、不明鉄製品4点である。鉄釘は長さが4.7～10.2㎝で皆折釘とみられる。不明鉄製品のうちの2点は鍛造品である。幅2.2㎝、長さが6.1㎝の板状のものと、3×1.8㎝の方形で一端に穴のあいているものである。他は鋳造品でいずれも厚さ0.5㎝ほどの板状を呈する。鍋あるいは釜の一部とみられる。古銭は寛永通寶（古寛永）である。

鉄滓は碗形鉄滓等を含むものであり鍛冶滓とみられる。1は、ほぼ原形を留めるもので、直径8㎝、厚さ3.7㎝の碗形を呈し、重さは240ｇである。上面はガラス質な部分と金属質に富む部分とがみられる。下面は碗のように彎曲しており、砂が付着している。2は厚さ1.5㎝ほどの板状を呈する。全体的に緻密で金属質に富む。3は4.5×3.0㎝、厚さ1.8㎝ほどで、ほぼ厚形に近い。上面はかなり凹凸が多く金属質に富んでいる。4は斜めに3段積み重ねた状態で、上段は熔融状態を呈し、中段はコークス状の粗鬆な小孔が多数みられ、下段は金属質に富み、一部金属光沢がある。断面観察でも小孔は極めて少ない。他に全体的に粗鬆な小孔が認められ、一部熔融状態の鉄がみられる小型な鉄滓がある。

陶磁器は、碗、皿、擂鉢等で、銅版絵付を含む近世以降のものである。

自然遺物は馬の歯とみられるものである。

Ⅵ　まとめ

今回の調査は県営岩手地区広域農道整備事業に伴う緊急発掘調査である。調査地はA、B、Cの3地区に分かれている。

A地区は分布調査によると縄文土器、土師器が表面採集されており、竪穴住居跡、土壙などの遺構の検出が予想された地区である。しかし、調査の結果、縄文土器40点、石器3点が耕作土から発見されたにすぎない。B地区も分布調査によって集落跡が予想された地区である。また、昭和44年には鉄磬が発見されており、寺院跡ではないかと考えられていた地域でもある。調査の結果、竪穴住居跡10棟、焼土遺構4基、土壙8基、土葬墓1基などが検出された。また、C地区は当初調査対象地に含まれていなかった地域で、地元の伝承をもとに刈払いを行った結果、平坦地の存在が明らかとなり調査対象地に含めたものである。本調査の結果、掘立柱建物跡1棟、焼土遺構2基、遺物包含層1ヶ所を検出した。

以下、遺構、遺物ごとにまとめることにする。

1　掘立柱建物跡

この建物は小さな尾根の中腹斜面に、切り盛り約半々によって造成された東西約9m、南北約8mの平坦面をもつ基壇上に建てられている。基壇縁には土止め、階段などの施設は見られない。建物は桁行3間、梁行2間の総柱の掘立柱建物である。単期で重複はなく、南北棟で東を正面とする建物である。柱間寸法は、桁行全長が7.16mで、これを24尺とすれば、8尺等間となり、1尺は0.298mになる。梁行は全長5.09mで、これを19.6尺とすれば、9.8尺等間となり、1尺は0.295mになる。

建物内部にはB－2とC－2の柱がある他に、a、b、c、の柱当りが検出され、須弥壇跡と推定される。須弥壇はB－2、C－2の柱の背後にとりつけられ、a、b、cは東柱の跡となる。規模は桁行方向で約8.5尺、梁行方向では約6.5尺と思われ、須弥壇の背後はあけておく必要があったと思われる。床は須弥壇の東柱が検出されること、床面が平坦で固くしまっていたことなどから、板張りの床ではなかった可能性がある。屋根の形は特定できる根拠もないが、軒の出は雨落溝や基壇の大きさから推定して、各柱筋から1.2mぐらいであると思われ、あまり大きくない。

関連遺物が出土していないため、年代などの判断に資料不足であるが、この建物跡は立地や構造などから推定して仏堂と思われる。

2　竪穴住居跡

今回の調査によって検出された竪穴住居跡は８棟である。このうち炉跡や柱穴配置等によって建て替えの確認されたものは２棟で、都合10棟となる。この他にも複数の炉跡をもつものが４棟あり、少なくとも14棟の存在が推測される。

これらの住居跡は第Ⅱ層に黒色の落ち込みとして検出され、壁の立ち上がりや、炉、柱穴の存在などから竪穴住居跡として確認されたものである。ただし、遺構が斜面中位に構築されていることもあって、住居跡下半が耕作等によって削平されており、谷側の壁の検証されたものはない。保存状況は極めて悪い。

(1) 竪穴住居跡の構造

〈平面形、規模〉　完全な形で検出されたものはなく、全体的については不明である。ただ壁の遺存状況等からみると方形か長方形となるようである。規模はＥ４住居跡の2.9mを除いて計測不能であり、はっきりしない。ただし、確認された柱穴間では長軸方向が2.4ｍ、3.3ｍ、3.8ｍ、4.2ｍ、4.5ｍであり、壁柱間を加えると３～５ｍと推測される。短軸方向では2.1ｍ、2.3ｍ、3.3ｍ、3.4ｍで、2.5～3.5ｍほどのものと思われる。なお、長幅比の求められる３棟では２：１、２：1.5、１：１である。

〈床面、壁〉　床面は幾分凹凸あるもののほぼ平坦である。Ｃ６住居跡では貼床が確認されている。壁は崩落している部分もあるが、比較的急激に立ち上がる。壁高は削平されていることもあって20～30cmと低いものが多い。

〈柱穴〉　すべての柱穴を確認したものはないが、主柱穴は４柱穴とみられる。主柱穴は壁に接するもの(Ｂ20－１住、Ｂ19住)と、離れているもの(Ａ20住、Ｄ16住、Ｄ14－１住)とがある。また、西側列にあっては３分あるいは４等分する補助的な柱穴をもつものがある（Ｂ20－１・２住、Ｂ19住、Ｄ14－１住)。補助柱穴はＢ20－１住居跡では浅い土壙状をなし、Ｄ14－１住居跡では打ち込みによるものである。

柱穴は、20～30cmの円形あるいは長円形で、深さは35～60cmである。西側列が深い傾向にある。埋土は暗褐色土か黒褐色土で、炭化物、焼土を含むものが混在している。なお、柱痕は確認されたＢ20－１住居跡のＰ８、Ｐ11では直径10cm、17cmである。

〈炉〉　炉跡の検出された住居跡は６棟12基である。これらは住居跡ごとに２基１対で確認されており、建て替えによる移動が想定される。そのあり方はＢ19住居跡の２例を除いて、斜面上位の壁近く、あるいは柱穴列近くにあり、長軸方向では中央に位置するもの（Ｂ20、Ｄ14、

B５？）と、どちらかに片寄るもの（A20、B19、C６）とがある。

平面形は不整な円形、あるいは方形を呈し、中央が凹んでいる。焼土の厚さは10cm前後で、いずれも明らかな現地性焼土である。中には堅く焼き締っているものもある。なお、炉は地床炉で、炉跡に伴う施設は確認されていない。

〈土壙〉　土壙の確認された住居跡はA20－１・２、D14－１、E４住居跡の５例である。E４住居跡を除いて斜面上位の壁際に位置するもので、貯蔵穴的な存在と推定される。平面形は直径、長径が60～90cmの円形か長円形で、深さは20cmほどとそれほど深いものではない。

〈周溝〉　周溝はB20－１住、E４住の２住居跡で検出されている。前者は西壁と南壁の一部に認められたもので、柱穴間をつなぐ位置にある。E４住居跡では全周するもののようである。

竪穴住居跡の構造をまとめると、壁近くに炉をもつ３～５m×2.5～3.5mの長方形を呈した竪穴住居跡で、補助柱穴を伴う場合もあるが基本的には主柱穴を４個もったものと言えよう。

なお、中には貯蔵穴とみられる土壙、周溝を伴うものなどが含まれている。

(2) 竪穴住居跡の立地と長軸方向

B地区の立地は全体的には東及び北に傾斜する斜面中位であるが、畑地造成前の微地形では次のようになる。

西部――C地区から続く小さな尾根の東斜面

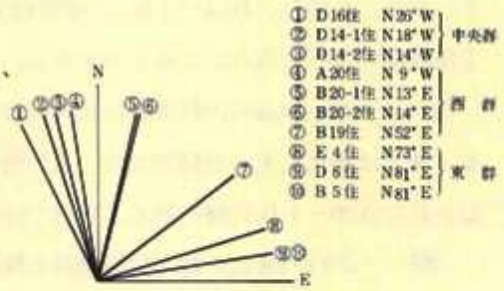
中央部――小さな谷が入り込んでいる北東に傾斜する鞍部

東部――高山から続く小さな尾根の北斜面

また、発見された竪穴住居跡はそれほど多いものではないが、①西群３棟（A20、B20、B19住）、②中央群２棟（D16、D14住）、③東群３棟（D６、B５、E４住）の３つの小群に分けることができる。これら小群の立地は先の微地形の東斜面、北東斜面、北斜面にそれぞれ対応している。さらに、竪穴住居跡の長軸方向は下図の如くやはり３つのグループに分けることができる。

そして、各群の立地と長軸方向は次のようになり、

	立地	長軸方向
西群	東斜面	N９°W～N14°E
中央群	北東斜面	N14°W～N26°W
東群	北斜面	N73°E～N81°E



西群は東斜面に立地して長軸方向が北を向き、中央群は北東斜面に立地して若干北西に傾き、東群では北斜面に立地して東を指しているとまとめられる。すなわち、竪穴住居跡の長軸方向

は群相互ではかなりのバラツキがあるものの、いずれも斜面に対しては直交するあり方を示しており、等高線に平行となるように構築されたことを物語っている。これは竪穴住居跡の方向が地形（斜面方向）に大きく左右されていたことを示唆するものであり、斜面方向の違いが住居跡の長軸方向の違いに反映していたと把えることができよう。平坦地における竪穴住居跡の方向は時間差に置き替えられることがある。[注(1)] しかし、今回の例は当然のことではあるが、地形（斜面）に規制された長軸方向の違いとなっている。

注(1) 八重樫良宏 「東北縦貫自動車道関係埋文調査報告Ⅷ」 岩手県教委 1981

(3) 竪穴住居跡の建て替えについて

前述のように建て替えの確認された竪穴住居跡は僅か2棟であるが、この他にも炉を2個もつものは4棟存在し、都合6棟となる。炉跡の不明な2棟のうち、E4竪穴住居跡は柱穴もない小型の住居跡であり、性格の異なる住居跡とみられ、同一に論ずることができない。また、D16竪穴住居跡は地目界にあって、下半の大部分が著しく削平されており、存在の有無を含めて不明となっている。さて、そうなると炉の確認できた6棟全てが2個有していたことになる。

建て替えの確認された2棟における炉の距離は、B20住が1.2m、D14住が1.3mであり、柱穴の移動距離では0.8～1.5m（B20住）、0.8、0.9（D14住）である。炉を2個もつ住居跡の炉の距離は下表の如く0.5～1.5mであり、建て替えと確認された2棟の0.8～1.5mに一致している。また、住居跡における炉のあり方は南西端（A20住）、北端（B19住）、南東端（C6住）、あるいは中央西壁寄り（B20住、D14住、B5住）のように住居跡ごとに隣接あるいは極く近くにあり、配置に共通性がある。これは、炉跡の設置には建て替え（造り替え）以前の位置が強く規制されたことを物語っており、その場所が強固に踏襲されたことを示していると言えよう。したがって、これらの住居跡は建て替えの確認された2棟と同様に建て替え（造り替え）られた可能性があり、同時存在した集落とも捉えることができよう。

	A20住	B20住	B19住	D16住	D14住	C6住	B5住	E4住
芯々間	0.8m	1.2m	1.5m	―	1.3m	0.5m	0.5m	―
柱　穴		0.8～1.5m			0.8、0.9m			

なお、焼失の可能性をもつ竪穴住居跡は、炉跡の確認されなかった2棟を除くものであり、火災にあった集落とも考えられる。また、C地区の掘立柱建物跡も火災にあった可能性が大であり、同時に存在したことも推測され、寺院あるいは仏堂に関連ある集落の可能性もある。

(4) 竪穴住居跡の年代

遺物の発見された住居跡はB20、D16、D14、C6、B5、E4の6棟である。しかし、そ

の出土量は住居跡が削平されていたこともあって、決して多いものではない。しかも、そのあり方はほとんどが破片で、ある程度器形の捉えられるものは僅か坏2点、甕1点の3点である。

坏はいずれも内面黒色処理された高台付坏で、全体的に高台部が小さくなっている。底部はD14住のものがヘラケズリ調整され、D16住のものが回転糸切り無調整である。ロクロ成形されて、底部切り離し技法が再調整のものと無調整のものとが混在していること等から9世紀末から10世紀頃に位置づけられよう。[注(1)]

甕は口縁部が短く僅かに外反するもので、体部中ほどに最大径をもつ。外面は口縁部下から粗いヘラケズリ調整され、底面もケズリ取られているようである。この甕は子守A遺跡AG56住居跡の4、上の山Ⅶ遺跡EⅡ－3住居跡の78に酷似している。子守A遺跡ではⅣb期として10世紀後半以降、上の山Ⅶ遺跡では特定したものではないが11世紀前後と考えている。[注(2)]

次に構造上からみると、長方形を呈し、しかもカマドをもたないものは、西根遺跡第23号竪穴住居址がある。[注(3)] 同住居跡は9×4mの規模をもつもので、中央の北寄りに焼土が存在し、[注(4)] その点でも当遺跡の住居跡と同様の構造となっている。ただ、発見された遺物はいわゆる灯明皿に先行するものとみられる埦、皿等で、安部氏に関連するものと推定されたものである。今回検出された竪穴住居跡は、構造的には西根遺跡例に類似するものであるが、遺物的にはそれよりも先行するもののようであり、年代決定できる資料をもっていないが、10世紀後半から11世紀にかけてのものとしておきたい。

なお、発見された住居跡はいずれもカマドをもたないものであり、カマドの終焉を示す例となろう。

注(1) 高橋信雄 『岩手の土器』 岩手県立博物館 1982
(2) 高田和徳 『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』 一戸町教委 1981
光井文行 『上の山Ⅶ遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター 1983
(3) 草間俊一 『西根古墳と住居址』 金ヶ崎町教委
(4) 報文では「床面で焚火をしていたと見られるところ」とした部分である。

3 土 壙

検出された土壙はB地区東部の尾根上に6基、中央の鞍部に2基の、計8基である。3～10mの間隔をもって2個1対のあり方をしている。E6、D7土壙とC2、D2土壙の2組では、等高線に直交するように（約3m）近接しており、造り替えによる土壙と推測される。なお、D12土壙は埋土遺物から縄文時代晩期中葉に属することも考えられる。

平面形は長円形のものが1例含まれているが、基本的には円形のようである。断面形はD7土壙を除いてビーカー状あるいは皿状を呈する。D7土壙も円筒形に近いフラスコ状土壙、全

体としての基本形はビーカー状かもしれない。埋土は暗褐色、褐色を主体とするもので、いずれも自然堆積とみられる。大きさは、直径1.5m前後（4例）、1m前後（3例）である。深さは18～90cmで後世の削平に起因しているともみられるが、比較的浅いものが多い。

4 遺 物

発見された遺物は縄文時代と古代に2大別される。

縄文時代の遺物には縄文土器と石器があり、A、B地区の表土及びⅡ層と、B地区の遺構埋土、それにC地区の包含層から発見されたものである。時期的には縄文時代の各期にわたるが晩期中葉（大洞C2式）が主体である。発見された土器はほとんどのものが細片であり、出土量も浅い平箱2箱程度と少ないこともあって、時期を断定できないものが多い。この中ではC地区の遺物包含層の晩期がややまとまりをみせている。石器は剥片石器、礫石器を含めて17点である。

古代の遺物は土師器、須恵器、それに若干の鉄製品、石製品、土製品などで、主に竪穴住居跡埋土及び床面遺物と、表土及びⅡ層採集遺物である。土師器には坏、高台付坏、甕があり、坏、高台付坏はいずれもロクロ成形され、しかも内面黒色処理されたものである。なかには再調整されたものが1点含まれている。甕は口縁部が短く、僅かに外反し、口縁下からヘラケズりされている。須恵器は甕の破片とみられる数点がある。

鉄製品は釘、刀子、鉄滓などであり、石製品は砥石、土製品は羽口である。

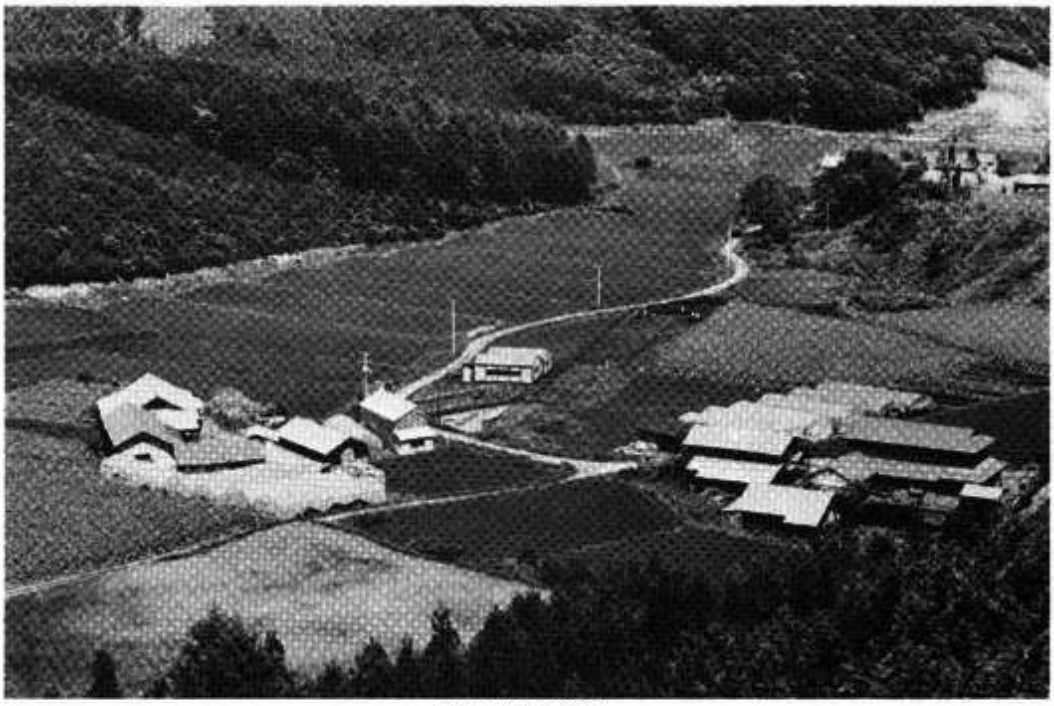
5 まとめ

検出された主な遺構は掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡10棟、土壙8基などである。掘立柱建物跡は2間、3間の総柱の建物で、内部には須弥壇跡と推定される3柱穴が確認され、仏堂と考えられる。竪穴住居跡は長方形を呈し、長軸方向が等高線に平行となるように構築されたもので、住居跡の中には炉とみられるものが2個存在し、建て替え（造り替え）による移動が想定される。これは、検出されたもののうち6棟で確認でき、ほぼ集落全体が同様に建て替えられた可能性があり、同時存在が推定される。このことはまた、焼失住居の可能性をもつことからも言えることで、寺院あるいは仏堂と考えられる掘立柱建物も火災にあった可能性があり、やはり同時存在が推定される。

また、竪穴住居跡は調査地の北半でのみ検出されておりさらに続くとみられる。今後の調査によっては寺院に付属する集落のあり方がより明確になるものと期待される。

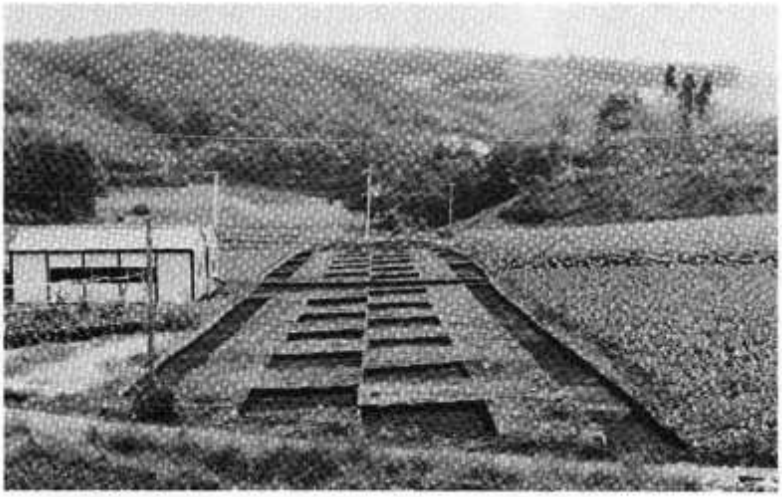
写真図版

黄金堂遺跡航空写真

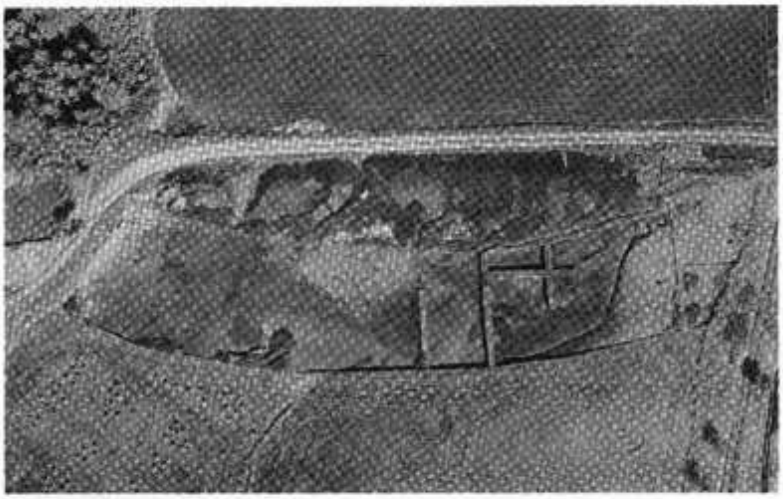


黄金堂遺跡遠景

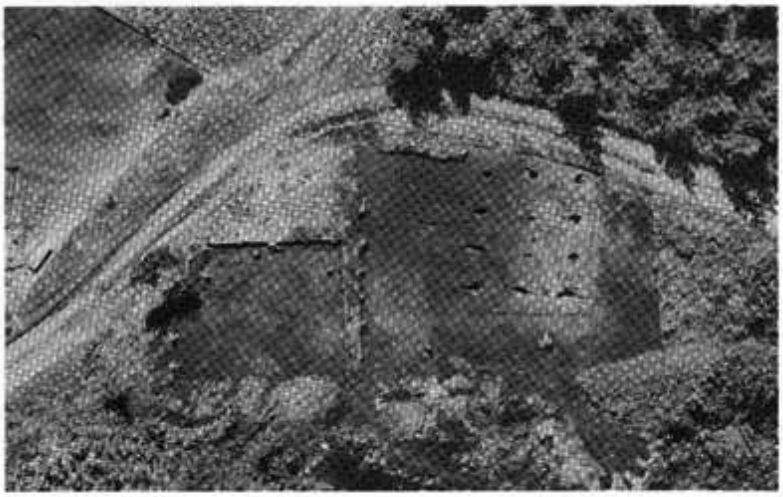
写真図版１　遺跡遠景



A地区

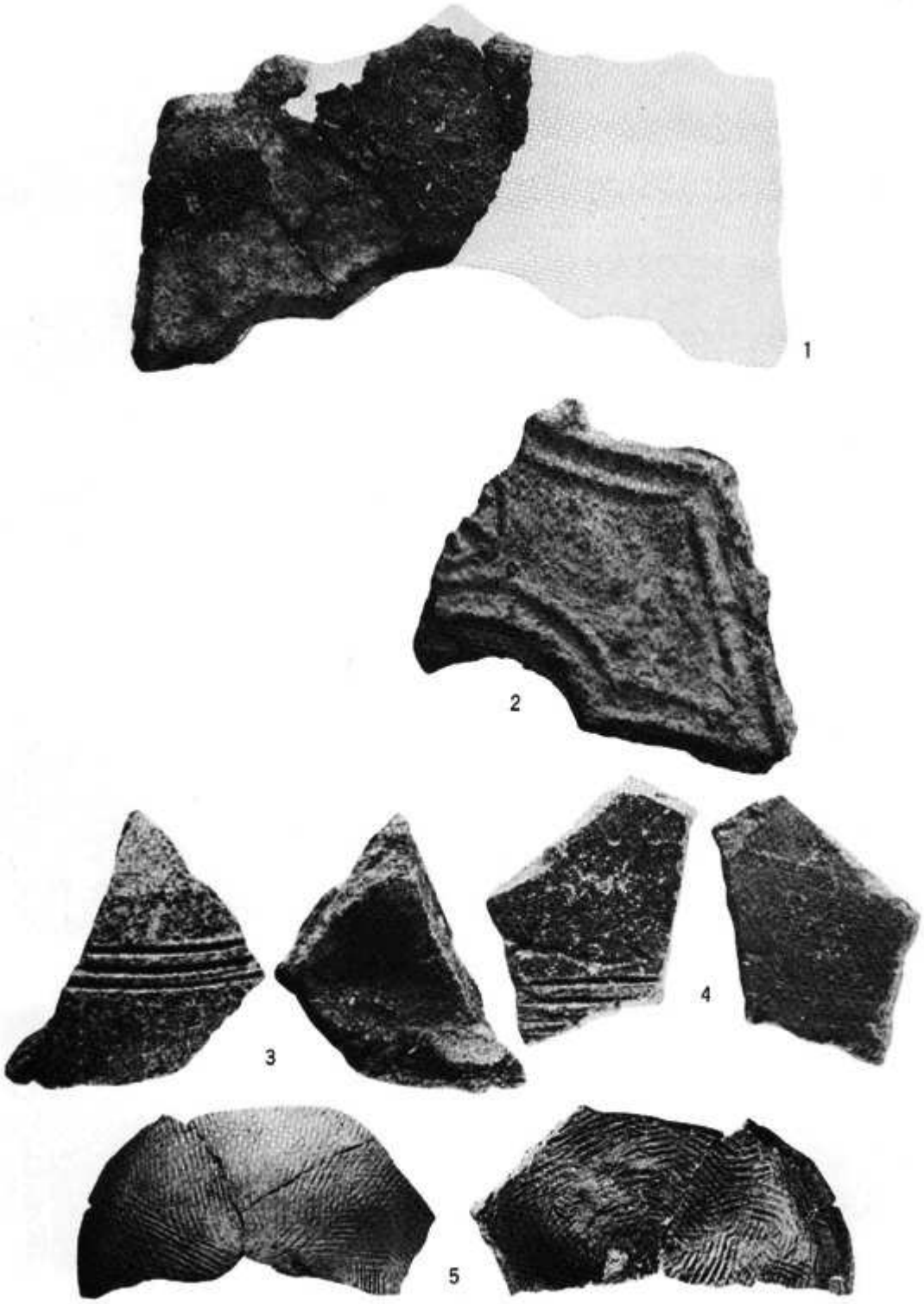


B地区



C地区

写真図版2　調査区全景



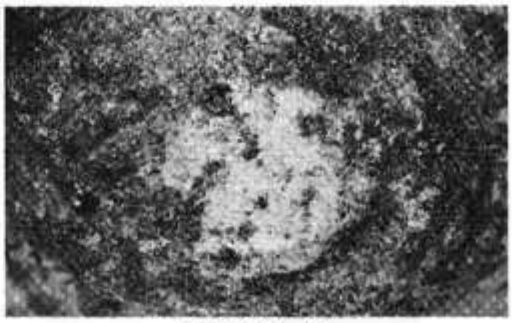
写真図版 3　出土遺物(参考品)

掘立柱建物

C地区調査前

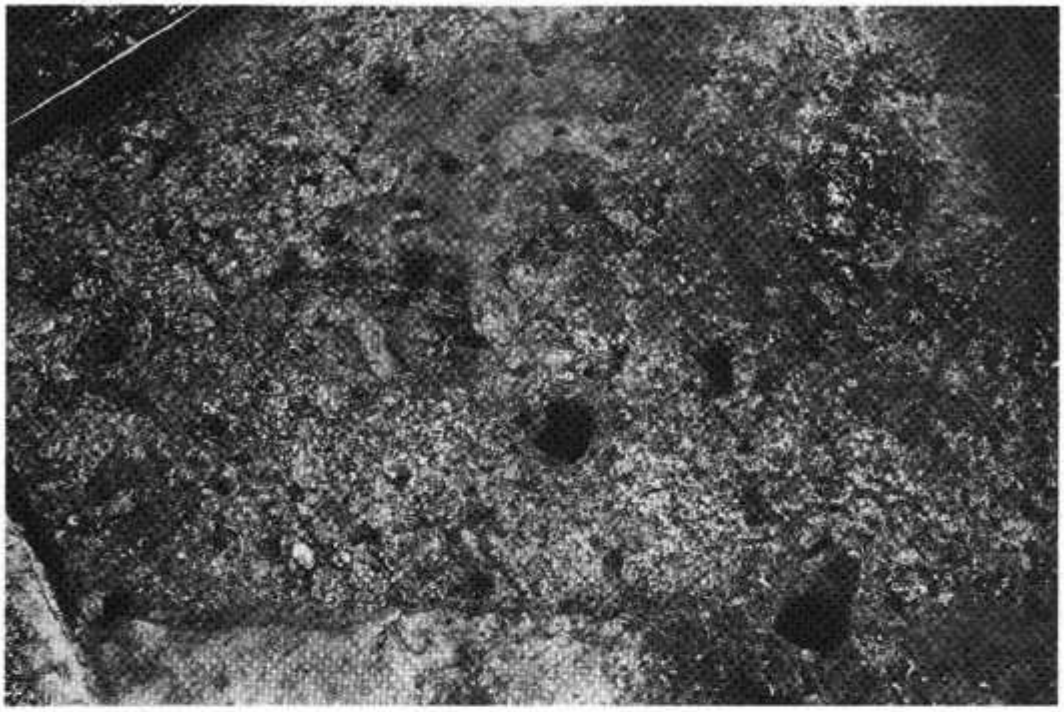
柱穴断面(C-1)

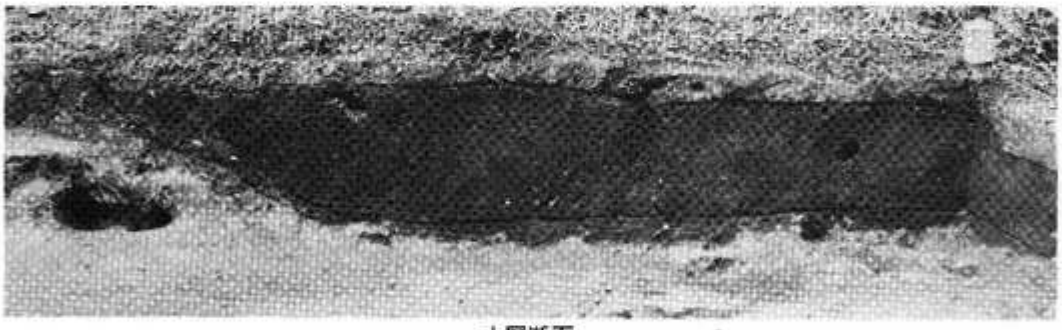
柱穴完掘(C-3)



柱根跡(A-2)

写真図版4　D9掘立柱建物跡





土層断面

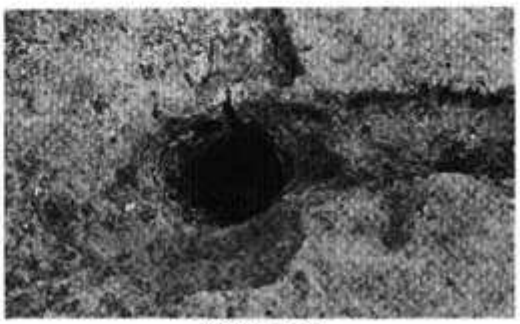
柱穴状ピット

炉跡断面

写真図版 5　A 20竪穴住居跡

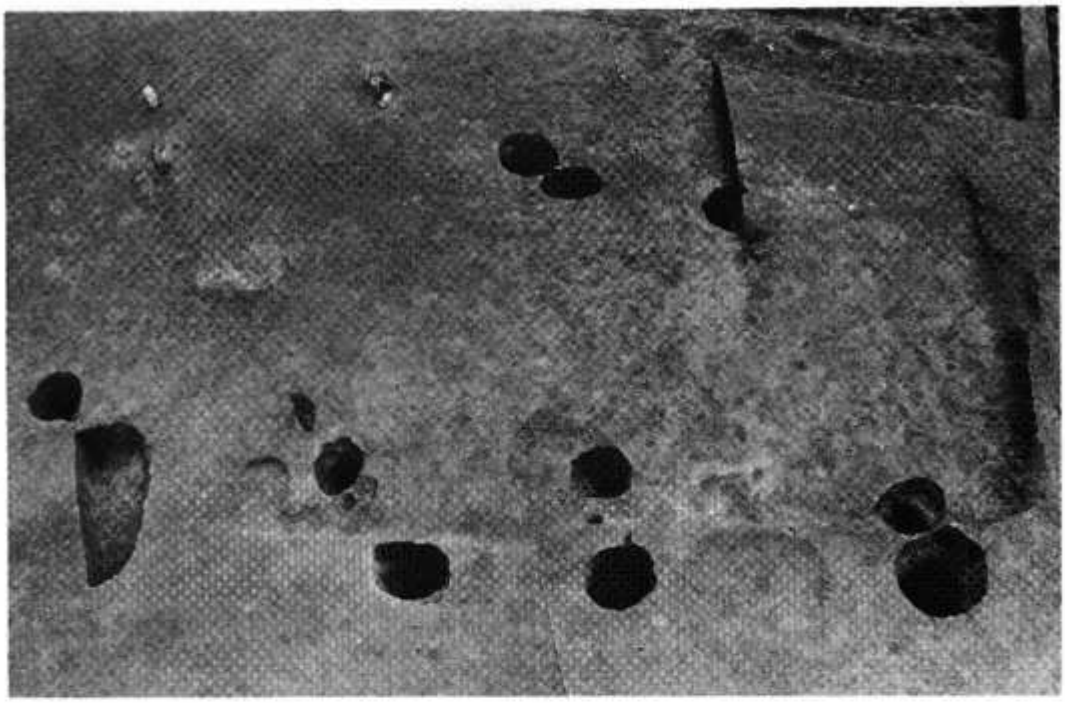
土層断面

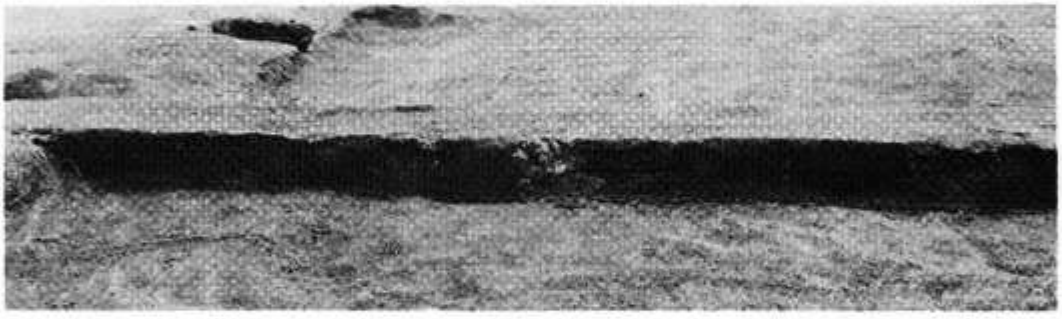
炉跡断面



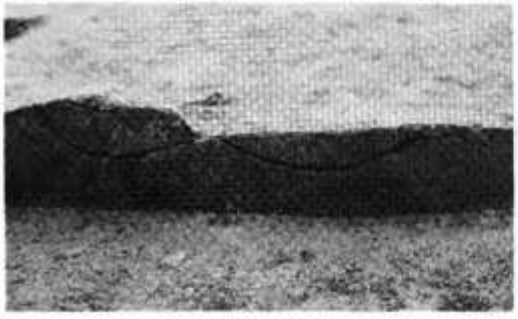
柱穴と周溝

写真図版 6　B 20竪穴住居跡





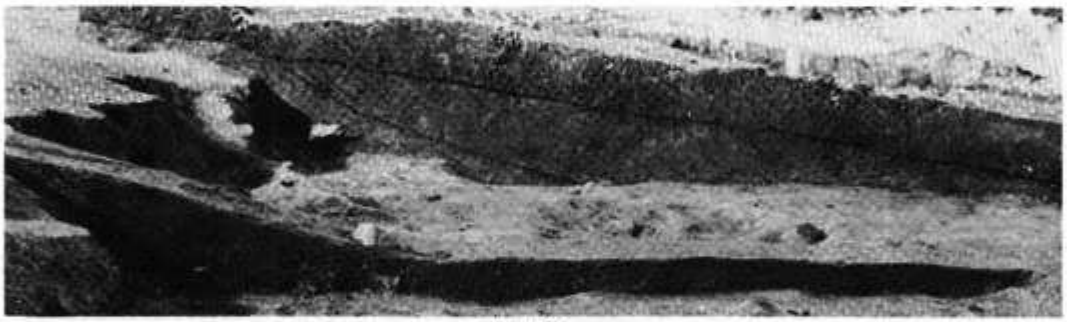
土層断面



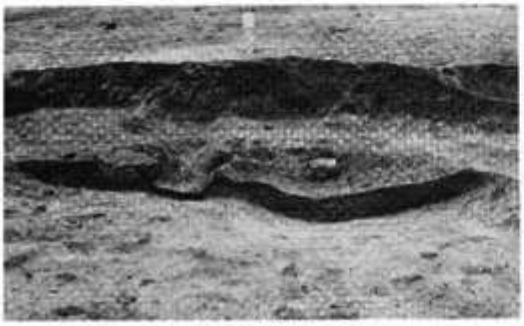
炉跡断面

炉跡断面

写真図版７　Ｂ19竪穴住居跡



土層断面



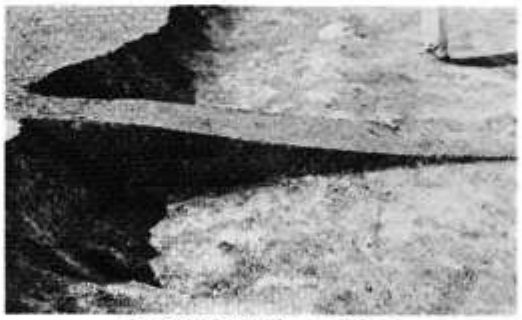
炉跡断面

炉跡断面

写真図版８　Ｄ14竪穴住居跡

C 6 竪穴住居跡

D 16 竪穴住居跡



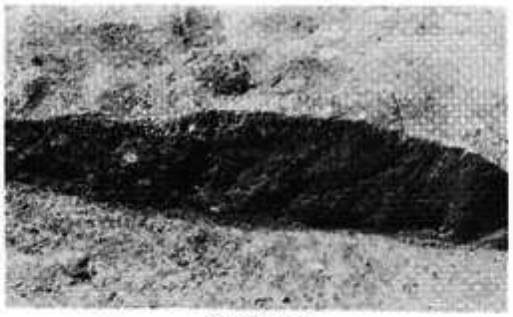
D 16 竪穴住居跡土層断面

D 16 竪穴住居跡炉跡

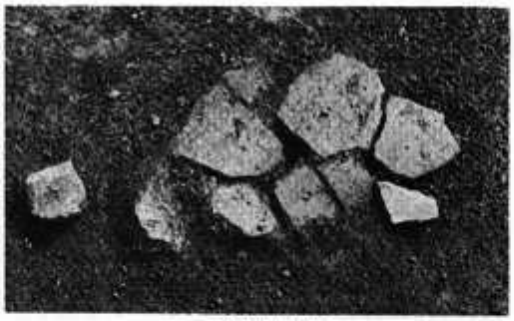
写真図版 9　C 6 竪穴住居跡・D16竪穴住居跡

炉跡

炉跡



炉跡断面



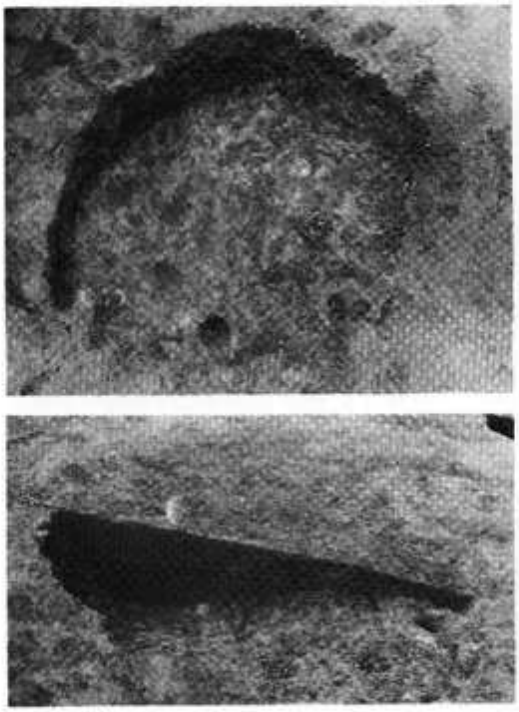
土器出土状況

写真図版10　Ｂ５竪穴住居跡

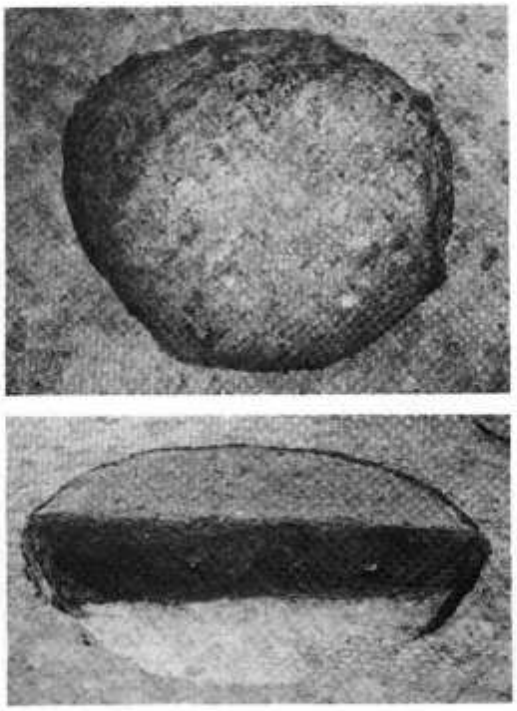
土層断面

土壙断面

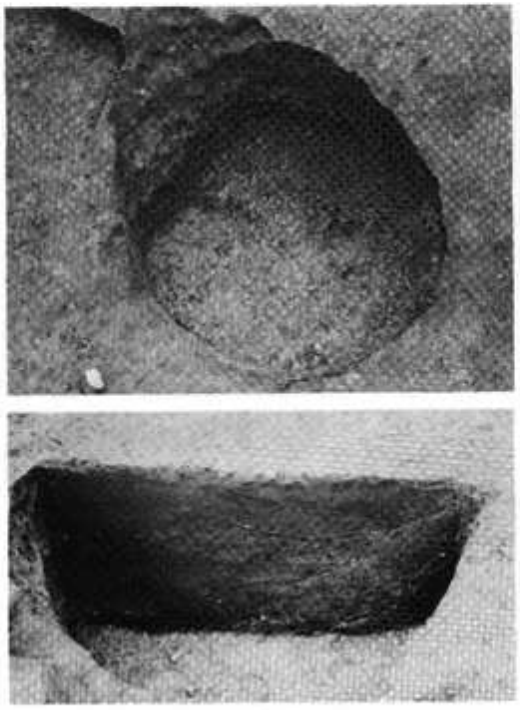
写真図版11　Ｅ４竪穴住居跡



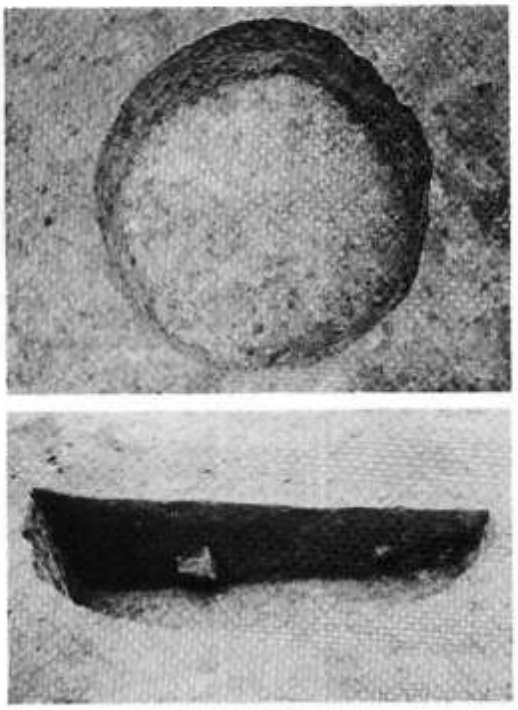
D13土壙



D12土壙

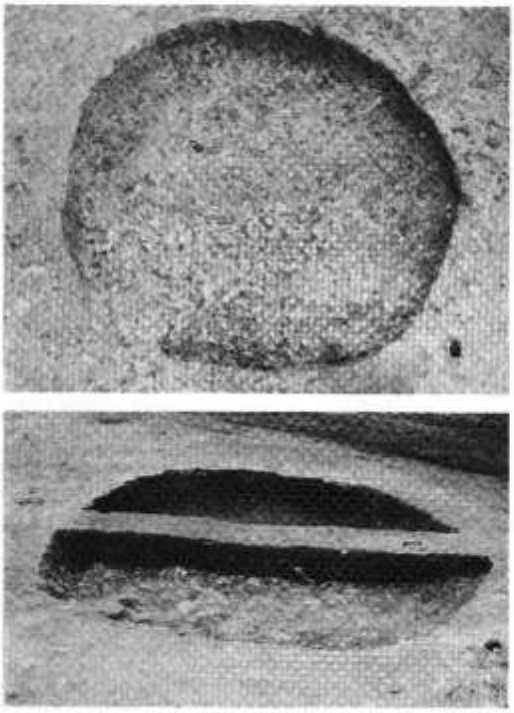


D 7 土壙

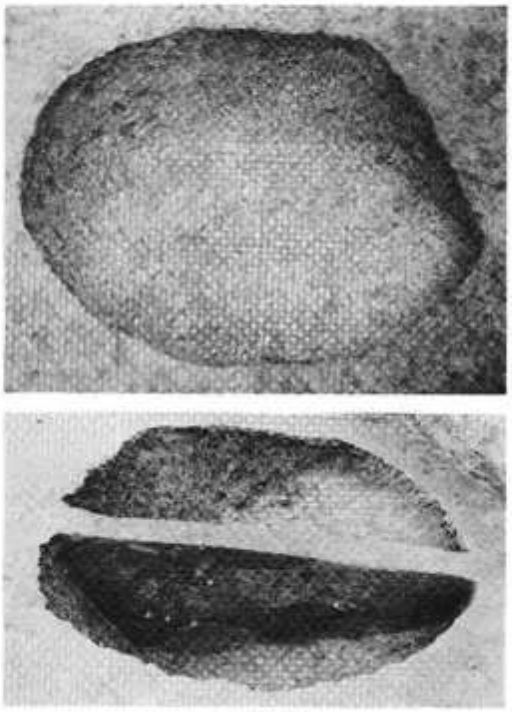


E 6 土壙

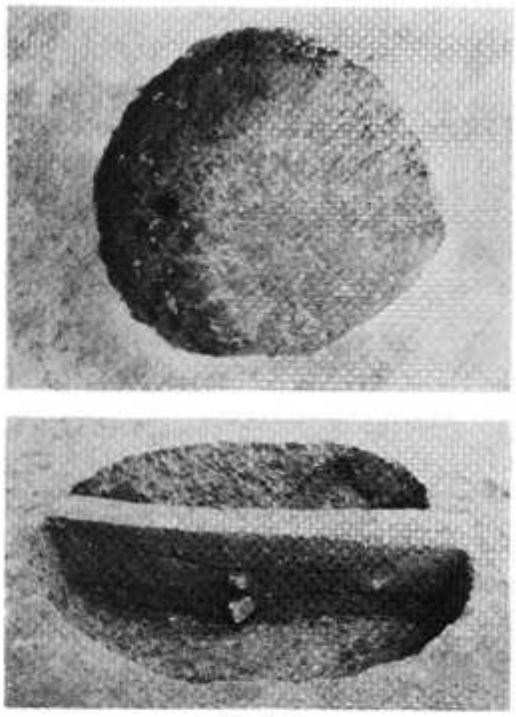
写真図版12　土壙（1）



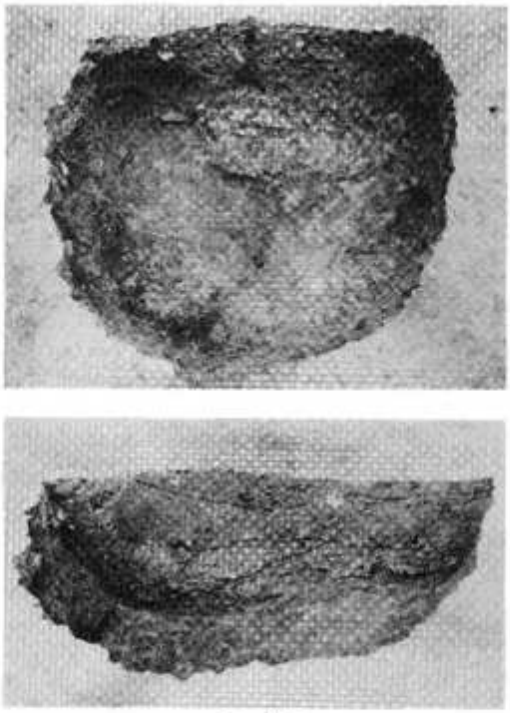
D５土壙



B４土壙



D２土壙



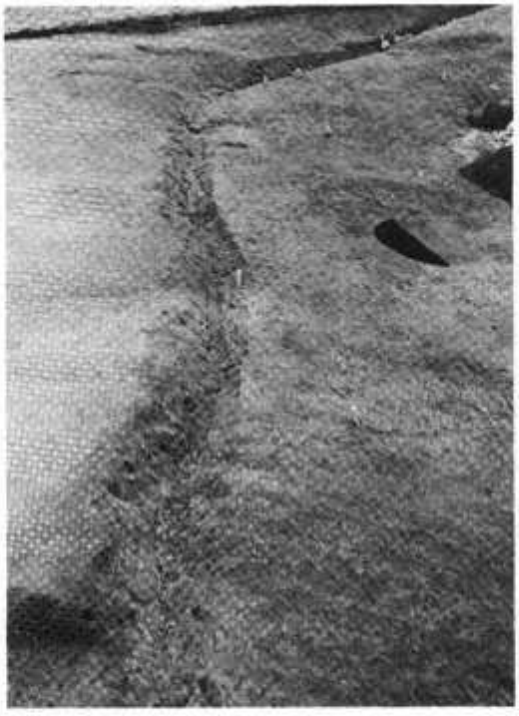
C２土壙

写真図版13　土壙（２）

2溝

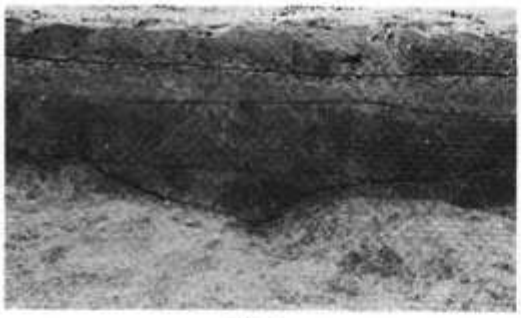
3溝

4溝

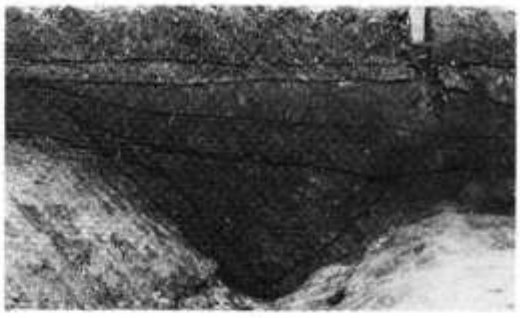


4溝

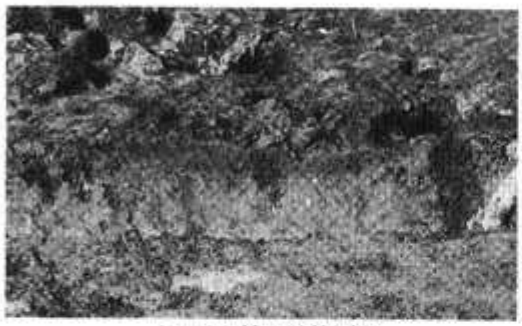
写真図版14　溝跡



2溝断面



4溝断面



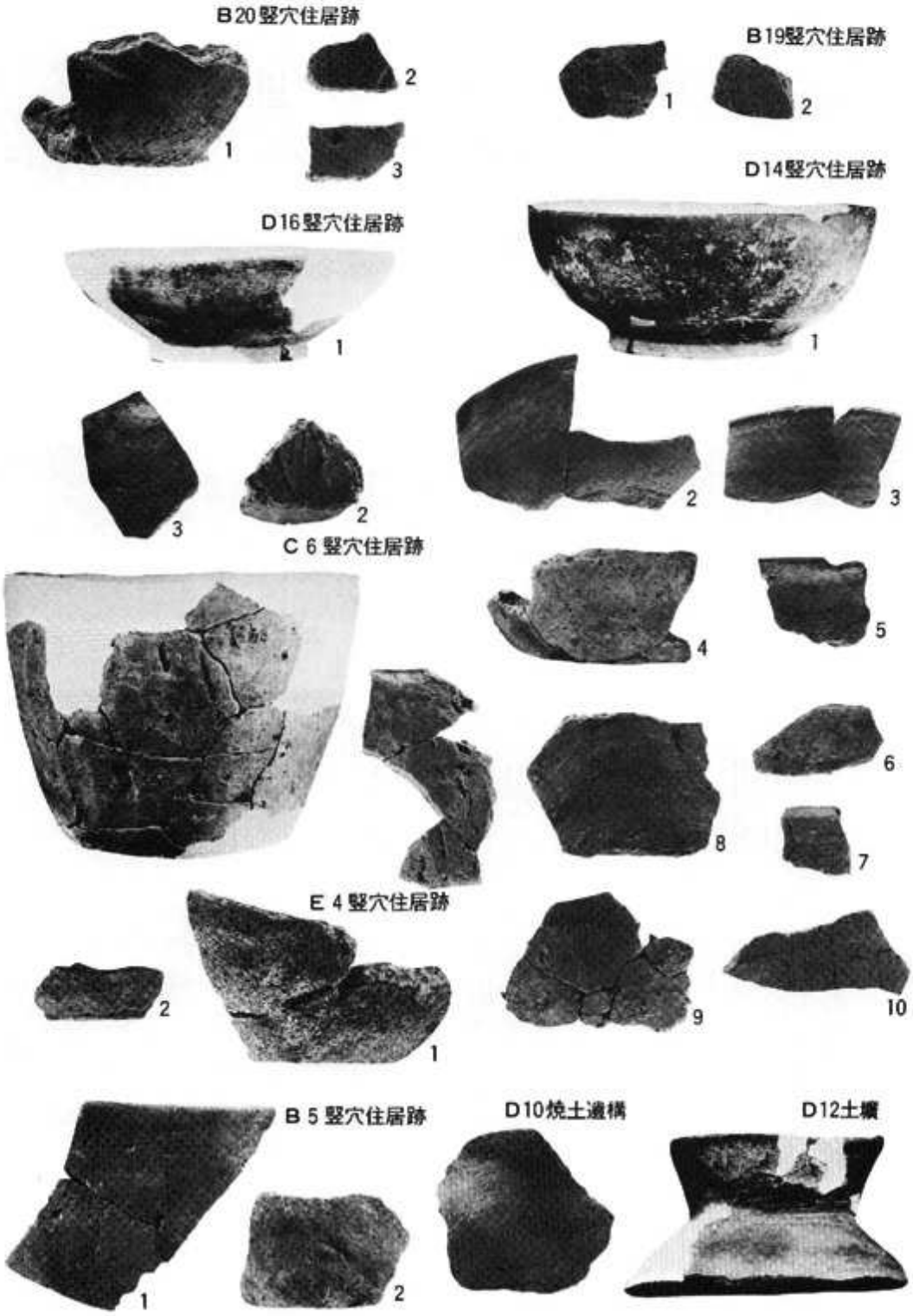
C-E5焼土遺構断面

B-D10焼土遺構断面

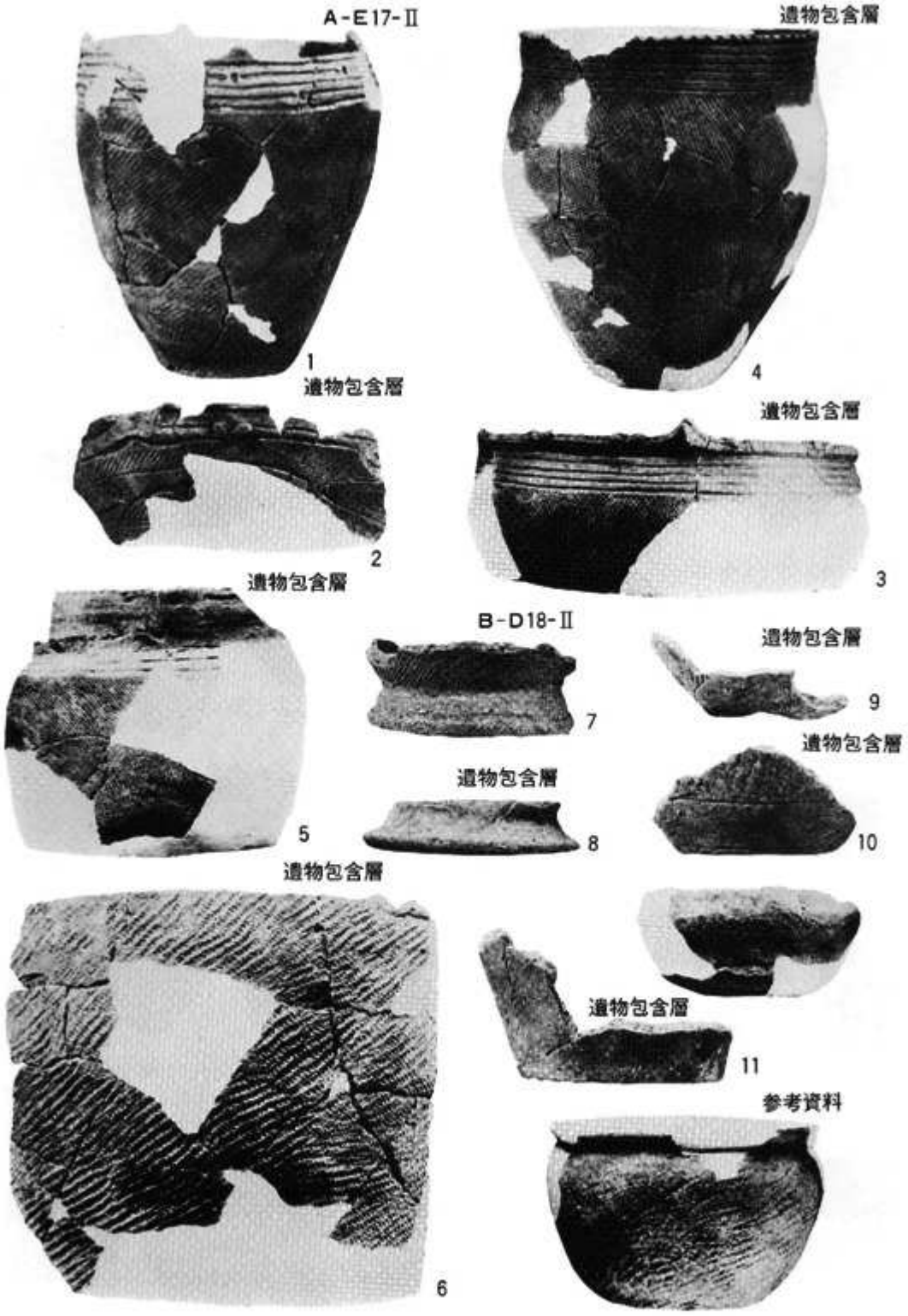
土葬墓

人骨出土状況

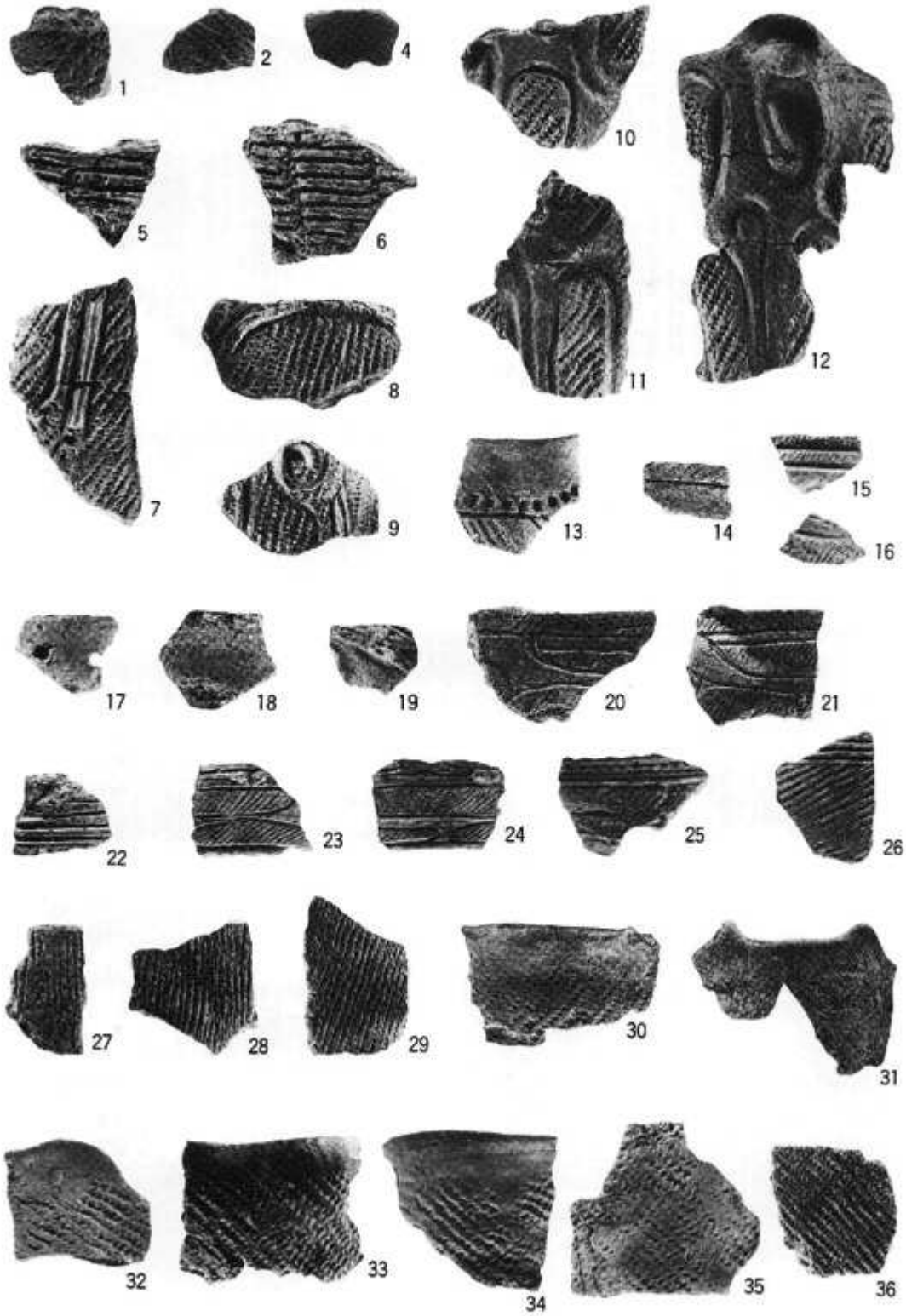
写真図版15　溝跡，焼土遺構，土葬墓



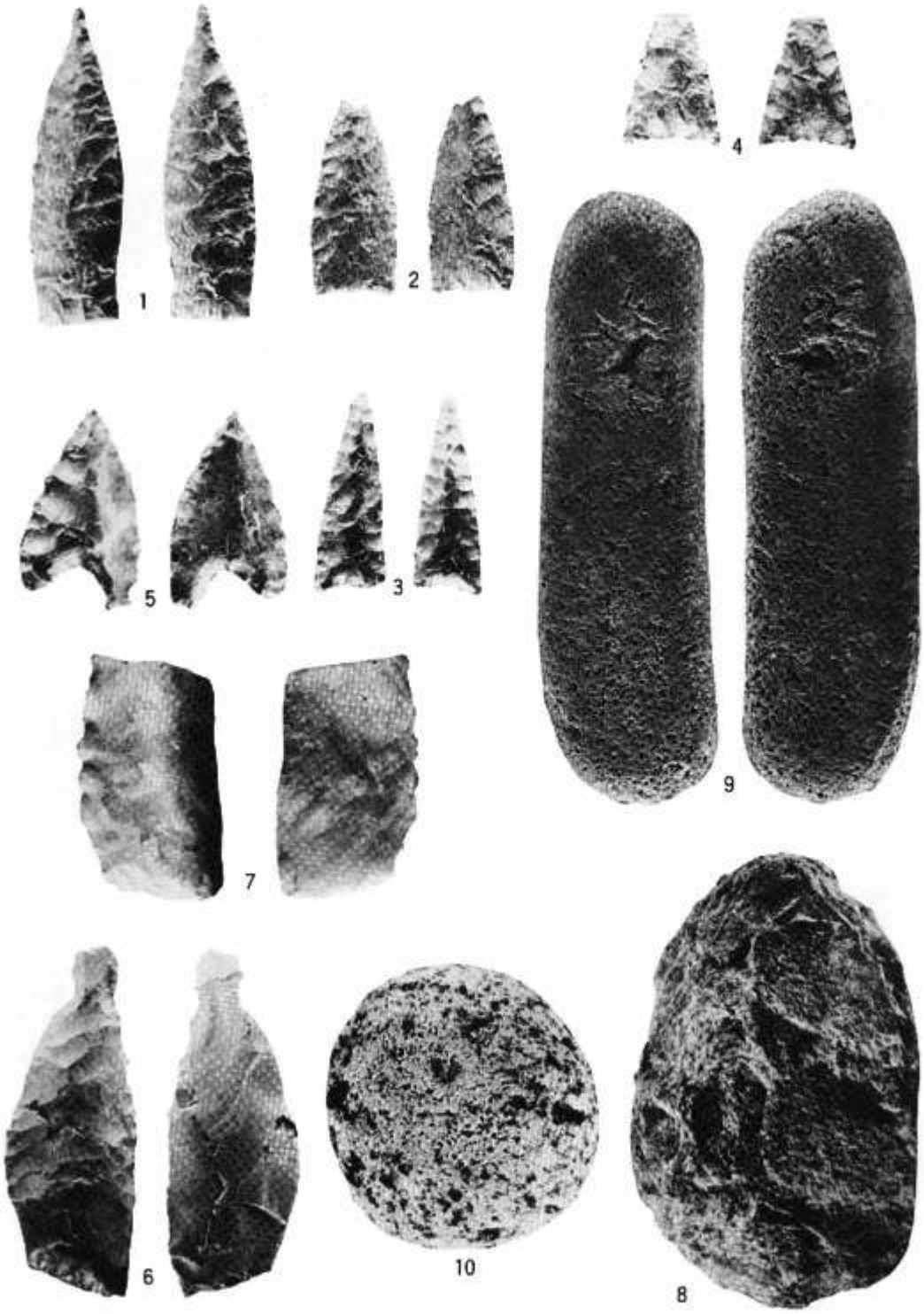
写真図版16　竪穴住居跡等遺物


A-E17-Ⅱ
遺物包含層
1
遺物包含層
4
遺物包含層
2
遺物包含層
3
遺物包含層
B-D18-Ⅱ
遺物包含層
5
7
9
遺物包含層
遺物包含層
8
10
遺物包含層
遺物包含層
11
参考資料
6

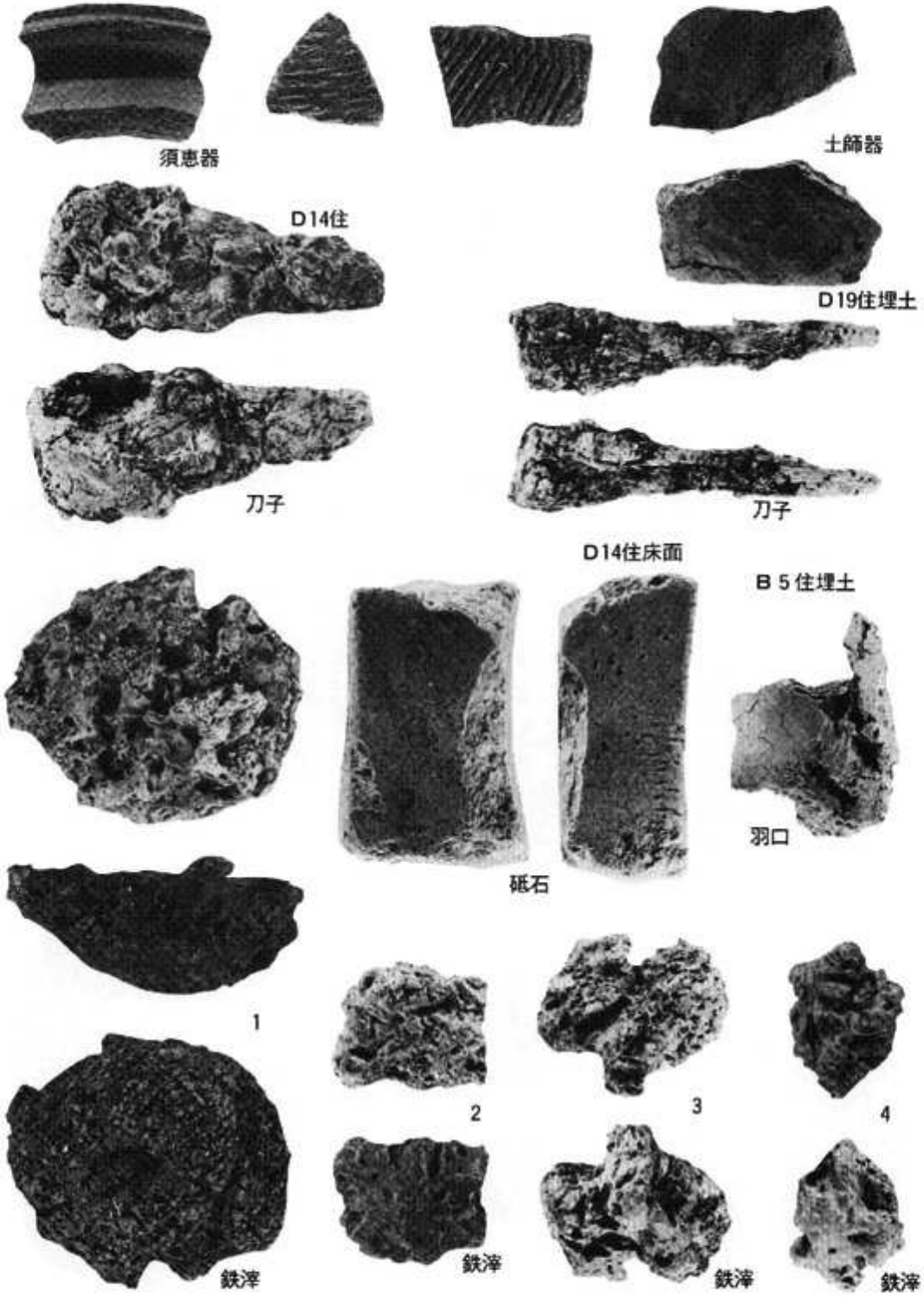
写真図版17　土器


1
2
4
10
5
6
11
12
7
8
9
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

写真図版18　土器



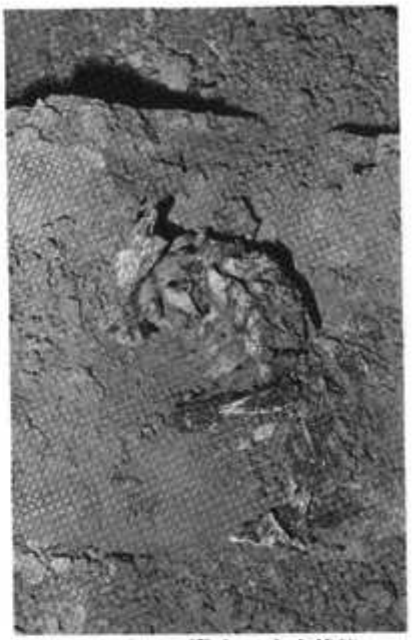
写真図版19　石器



写真図版20　その他の遺物

1．発掘現場
深さ約30cmで、顔面は正面位であるが体幹は横伏位である。下肢は強く屈曲した状態にある。

2．周囲の土塊と共に掘だす。
周囲の土は粘度質である。

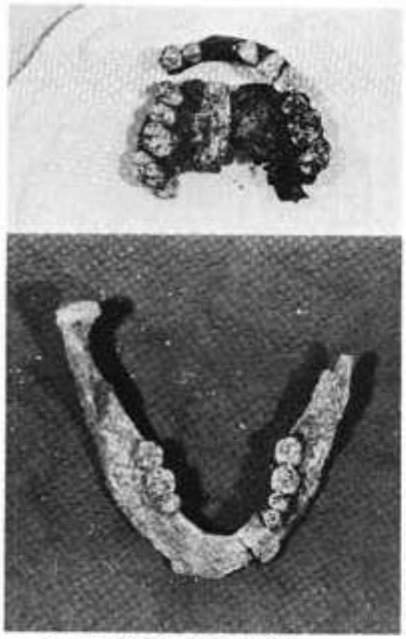


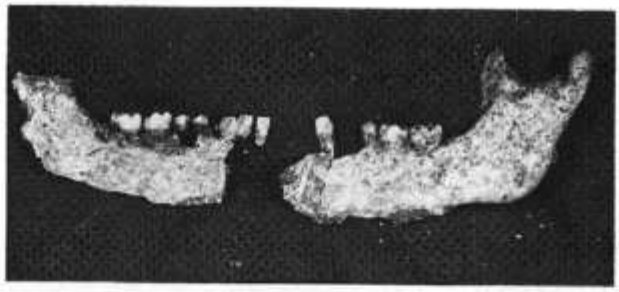
3．頸部及び胸部の出土状態
（頸椎が示されている）

4．左右側大腿骨

5．左右側頸骨および左側腓骨

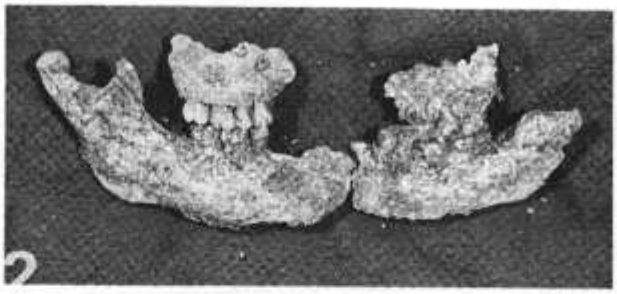
写真図版21　人骨





上下顎臼歯の咬合状態。

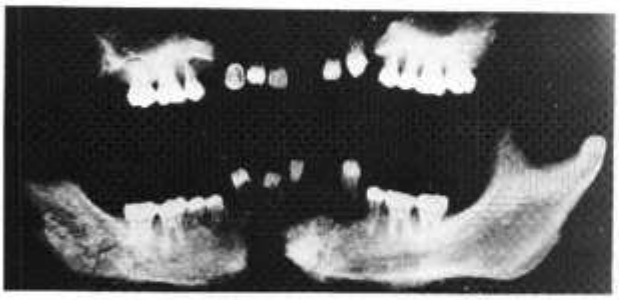
2．下顎骨と下顎歯牙：骨はきゃしゃで角前切痕を認める。



3．外側面(頬側)

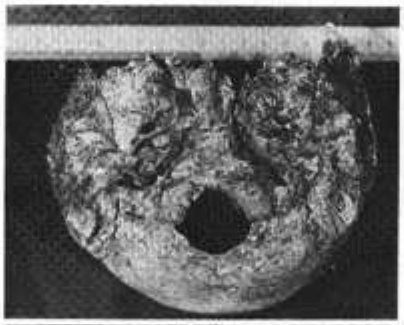
1．上顎骨および下顎骨。
歯列は帯円形をなしている。

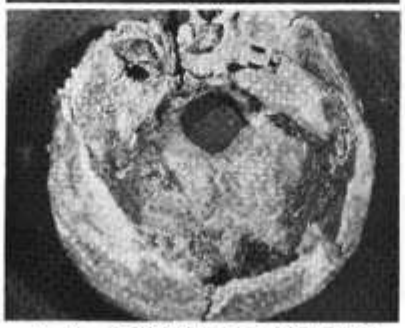
4．内側面(舌側)



5．上下顎のX線像
大臼歯の歯根は全て完成している。第三大臼歯の歯胚は形成されない。

頭蓋冠
6．上:外耳孔が明瞭である。
7．下:頭頂骨が一部存在する。

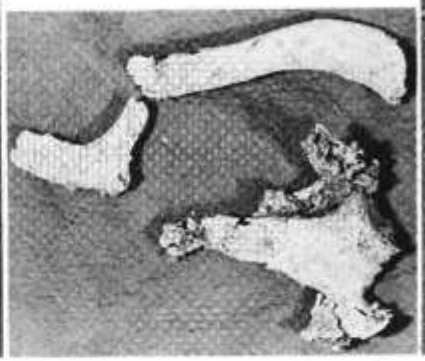




8・9．頭蓋底外面と頭蓋底内面
後頭乳突縫合が明瞭に離れている。

前頭骨眼窩部
10．上頭蓋底内面11．下:眼窩面

写真図版22　人骨



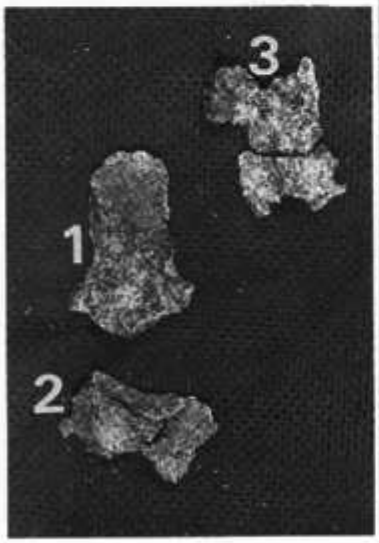
頸椎

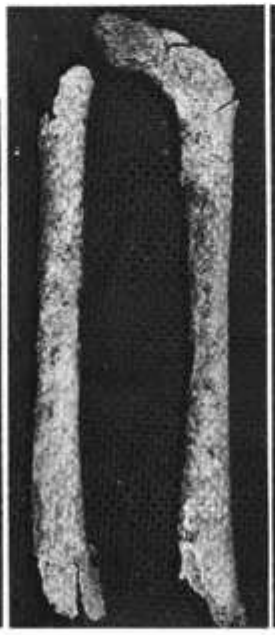
1．左:第一頸椎と第二頸椎の位置関係。第二頸椎が左側に回転している。

2．右:頸椎全体像

3．左:左側鎖骨,第一助骨,肩甲骨

4．右:上腕骨近位部（破損が著しい）





5．骨盤
1．腸骨（耳状面）
2．寛骨臼　3．仙骨

6．左右側大腿骨

7．左右側頸骨と左側腓骨

8．細片となった頭蓋冠を繋ぎあわせた状態。
（中央に前頭稜を含む前頭骨が認められる）

写真図版23　人骨

岩手県埋文センター文化財調査報告書第86集

黄金堂遺跡発掘調査報告書

昭和60年1月25日　印刷
昭和60年1月31日　発行

発行　(財)岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡
字高屋敷
TEL (0196)38−9001
印刷　㈱　熊　谷　印　刷